

---

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

---

# 紀要

## 2018



2020年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

---



〔圖 紙〕 縄文時代後期中葉の炭化クワ  
：津島岡大遺跡第5次調査

〔圖 紙〕 縄文時代後期の定跡  
：津島岡大遺跡第5次調査

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2018

2020年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



## 序

2018年度は、鹿田キャンパスにおいて第28次発掘調査を実施しました。同敷地において1000㎡を超える発掘調査は4年ぶりでしたが、1983年度に発掘調査を開始して以降、35年間にわたる発掘調査成果に、また一つの貴重なピースをはめ込むことができました。その成果は、鹿田遺跡北端の状況を解明する上で重要な手がかりとなり、遺跡全体の評価へとつながります。また、本年度は2014年度に実施した鹿田遺跡第26次調査の報告書1冊を刊行しました。近年は1年に1～2冊の刊行を進めており、その他に残る未刊の発掘報告書についても、刊行に向けて着実にその責務を果たしていく所存です。

調査以外の活動では、学内外の部局あるいは組織との連携が増加した年でもありました。ラオス国立大学への考古学関連物資の支援や、岡山県下における被災文化財のレスキューに取り組む史料ネットへの協力などがあげられます。そのほかにも、展示会では本学の考古学研究室と連携するなど、今後の活動の方向性を考える上で期待される取り組みとなりました。

研究面では、本紀要には4本の研究報告を掲載することができました。これらは、本学構内遺跡における発掘調査報告済みの資料を、改めて取り上げて分析した研究です。縄文時代のマメ資料の年代測定や弥生土器の胎土分析などでは、新たな研究視点や科学的分析を通して、従来の評価を覆す研究成果を提示することとなりました。また、モモの資料は、過去の出土品を総合的に評価したものです。こうした研究には、異分野の研究者との連携も大きな力となっています。

本学構内には、津島岡大遺跡・鹿田遺跡そして福呂遺跡が立地していますが、いずれも全国的にも注目される遺跡です。過去35年間に60回を超える発掘調査で出土した遺物には、今後も研究対象として貴重な資料が数多く含まれています。埋蔵文化財の活用が求められる昨今ですが、研究面での活用も重要であり、本センターとしても積極的に取り組む必要があるでしょう。構内遺跡の発掘調査成果が持つ潜在的な力を、如何に引き出していくか。今後の研究活動において、大いに期待されるところです。

最後になりましたが、センターの諸活動に際して、本学内外の関係機関・各位から様々な形でご協力をいただきました。皆様に改めて感謝申し上げます。次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長 渡邊 和良

副センター長 山本悦世

# 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2018

## 目 次

### 第1章 構内遺跡の調査研究

#### 第1節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第28次調査……………(南健太郎) 1

#### 第2節 試掘・確認調査……………(岩崎志保) 3

#### 第3節 立会調査の概要……………(岩崎) 4

#### 第4節 構内遺跡に関する研究

1. 津島岡大遺跡から出土した植物種子の再検討  
……………(那須浩郎・山本悦世・岩崎志保・山口雄治・富岡直人・米田 稔) 12
2. 弥生・古墳時代におけるモモの利用について－岡山県地域南部を中心に－……………(南) 27
3. 鹿田遺跡出土の香東川下流域「産」／「系」土器について……………(大久保徹也) 35
4. 鹿田遺跡出土管玉の原石、遺物成分群同定……………(薬科哲男) 42

### 第2章 調査資料の整理および公開・活用

#### 第1節 調査資料の整理・保存処理……………(山口) 57

#### 第2節 調査成果の公開・活用

##### 1. 公開・展示

- a. 第19回キャンパス発掘成果展「The 鹿田庄」……………(岩崎) 58
- b. 特別公開「倉敷市真備町二万大塚古墳の世界」……………(岩崎) 59
- c. 第7～9回公開講座……………(野崎貴博) 59
2. 資料・施設等の利活用……………(山口) 60

#### 第3節 調査研究員の個別研究活動

1. 外部資金獲得状況…………… 62
2. 論文・資料報告ほか…………… 62
3. 研究発表・講演ほか…………… 63

### 第3章 2018年度における調査・研究のまとめ……………(山口) 65

### 資 料

1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程・組織等…………… 66
2. 2017年度以前の調査・研究一覧…………… 71
3. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター30年間の業務関連資料…………… 91

## 挿 図 目 次

### 第1章

図1	調査地点の位置	1
図2	調査地点の位置	3
図3	土層柱状図と写真	3
図4	既調査地点との位置関係	4
図5	調査地点の位置	5
図6	土層写真測量図	5
図7	土層土層断面図	6
図8	2018年度の調査地点【1】 -津島地区-	9~10
図9	2018年度の調査地点【2】 -鹿田地区-	11
図10	津島岡大遺跡から出土した種子(1)	14
図11	津島岡大遺跡から出土した種子(2)	15
図12	津島岡大遺跡から出土した種子(3)	16
図13	津島岡大遺跡から出土した種子(4)	17
図14	津島岡大遺跡から出土した種子(5)	18
図15	津島岡大遺跡から出土した種子(6)	19
図16	縄文時代以降のアズキ(広義)の 種子サイズ(体積)変化	22
図17	縄文時代以降のダイズ(広義)の 種子サイズ(体積)変化	22
図18	香東川下流域「産」土器／「系」土器と 胎土中砂礫配合状態	36
図19	浦項碧玉、浦項緑色凝灰岩、花仙山碧玉の 蛍光X線スペクトル	42

図20	古墳(絨縄文)時代の碧玉製管玉の 原材料使用分布圏および碧玉・碧玉様岩の 原産地	43
図21	鹿田遺跡出土緑色凝灰岩製管玉の 蛍光X線スペクトル	46
図22	碧玉原石のESRスペクトル	47
図23	碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル	47
図24	鹿田遺跡出土管玉および鬼塚C石材群の ESR信号(Ⅲ)のスペクトル	48

### 第2章

図25	展示会の様子	58
図26	特別展示ポスター	59
図27	公開講座の様子	60

### 資料

付図1	岡山大学の位置と周辺の遺跡分布	86
付図2	津島地区全体図	86
付図3	2017年度以前の調査地点【1】 -津島地区-	87~88
付図4	2017年度以前の調査地点【2】 -鹿田地区-	89
付図5	2017年度以前の調査地点【3】 -三朝地区-	90
付図6	2017年度以前の調査地点【4】 -東山地区-	90
付図7	2017年度以前の調査地点【5】 -倉敷地区-	90

# 目 次

## 第1章

表1	2018年度調査一覧（津島地区）	7
表2	2018年度調査一覧（鹿田地区）	7
表3	再検討を行った植物種子資料の一覧	12
表4	マメ資料の再同定結果	13
表5	推定される校正年代と注記	20
表6	計測値一覧	26
表7	鹿田遺跡出土桃核一覧	28
表8	上東遺跡出土桃核一覧	29
表9	津島遺跡出土桃核一覧	30
表10	百間川原尾鳥遺跡出土桃核一覧	31
表11	百間川沢田遺跡出土桃核一覧	31
表12	百間川兼基遺跡出土桃核一覧	32
表13	百間川今谷遺跡出土桃核一覧	32
表14	百間川米田遺跡出土桃核一覧	33
表15	薄片観察法 土器胎土配合砂礫 鉍物／岩石種の粒径別カウント	37
表16-1	各碧玉の原産地における原石群の 元素比の平均値と標準偏差	45
表16-2	各原石産地不明碧玉玉類、玉材の 遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	49
表16-3	各原石産地不明碧玉玉類、玉材の 遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	50
表16-4	各原石産地不明碧玉玉類、玉材の 遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	51
表16-5	各原石産地不明碧玉玉類、玉材の 遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	52
表16-6	各原石産地不明碧玉玉類、玉材の 遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	53
表16-7	各原石産地不明碧玉玉類、玉材の 遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	54
表16-8	各原石産地不明碧玉玉類、玉材の	

	遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	55
表16-9	各原石産地不明碧玉玉類、玉材の 遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	56
表17	鹿田遺跡出土管玉の非破壊分析による 化学組成濃度	46
表18	鹿田遺跡出土管玉の元素比分析結果	46
表19	鹿田遺跡出土管玉の石材産地同定	47
<b>第2章</b>		
表20	2018年度分析一覧	57
表21	2018年度非常勤講師の委嘱依頼	61

## 資料

付表1	1982年度以前の構内主要調査 (1980～1982年度)	71
付表2	2017年度以前の構内主要調査 (1983～2017年度)	71
付表3	埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物 概要（2019年3月現在）	81
付表4	埋蔵文化財調査室刊行物	83
付表5	埋蔵文化財調査研究センター刊行物 (2019年3月まで)	83
付表6	自然科学的分析一覧（1983～2017年度）	92
付表7	遺物の保存処理（木製品ほか） (1983～2017年度)	96
付表8	展示会実施状況	97
付表9	公開講座実施状況	97
付表10	科学研究費・外部資金採択状況 (2008～2017年度)	98
付表11	調査とスタッフの推移 (2008～2017年度)	98
付表12	埋蔵文化財調査研究センター運営委員・ 調査研究専門委員・教職員一覧 (2008～2017年度)	99



## 例 言

1. 本紀要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学構内において2018年4月1日から2019年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果およびセンターの活動についてまとめたものである。
2. 本紀要において報告している津島岡大遺跡は岡山市北区津島中一丁目～三丁目1-1、鹿田遺跡は岡山市北区鹿田町二丁目5-1に所在する。
3. 執筆者は、目次に記載すると共に、原則として、本センター教員の場合は文主に、本センター以外の場合は文頭に記した。
4. 編集は山本悦世副センター長・清家章調査室長の指導のもと、山口謙治が担当した。

## 凡 例

1. 岡山大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、2002（平成14）年4月1日から施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用したが、それ以前の日本測地系による構内座標の相対的位置関係を保持したまま座標値のみ世界測地系に変換している。各地区の座標原点と区割りは次のように定めている。
  - 1) 津島地区では、国土座標第V座標系（日本測地系）の座標北を基軸とし、 $(X, Y) = (-144,156,4617\text{m}, -37,246,7496\text{m})$ （世界測地系）を起点とする構内座標系を設定している。構内座標の内部は一辺50mの方格で分割した区画を用いている。
  - 2) 鹿田地区では、国土座標第V座標系（日本測地系）の座標北より東に15°振り出した座標軸を基軸とし、 $(X, Y) = (-149,456,3718\text{m}, -37,646,7700\text{m})$ （世界測地系）を起点とする構内座標系を設定している。構内座標の内部は一辺5mの方格による地区割りを用いている。
  - 3) 棒田中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標（日本測地系）の座標北を、その他は磁北を用いている。
2. 岡山大学敷地内で調査地点を示す場合、周知の遺跡にあたる場合はその遺跡名を、それ以外の場合は、地区名を付して示す。
3. 調査名称は、「発掘調査」に分類したものは、遺跡ごとに調査順に従って次番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものは、原因、原因となった工事名を使用している。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは、「試掘・確認調査」に分類する。
4. 付表に記載した既往の調査一覧は、掘削深度が中世層以下に達するか、あるいは遺構などが確認された調査のみを掲載している。未掲載分も含め、すべてのデータは、当センターにおいて保管している。
5. 本文などで使用している調査番号のうち、2018年度のは表1・2、2017年度以前のは付表2と一致する。
6. 本紀要に掲載の地形図（付図1）は、岡山市地図を複写したものである。
7. 土層註記において、特徴的な包含物・事項については括弧内に記載した。



# 第1章 構内遺跡の調査研究

## 第1節 発掘調査の概要

### 1. 鹿田遺跡第28次調査 (アメニティモール新営、調査番号1、鹿田AG～AS31～41区)

**調査期間** 2018年11月19日～2019年9月18日

1 工区：2018年11月19日～12月11日（造成土除去）、12月12日～2019年3月27日（発掘調査）

2 工区：2019年4月1日～5月27日（造成土除去）、5月29日～9月18日（発掘調査）

**調査面積** 2940m<sup>2</sup>（1工区1035m<sup>2</sup>、2工区1905m<sup>2</sup>）

**調査担当** 南健太郎（助教、主任）、野崎貴博（助教）、岩崎志保（助教）

**遺構・遺物**

**【遺構】** 弥生時代：溝1・土坑4、平安時代～鎌倉時代：河道2・井戸10・土坑6・溝7・柱穴  
江戸時代以降：土坑35・溝6・畝状遺構・畦畔

**【遺物】** 総数122箱（27リットル容量の箱を換算して）

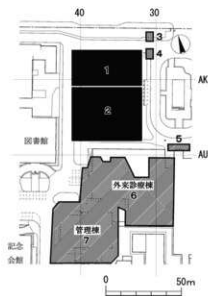
<内訳>土器・石器類85箱（弥生～近世・近代）、木器37箱

#### a. 調査に至る経緯と経過

##### (1) 調査に至る経緯

岡山大学鹿田キャンパスでは、2017年度に外来診療棟北側にアメニティモールを建設する計画がたてられた。建設予定地は立体駐車場として利用されていたが、簡易な構造であったため、建設に伴う発掘調査はおこなわれていなかった。これに対し、アメニティモールは4階建てで、1階がテナント、2～4階が立体駐車場という計画であり、包含層以下まで工事掘削が及ぶこととなった。建設予定地周辺では、第1次調査（外来診療棟）<sup>1)</sup>で弥生時代中期後半以降の集落跡が確認されており、鹿田遺跡で最も高い遺構密度を示している。また建設予定地の北東角のすぐ東側で実施された第21次調査B地点（外来棟周辺他環境整備）<sup>2)</sup>では平安時代の河道が確認され、鹿田遺跡の北限である可能性が指摘されている。このように建設予定地内には集落とその外側の境界域にあたるということが予想され、鹿田遺跡における各時代の集落範囲や土地利用を考えるうえで重要な地点であると考えられた。このような状況から建設予定地において発掘調査を実施することとなった（図1）。

なお発掘調査にあたっては排土の搬出や既存建物の基礎撤去の都合上、北側の1工区、南側の2工区に分け、前者から調査を進めることとなった。



1. 本調査地点（1工区）
2. "（2工区）
3. 第21次調査A地点（外来棟周辺環境整備）
4. 第21次調査B地点（外来棟周辺環境整備）
5. 第21次調査D地点（外来棟周辺環境整備）
6. 第1次調査地点（外来診療棟）
7. 第5次調査地点（管理棟）

図1 調査地点の位置（縮尺1/2,500）

## (2) 調査の経過

<1 工区> 造成土除去を2018年11月19日から開始し、12月11日に終了した。調査区中央および東には包含層よりも深くまで達している支障物があった。これらの撤去により調査区南半には包含層の下に粗砂層が広がっていることが確かめられた。これら以外の部分では近代層以下までおよぼ支障物は少なく、造成土除去の段階で近代の畦畔や畝状遺構、江戸時代の溝が確認された。

発掘調査は2018年12月12日から開始し、近代・江戸時代の調査から着手した。江戸時代の溝は、幅が広く、深さも包含層より下の粗砂層まで達しており、有機質の遺物（漆椀や木製品）も出土した。鎌倉時代では調査区中央で土坑が2基確認され、両者とも底に曲物が据えられていた。ただし残存状態は非常に悪く、1基は曲物の痕跡が残存するのみであった。かろうじて曲物の全体を残していたもう1基も、形を保った状態での取り上げはできなかった。平安時代前半では調査区北半で北に向かって標高が低くなる河道が確認され、この時期の鹿田遺跡の北限を示すデータが得られた。調査区北半は河道の遺物包含層、それ以外では基盤となる粗砂層上面まで掘削し、2019年3月27日に終了した。

<2 工区> 造成土除去を2019年4月1日から開始した。調査区南半には旧外来診療棟の建物基礎が残存していたため、4月8日から5月8日にかけてこれらを圧砕により撤去した。その後、調査区全体の造成土除去をすすめ、5月27日に終了した。

発掘調査は5月29日から開始した。2工区は、遺物包含層のベースとなる土が南北で異なっており、調査区の南側約1/4が粘質土、それよりも北側は粗砂であった。造成土除去時に1工区から続く江戸時代の溝が確認されていたため、溝の掘削から開始した。江戸時代の遺構としては他に土坑も35基確認された。鎌倉時代では鹿田キャンパス全体に展開する屋敷地の北端を示す河道が確認された。河道は調査区北半を南東から北西に向けて走っており、1工区南端の西半へと続く。河道以南では調査区中央西端で井戸がまとまって確認されたことが注目される。底面に曲物を設置した井戸が多く、8点の曲物が出土した。また方形板組の井戸枠を有するものもあり、豊富な木製品が得られた。平安時代前期や弥生時代の遺構も確認されたが、遺構数は少なかった。調査区南側の微高地では弥生時代の包含層まで、北側ではベースの粗砂層上面まで掘削し、9月18日に調査を終了した。なお8月31日には現地説明会を開催し、160名の参加者を得た。

本発掘調査は遺構・遺物が多く確認された2工区の調査が2019年度の事業であったため、調査の概要は次号で報告することとする。調査成果の一部は2019年に刊行した当センターの「センター報」No.62<sup>3)</sup>に掲載している。

(南 健太郎)

## 註

- 1) 吉留秀敏・山本悦世編1988『鹿田遺跡 I』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3号
- 2) 光本順2012「鹿田遺跡第21次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- 3) 南健太郎2019「鹿田庄北限の姿 鹿田遺跡第28次調査（アメニティモール新営）」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』No.62

## 第2節 試掘・確認調査

## 1. グッドジョブセンター増築に伴う試掘・確認調査（調査番号1、津島地区BD15）

## a. 調査の経過

岡山大学津島キャンパスに位置するグッドジョブセンターの南側に同センターの増築が計画された。予定地周辺では北東部に創立五十周年記念館（津島岡大遺跡第27次調査）、東側に事務局本部棟（同第26次調査）等の建設に伴う発掘調査が実施されているが、新たな調査データの収集が必要との判断から、計画地内で1か所の確認調査を行うこととした。調査は2019年1月15日に行い、調査員1名が担当した。

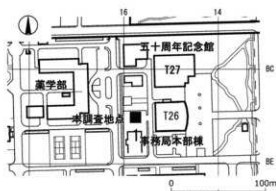


図2 調査地点の位置（縮尺1/4,000）

## b. 調査の成果

## (1) 調査地点の位置と経過

調査地点は津島地区南西部に位置する、グッドジョブセンターの南側である（図2）。試掘坑は2.0×1.5mで設定し、現地表面からの深さ2.6mまでの土層堆積状況を確認した。

## (2) 層序

土層は14層に分けた（図3）。土層の時期は周辺の調査成果に基づき記した。

1層 近現代の造成土である。上面の表高4.40mであり、厚さ1.55mである。

2層 淡灰色砂質土である。上面高は2.94mであり、厚さ0.08mを測る。近代の耕作土である。

3層 黄褐色砂質土である。上面高は2.86m、厚さ0.03mを測る。

4層 淡灰褐色砂質土である。上面高は2.83m、厚さ0.06mを測る。

5層 淡黄灰褐色砂質土である。上面高は2.77m、厚さ0.05mを測る。

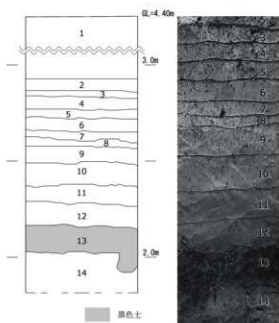
6層 灰褐色砂質土である。上面高は2.72m、厚さ0.07mを測る。

7層 淡灰褐色砂質土である。上面高は2.65m、厚さ0.05mを測る。やや粘質が見られる。

8層 灰褐色砂質土である。上面高は2.60m、厚さ0.05mを測る。7層に比して粘質強い。

以上の3～8層は近世の耕作土層と考えられる。いずれも砂質で、鉄分・マンガンを多く含む。

9層 淡茶灰褐色粘質土である。上面高は2.55m、厚さ0.07mを測る。中世の耕作土と考えられる。



- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1. 造成土      | 8. 灰褐色砂質土   |
| 2. 淡灰色砂質土   | 9. 淡茶灰褐色粘質土 |
| 3. 黄褐色砂質土   | 10. 灰褐色粘質土  |
| 4. 淡灰褐色砂質土  | 11. 淡褐色粘質土  |
| 5. 淡黄灰褐色砂質土 | 12. 褐色粘質土   |
| 6. 灰褐色砂質土   | 13. 暗茶褐色粘質土 |
| 7. 淡灰褐色砂質土  | 14. 黄褐色砂質土  |

図3 土層柱状図と写真（縮尺1/20）

10層 灰褐色粘質土である。上面高は2.48m、厚さ0.12mを測る。古代の耕作土と考えられる。

11層 淡褐色粘質土である。上面高は2.36m、厚さ0.1mを測る。

12層 褐色粘質土である。11層に近似し締まりがある。上面高は2.26m、厚さ0.11mを測る。

11～12層は弥生～古墳時代層と考えられるが、出土遺物はなく詳細な時期は不明である。

13層 暗茶褐色粘質土である。上面高は2.15m、厚さ0.13mを測る。津島地区で確認される「黒色土」層にあたり、弥生時代早期～前期の時期に比定される。

14層 黄褐色砂質土である。上面高は2.02mで、1.8mまで掘削した。厚さは0.22m以上である。

### c. まとめ

本調査地点では土層の堆積状況を確認し、遺構・遺物は確認できなかった。これまでの調査成果と合わせ、本地点の弥生時代前期段階の地形を考えると以下になるだろう。

本調査地点で「黒色土」とした13層上面の標高は2.15mであり、第27次調査地点（五十周年記念館）南西角付近と同様の標高である。第26次調査（事務局本部棟）地点、第27次調査地点では、図4に示すように北東から南西方向の谷部2条（報告：谷1・2）が確認されている<sup>1)</sup>。本調査地点の成果は、第27次調査地点の地形が連続的に広がっていることを示しており、同調査地点南西部～第26次調査地点北西部の谷部（谷2）に向かう一段下がった部分にあたると思われる。第27次調査地点の谷2では「黒色土」上面で弥生時代前期の水田畦畔を確認している。今回は遺構の確認はできなかったものの、周囲に水田が広がっている可能性がある。

今後もこうした機会をとらえ、既調査成果と合わせ検討することで、津島岡大遺跡の古環境変遷を考えていきたい。

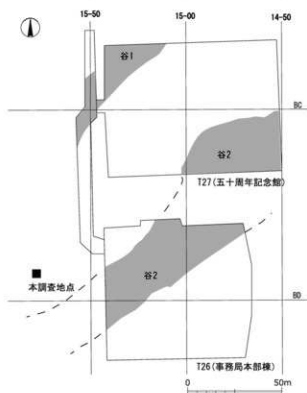


図4 既調査地点との位置関係（縮尺1/2,000）

### 註

1) 光本順2005『津島岡大遺跡15』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第20冊

## 第3節 立会調査の概要

### 1. 調査の実施状況

津島地区では14事業23件を実施した。中世以下まで掘削が及んだものは、理学部2号館電気室設置工事（調査6）、野球部バックネット改修工事（調査21）の2件のみであった。調査21ではバックネットポール4本の基礎

を、径1.2mのオーガーによりGL-3.0mまで掘削した。オーガーにより上がってきた土壌を確認し、4か所のうち西側2か所ではGL-2.4m付近で黒色土を確認した。東側2か所では同層は確認されず、青灰色粘土まで掘削した。

また、基幹環境整備（ブロック塀対策）工事業の実施に伴う調査22のうち、津島宿泊所南側地点において旧日本陸軍造成による土塁が50mにわたって削平されることとなった。旧日本陸軍関連の建物等は埋蔵文化財ではないが、往時を知る貴重な歴史資料であり、本センターでは機会ある毎に測量や立会等必要な記録調査を実施してきている。本件についても十分に協議を重ね、削平対象となる土塁の測量調査、および一部について現状で保存することとなった。調査の概要については次項で記す。

鹿田地区では2事業2件の立会調査を実施した。いずれも造成土内、あるいは既掘調査内であった。調査2はグラウンドの防球ネットボールの移設により、13本の基礎を掘削するものであった。掘削予定地では1999年度にも同様の工事を実施した経緯があったことから、前回と同地点を掘削し、破壊を小規模に留めることとした。既掘地点を掘削することができ、そのうち1か所で貝類を確認した。

## 2. 基幹環境整備（ブロック塀対策）工事（調査番号22、BJ16・17）

### a. 調査地点の位置

本調査地点は、津島地区南西キャンパスの南西部に位置する（図5）。津島宿泊所の敷地南端のブロック塀の改修工事に伴う工事である。当初計画ではブロック塀南側の市道通行の利便性を考慮して工事スペースを確保するため、現存する土塁をすべて削平する予定であった。事業担当者・施工業者と協議を行い、対象範囲の土塁の測量調査を実施すること、また土塁の東側10mについて、崩壊を防ぐための対策を講じた上、現状で保存することとなった。また工事立会の際に、土塁の断面記録を取った。

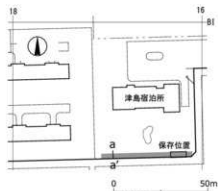


図5 調査地点の位置（縮尺1/2,000）

### b. 調査の成果—土塁の現状と土層断面—

工事対象は津島宿泊所南側の東西方向のブロック塀である。現状で東西50mを測る。土塁の南側下端に接してブロック塀が設置されているため、南側は既に壊されているものと予想された。

現地調査・写真測量の結果、土塁上面は標高4.5m前後を測り、土塁北側に沿う水路上面からの高さは0.85m、南側の市道道路面からは0.8mの高さを測る。現状で基底部の幅2.4m、上端部の幅1.7mである（図6）。なお、測量調査はデジタルカメラRICOH GR2およびMetashapeを使用したSfMによる測量を行った。

土塁の断面観察・記録を2か所で行った（図7）。黄褐色を呈する砂質土からなる盛り土層と、南側のブロック塀設置時と考えられる攪乱土層を確認した。



図6 土塁写真測量図（縮尺1/500）

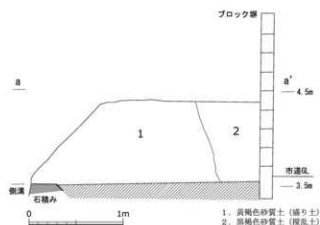


図7 土塁土層断面図 (縮尺1/40)

### c. まとめ

津島キャンパスの敷地境界は旧陸軍第十七師団駐屯地の敷地境界に一致し、土塁とその内側に水路が築かれている。これまでも本センターでは旧陸軍第十聯隊の将校集会所・庭園<sup>1)</sup>、同隊橋梁演習施設<sup>2)</sup>、理学部南側通用門<sup>3)</sup>、教育学部南東側通用門<sup>4)</sup>、文法経敷地西側土塁と通用門<sup>5)</sup>等の旧陸軍関連施設の現状把握と記録保存を実施してきた。今回の津島宿泊所南側土塁の位置は、旧陸軍歩兵第十聯隊集会所庭園の南側境界にあたる。水路を構成する石列のうち外側（南側）の石材を覆うように盛り土がなされる構造は、文法経敷地西側土塁と同じである<sup>6)</sup>ことを確認できた。

今回工事対象となった東西長さ50mの土塁のうち40mについては、水路の上端まで削平されたが、津島宿泊所南の庭園南東門にあたる10mについては擁壁を設置して現在以上の破壊を防ぐ対策を講じ、現状保存の対応をとった。構内に残る旧日本陸軍関連施設は注意を払わなければ姿を変え、記憶からも失われる。しかしこれらの施設等は、明治時代末から第二次世界大戦終戦に至る歴史を伝える貴重な資料として、今後も記録作業や調査研究が必要である。

(岩崎志保)

### 注

- 1) 野崎貴博・小林青樹1999「岡山大学構内における陸軍関連施設の調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』15 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 中村大介2007「1. 旧陸軍工兵第十聯隊橋梁演習施設の測量調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2005』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 3) 野崎貴博2008「1. 旧陸軍第十七師団駐屯地外周土塁の測量調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 4) 野崎貴博2008「2. 旧陸軍第十七師団砲兵第二大隊表門と土塁の測量調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 5) 南健太郎2013「1. 文・法・経フェンス改修工事に伴う調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 6) 註5) 図2土塁と水路の位置関係模式図 参照



表1 2018年度調査一覧（津島地区）

種別	調査番号	工事名称	調査期間	構内座標	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内 容	
確認	1	ゲッドジョブセンター増築	1/15	BD15	2.40	1.46	確認調査1か所	
立会	2	一般教育棟 (D棟) 外灯基礎	4/16	BD09	1.30	-	造成土内	
		改修	電気配線		4/16	0.70	-	造成土内
	3	津島北開校改修	機寮基礎掘削	4/17	AU12・13	1.80	-	造成土内
	4		機寮管設置	4/20	DB10	0.60	-	造成土内
	5	津島新野学生会取り壊し	5/8	BJ・BK16	0.70	0.5~0.6	近接層	
	6	理学部2号館電気室設備補設工事	5/15	AY09	0.75~1.7	1.2	中接層	
	7	8	工学部 東西道路	6/26	AW09	1.10	-	造成土内
	改修		東西道路	6/27	BA02	1.00	0.9	近接層
	9	津島新野跡地整備	雨水井	10/12	BK16	0.85	0.4	近接層
			照明ポール	11/2	BK16	1.00	-	近接層か
		看板基礎	11/2	BK16	0.80	-	既設内	
	10		電力引き込み建柱	11/29	AU11	1.20	-	造成土内
	11		電気設備	2/26		1.60	-	既設内
	12	情報統括センター改修	給水管	12/47	AW11	0.77	-	造成土内
	製木伐根		1/10	0.30		-	造成土内	
	生活排水井		4/8	0.95		-	造成土内	
	15	一般教育本館屋外生活排水管改修	12/22	BD09	0.7~1.1	-	既設内	
	16	野球部バックネット改修ほか	多目的グラウンドネットボール基礎	12/26	BD/BE03・04	0.95	0.95	造成土内
	17	18	L型擁壁	1/15	AU13-14	0.5~0.75	-	造成土内
	開校改修		目隠しフェンス基礎	1/10	BF03	0.75	-	造成土内
19		外灯移設	1/7	AU13	1.00	-	造成土内	
20	理学部北館バリアー取替		1/8	AY07	0.95	-	既設内	
21	野球部バックネット改修ほか	野球部バックネットボール基礎	2/5	BE05-06	3.00	0.9~1.0	東側2か所は青灰色粘土、西側2か所は2.4m付近に黒色土、以下灰褐色砂質土→青灰色粘土	
22	基幹・環境整備 (ブロック塀対策) ほか	武造館~文化系サークル種南、控え柱部	3/41	BG03-09	0.70	-	造成土内	
		津島学生会南		BJ16・17	0.70	-	造成土内、土層調査実施	
23		製木撤去 (マツ)		BJ17	0.80	-	造成土内	
24	理学部新編地	製木撤去	3/28	BE16	1.00	-	造成土内	

表2 2018年度調査一覧（鹿田地区）

種別	調査番号	工事名称	調査期間	構内座標	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内 容
発掘	1	アメリティモール新営	11/19~2019/9/18	AG~AS11~41	2.2	1.2	湧出時代土・溝、古代土・河造、中世井戸・土坑・溝・河造、近世土坑・溝、近代居住遺構・塀等
立会	2	防球ネット移設	9/5-6	CL~DF07	2	0.85	掘削ポイントに根拠、既報だが目撃が感じられる地点が1つあり。
	3	地下水浄化システム 雨水・汚水ルート	12/10	DC~CH29	0.4	-	造成土内



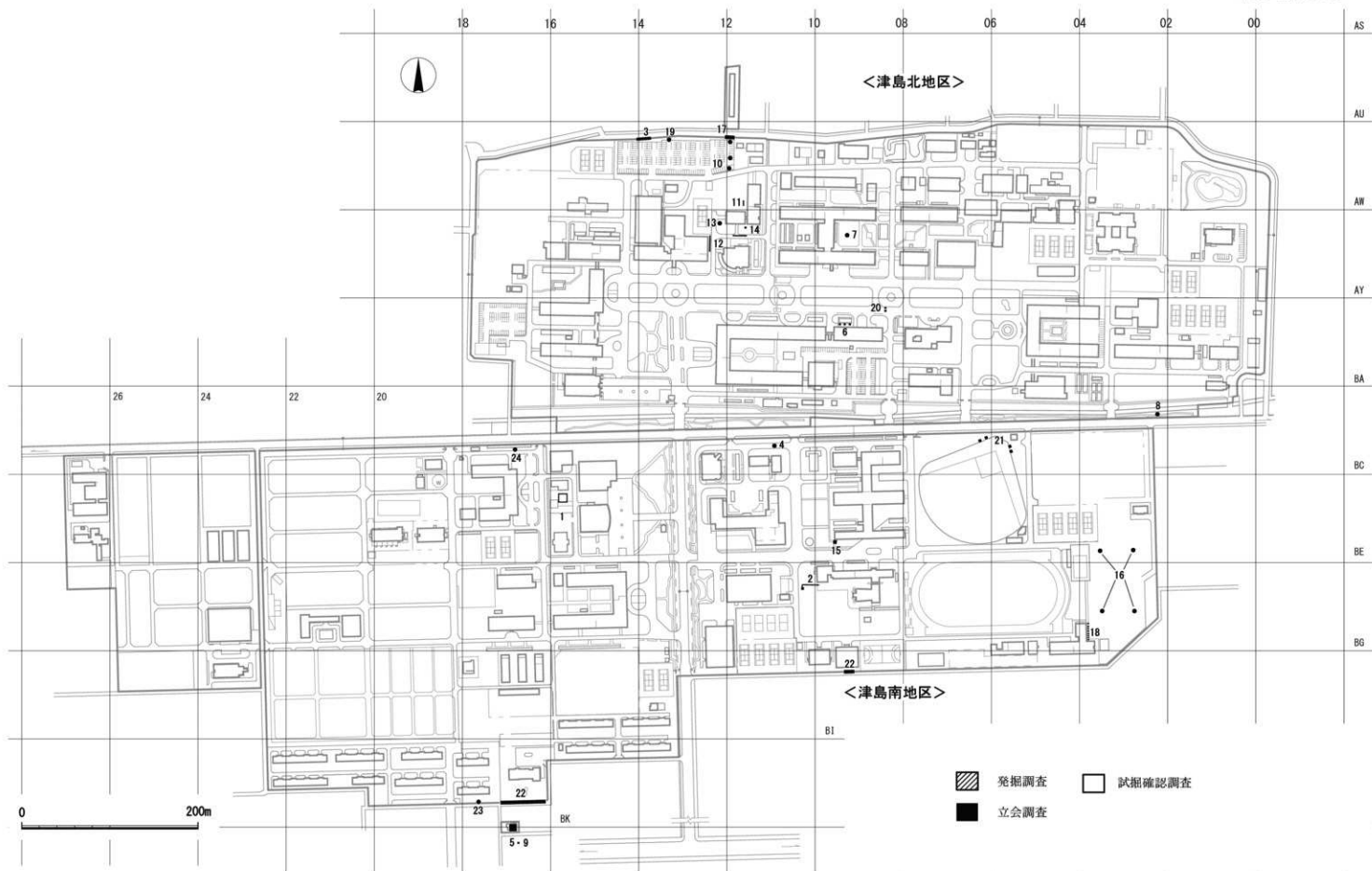


図8 2018年度の調査地点【1】—津島地区— (縮尺1/4,000)

\*番号は表1の調査番号に対応する。

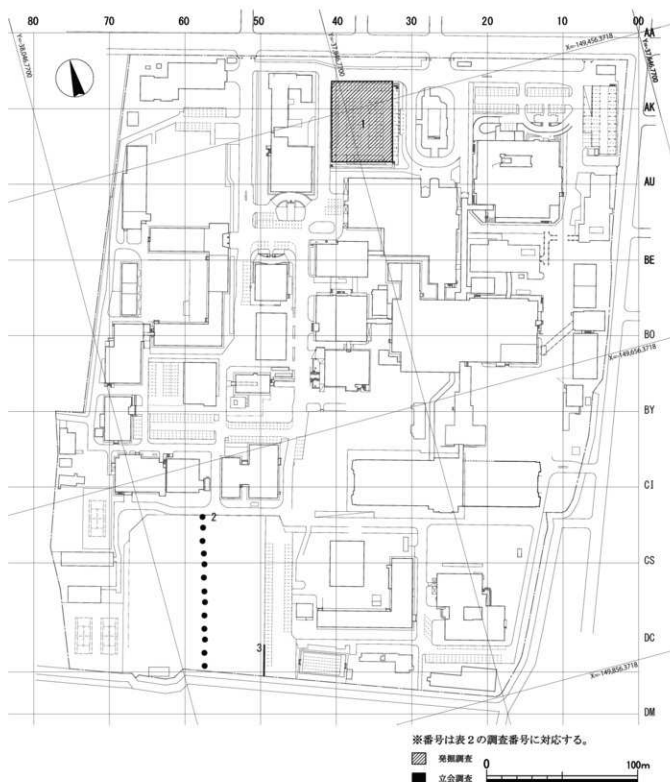


図9 2018年度の調査地点【2】－鹿田地区－（縮尺1/2,500）

## 第4節 構内遺跡に関する研究

### 1. 津島岡大遺跡から出土した植物種子の再検討

那 須 浩 郎 (岡山理科大学生物地球学部)  
 山 本 悦 世 (岡山大学埋蔵文化財調査研究センター)  
 岩 崎 志 保 (岡山大学埋蔵文化財調査研究センター)  
 山 口 雄 治 (岡山大学埋蔵文化財調査研究センター)  
 富 岡 直 人 (岡山理科大学生物地球学部)  
 米 田 穰 (東京大学総合研究博物館)

#### はじめに

津島岡大遺跡第3次、第5次、第6次、第15次調査から出土したダイズ、アズキ、モモ、ザッソウメロン、エノコログサについて、種同定の再確認、年代測定、およびサイズ計測を行ったので報告する。なお本稿では、単に「ダイズ」と表記する場合は、野生種のツルマメと栽培種のダイズの両方を含む広義のダイズの意味で使用する。「アズキ」に関しても、野生種のヤブツルアズキと栽培種のアズキの両方を含む広義のアズキの意味で使用

#### 1. 資料と方法

再検討を行った資料は、表3に示した9資料である。

これらの資料をNikon社製の双眼実体顕微鏡SMZ1270を用いて63~80倍で観察し、那須の所有する現生種子標本との比較により種同定を行った。また、一部の資料については、写真撮影、サイズ計測を行った。写真撮影とサイズ計測はNikon社製の顕微鏡デジタルカメラDS-Fi3とイメージングソフトウェアNIS Elements D ver.5.01を使用した。

年代測定は、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室にて加速器質量分析装置(AMS)を用いて行った。試料から汚染を除去するための前処理には、酸・アルカリ・酸処理を行った。1.2Mの塩酸80℃を酸処理に、アルカリには試料の状況にあわせて濃度と温度を調整した水酸化ナトリウムを使用した。エノコログサとザッソウメロンについては、炭素量が400 $\mu$ g以下だったため、微量炭素用のプロトコル(大森ほか2017)にてAMS測定を行った。校正年代の算出には、OxCALA2 (Bronk Ramsey 2009) を使用し、校正データにはIntCal13 (Reimer et al. 2013) およびBomb13 NH2 (Hua et al. 2013) を用いた。

表3 再検討を行った植物種子資料の一覧

調査次	資料ID	出土遺構報告番号	当時の同定結果	文献
第5次	T5-624	SP02	マメ科(アズキの類)	河部編 1994
第5次	T5-625	SP02 1・2層	マメ科(アズキの類)	河部編 1994
第5次	T5-626	SP02 3層	マメ科(アズキの類)	河部編 1994
第5次	T6-609	SP01	マメ科(マメ?)	山本編 1995
第6次	T6-700	SP03	マメ科(マメ科sp. Phaseolus?)	山本編 1995
第6次	T6-S29-2	SP07	モモ	山本編 1995
第6次	T6-67	SP13	イネ科(エノコログサ)	山本編 1995
第3次	T3 SP01-6層 6-1	貯蔵穴SP1	ザッソウメロン	山本編 1992
第15次	T15 SP28-22	貯蔵穴SP2	ザッソウメロン?	山本編 2004

## 2. 結果

## a. 再同定の結果

(1) マメ科 (アズキ・ダイズ) Fabaceae (*Vigna angularis*/*Glycine max*)

津島岡大遺跡第5次調査SP02と同6次調査SP01・03出土 (ツ5-624、625、626、ツ6-699、700) の5資料を再検討した (表4、図10-15)。

ツ5-624の「マメ科 (アズキの類)」と書かれた資料には、アズキの炭化種子 (子葉も含む) が完形23点、一部破損/変形4点、半割15点、破片6点含まれていた。また、アズキかダイズかの判別がつかない破片が5点含まれていた。その他に、炭化木片が2点含まれていた。

ツ5-625の「マメ科 (アズキの類)」と書かれた資料には、アズキの炭化種子 (子葉も含む) が完形13点、一部破損/変形1点、半割5点含まれていた。ダイズの炭化種子 (子葉も含む) は完形が2点含まれていた。また、アズキかダイズかの判別がつかない破片が2点含まれていた。その他に、ツブラジイの炭化子葉が1点、不明炭化種実が4点、炭化木片が1点含まれていた。

ツ5-626の「マメ科 (アズキの類)」と書かれた資料には、アズキの炭化種子 (子葉も含む) が完形77点、一部破損/変形33点、半割15点、未熟3点含まれていた。このうち、半割の1点を炭素14年代測定に使用した。ダイズの炭化種子 (子葉も含む) は完形が4点、一部破損/変形1点、半割1点、未熟2点含まれていた。このうち、半割の1点を炭素14年代測定に使用した。また、アズキかダイズかの判別がつかない破片が21点含まれていた。その他に、ブナ科の炭化子葉が1点、不明炭化種実が3点、炭化木片が4点含まれていた。

ツ6-699の「マメ科 (マメ?)」と書かれた資料には、アズキの炭化種子が1点、不明炭化種実が6点含まれていた。

ツ6-700の「マメ科 (マメ科sp. Phaseolus?)」と書かれた資料には、アズキの炭化種子が完形2点、半割1点が含まれており、半割の1点を年代測定に使用した。また、ダイズの未熟炭化種子が1点含まれていた。

(2) モモ *Prunus persica*

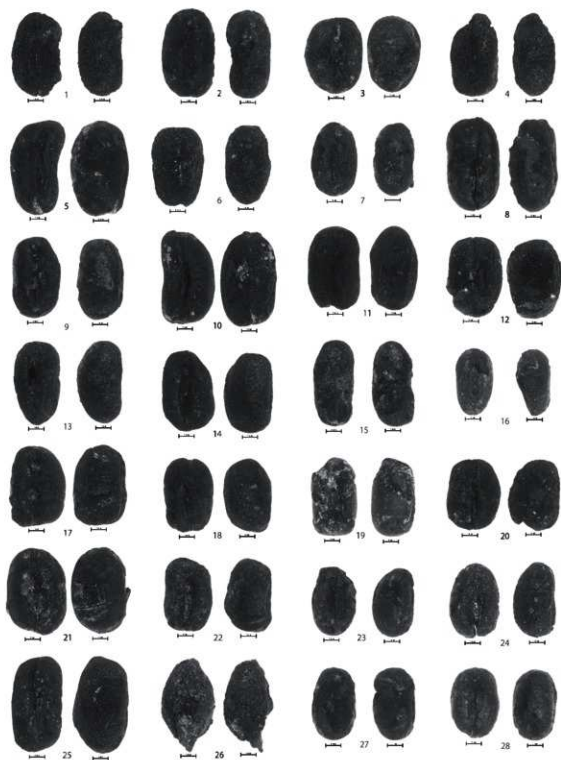
ツ6-SP9-2の縄文後期のモモとされた資料は、モモの内果皮 (核) である (図15)。サイズは、長さ及厚さ方向に破損があるが、長さ19mm、幅17mm、厚さ11mmと比較的小型である。先端が欠けているため、先が尖るタイプかどうかは不明である。内果皮表面のひだは太く、維管束の小孔は少ない。

(3) ザッソウメロン *Cucumis melo* var. *agrestis*

T15 SP28-22の縄文後期のザッソウメロン?とされた資料を再同定したところ、植物種子の特徴である着点 (へそ) は見られず、組織はセルロース質 (木質) ではなく、昆虫の外骨格のようなキチン質である (図15)。植物の種子ではなく、昆虫の卵殻の可能性が高い。

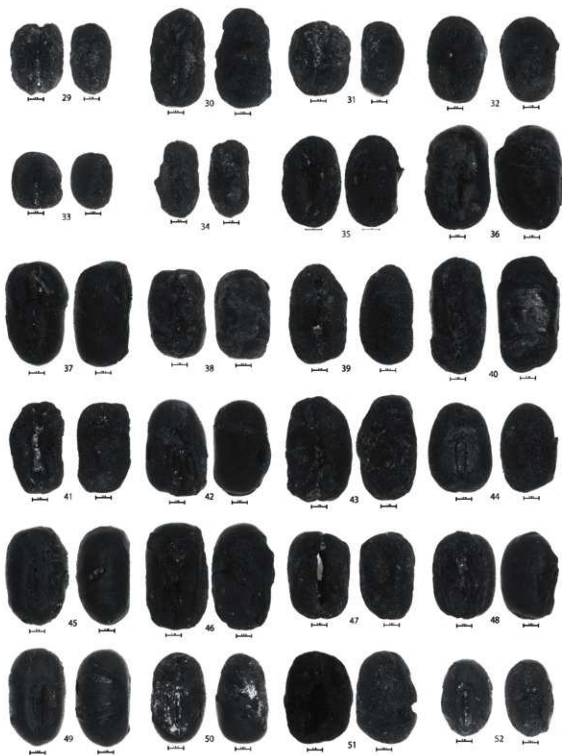
表4 マメ資料の再同定結果

資料ID	アズキ (広義)				ダイズ (広義)			アズキ/ ダイズ (広義)		ツブラジイ	ブナ科	不明種実	木片	計
	炭化種子/子葉				炭化種子/子葉			炭化種子/子葉		炭化子葉	炭化子葉	炭化	炭化	
	完形	一部破損/ 変形	半割	未熟	破片	完形	一部破損/ 変形	半割	未熟	破片		炭化	破片	
ツ5-624 (SP02)	23	4	15		6				5				2	55
ツ5-625 (SP02 1・2層)	13	1	5		2			2	1			4	1	29
ツ5-626 (SP02 3層)	77	33	15	3	4	1	1	2	21		1	3	4	165
ツ6-699 (SP01)		1										6		7
ツ6-700 (SP03)		2		1				1						4
計	116	38	36	3	6	6	1	1	3	28	1	1	13	200



1-28：アズキ（広義）炭化種子／子葉（左：腹面観、右：側面観、1-23：ツ5-624、24-28：ツ5-625）

図10 津島岡大遺跡から出土した種子（1）



29-52：アズキ（広義）炭化種子／子葉（左：腹面観、右：背面観、29-34：ツ5-625、35-52：ツ5-626）

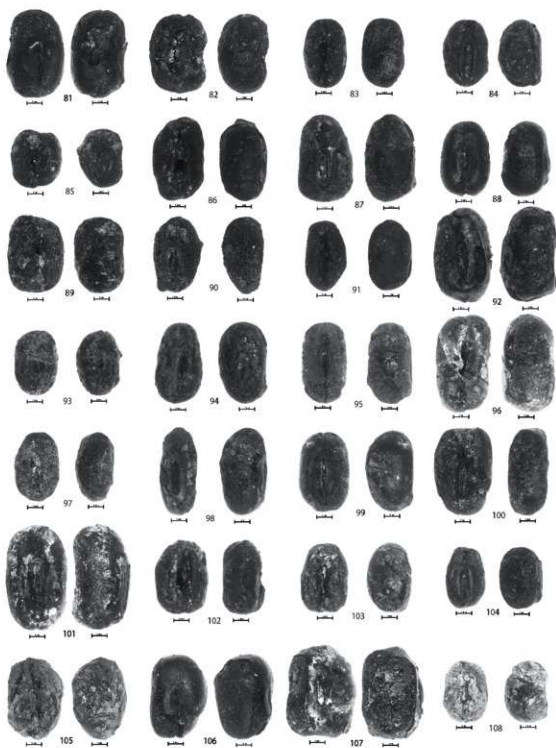
図11 津島岡大遺跡から出土した種子（2）





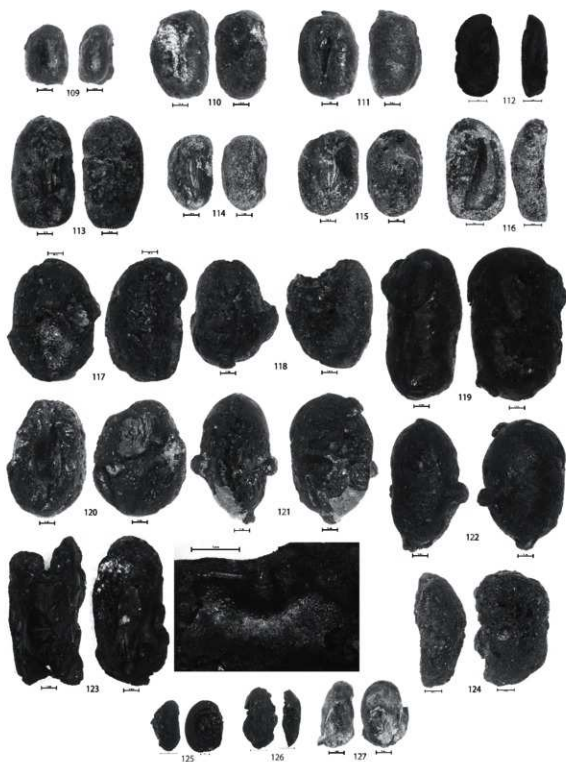
53-80：アズキ（広義）炭化種子／子葉（左：腹面観、右：側面観、53-80：ツ5-626）

図12 津島岡大遺跡から出土した種子（3）



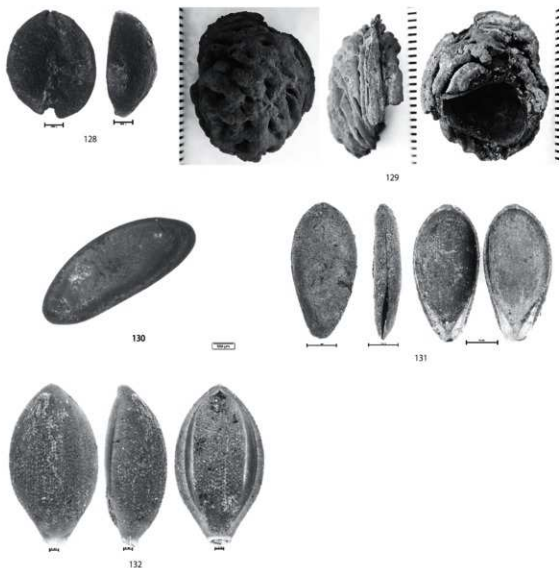
81-108: アズキ (広義) 炭化種子/子葉 (左: 腹面観, 右: 側面観, 81-108: プ5-626)

図13 津島岡大遺跡から出土した種子 (4)



109-116: アズキ(広義)炭化種子/子葉(左:腹面観,右:側面観,109-112:ツ5-626,113:ツ6-699,114-116:ツ6-700)、117-127:ダイズ(広義)炭化種子/子葉(左:腹面観,右:側面観,117-118:ツ5-625,119-126:ツ5-626,127:ツ6-700) 123と種皮表面の膜状組織の拡大写真を示す。112・116・124は年代測定に使用した資料。

図14 津島岡大遺跡から出土した種子(5)



128：ツブラジイ炭化子葉（左：半割れ子葉内面、右：側面、ツ5-625）、129：モモ未炭化内果皮（核）（左：側面、中：縦合線面、右：側面、ツ6-SP9-2）、130：ザッソウメロン改め不明キチン質（T15 SP28-22）、131：ザッソウメロン未炭化種子（左：背腹面、中：側面、右：側面から2枚に割った内面、T3 SP01-6層 6-1）、132：エノコログサ未炭化有ふ果（左：背面、中：側面、右：腹面、フ6-67）

図15 津島岡大遺跡から出土した種子（6）

T3 SP01-6層 6-1の縄文晩期終末(突帯文期)のザツソウメロンとされた資料は、形状からメロン仲間 *Cucumis melo* の種子である(図15)。藤下(1992)は、メロン仲間の種子サイズから、長さが6mm以下をザツソウメロン型、6.1-8.0mmをマクワ・シロウリ型、8.1mm以上をモルディカメロン型とした。これに従えば、本資料は、長さ4.72mm、幅2.30mm、厚さ0.98mmであり、ザツソウメロン型の小型のタイプである。

#### (4) エノコログサ *Setaria viridis*

つ6-67の縄文後期のイネ科(エノコログサ)とされた資料を検討した(図15)。サイズは、長さ190mm、幅1.05mm、厚さ0.74mmで、外穎と内穎に覆われておりイネ科の果実でキズ連Paniceaeの有ふ果(小穂から苞穎が外れた状態)であることが分かる。内外穎には0.02-0.03mm程度の乳頭状突起が分布していることからエノコログサ属 *Setaria* に同定できる。果実のサイズが小さく、乳頭状突起の基部が盛り上がりて連結し皺状にならないことから、キンエノコ *Setaria pumila* とアキノエノコログサ *Setaria faberii* が除外される。果実(有ふ果)の最大幅が長さの基部よりの0.98mmの位置にあり、先端が肥大する形状ではないため、栽培種のアワ *Setaria italica* ではなく、エノコログサに同定できる。(那須)

### b. 年代測定の結果

年代測定結果の一覧を表5に示す。

アズキの年代測定は、つ5-626とつ6-700の半割炭化種子をそれぞれ1点ずつ行った。その結果、較正年代(2SD)で、つ5-626アズキが3827 cal BP-3642 cal BP(1878BC-1693BC)、つ6-700アズキが3822 cal BP-3639 cal BP(1873BC-1690BC)の年代となった。これまで、第5次調査(つ5-626)のアズキは縄文時代後期中頃、第6次調査(つ6-700)のアズキは縄文時代後期前半と考えられていたが、両方とも縄文時代後期中頃のアズキだったことが判明した。

ダイズの年代測定は、つ5-626の半割炭化種子について行った。その結果、較正年代(2SD)で、3831 cal BP-3701 cal BP(1882BC-1752BC)の年代が得られた。ダイズについてもアズキと同様に縄文時代後期中頃のものであることが、確かめられた。

モモは、内果皮の一部を切り取り、年代測定に使用した。その結果、較正年代(2SD)で、965 cal BP-925 cal BP(986AD-1026AD)の年代値が得られた。この年代は、平安時代の値となった。

表5 推定される較正年代と注記(cal BP、BC/AD表記)

資料名(報告遺構名)	cal BP 較正年代(1SD)	cal BP 較正年代(2SD)	BC/AD 較正年代(1SD)	BC/AD 較正年代(2SD)	アルカリ処理
つ6-700 アズキ (6次調査SP03)	3720 cal BP (40.8%) 3685 cal BP 3665 cal BP (27.4%) 3644 cal BP	3822 cal BP (13.9%) 3792 cal BP 3763 cal BP (3.1%) 3750 cal BP 3727 cal BP (7.4%) 3639 cal BP	1771 BC (40.8%) 1736 BC 1716 BC (27.4%) 1693 BC	1873 BC (13.9%) 1843 BC 1814 BC (3.1%) 1801 BC 1778 BC (7.4%) 1690 BC	80C 0.01M 30分
つ5-626 ダイズ (5次調査SP02 3層)	3827 cal BP (38.0%) 3789 cal BP 3776 cal BP (28.6%) 3742 cal BP 3733 cal BP (11.1%) 3720 cal BP	3831 cal BP (95.4%) 3701 cal BP	1878 BC (38.0%) 1840 BC 1827 BC (28.6%) 1793 BC 1784 BC (11.1%) 1771 BC	1882 BC (95.4%) 1752 BC	80C 0.01M 30分
つ5-626 アズキ (5次調査SP02 3層)	3818 cal BP (18.7%) 3796 cal BP 3724 cal BP (59.0%) 3689 cal BP 3661 cal BP (10.4%) 3648 cal BP	3827 cal BP (24.7%) 3788 cal BP 3776 cal BP (11.6%) 3743 cal BP 3733 cal BP (44.1%) 3682 cal BP 3669 cal BP (15.1%) 3642 cal BP	1869 BC (18.7%) 1847 BC 1773 BC (39.0%) 1749 BC 1712 BC (10.4%) 1699 BC	1878 BC (24.7%) 1839 BC 1827 BC (11.6%) 1794 BC 1784 BC (44.1%) 1733 BC 1720 BC (15.1%) 1693 BC	80C 0.01M 30分
つ6 SP19-2 キモ (6次調査SP02)	955 cal BP (68.2%) 930 cal BP	965 cal BP (95.4%) 925 cal BP	955 AD (68.2%) 1020 AD	986 AD (95.4%) 1026 AD	80C 0.01M 30分
つ6 67 エノコログサ (6次調査SP13)	-42 cal BP (68.2%) -48 cal BP	-38 cal BP (95.4%) -50 cal BP	1992 AD (68.2%) 1998 AD	1988 AD (95.4%) 2000 AD	80C 0.01M 5分
T3 SP01-6層 6-1 ザツソウメロン (3次調査野蔵穴SP1 6層)	3881 cal BP (17.2%) 3640 cal BP 3510 cal BP (4.1%) 2599 cal BP 2493 cal BP (46.8%) 2378 cal BP	2701 cal BP (23.4%) 2631 cal BP 2618 cal BP (9.1%) 2584 cal BP 2577 cal BP (1.8%) 2562 cal BP 2542 cal BP (61.1%) 2537 cal BP	732 BC (17.2%) 691 BC 661 BC (4.1%) 650 BC 544 BC (46.8%) 429 BC	752 BC (23.4%) 682 BC 699 BC (9.1%) 635 BC 628 BC (1.8%) 613 BC 593 BC (61.1%) 498 BC	80C 0.01M 5分

ザッソウメロン (T3 SP01-6層 6-1) の種子を縫合部で半分に割り、片方を年代測定用試料とした。その結果、較正年代 (2SD) で、2701 cal BP-2357 cal BP (752BC-408BC) の年代値が得られた。この年代は、突帯文期～弥生前期までの値となる。

エノコログサは、果実 (有ふ果) 1粒で直接年代測定を行った。その結果、較正年代 (2SD) で、1988AD-2000ADの年代値が得られた。この年代は、津島岡大遺跡第6次発掘調査が行われた年代 (1988-1999AD) と矛盾が無く、発掘当時の混入だということが分かった。(那須・米田)

### c. アズキとダイズのサイズ計測結果

今回再検討したアズキとダイズについて、完形の種子サイズを計測した (表6)。アズキは、ツ5-624、625、626とツ6-700をあわせて114点で、長さの平均が5.56mm (最大7.78mm、最小3.90mm)、幅の平均が3.57mm (最大4.66mm、最小2.51mm)、厚さの平均が3.37mm (最大4.55mm、最小2.40mm)、体積 (長さ×幅×厚さ) の平均が69.86mm<sup>3</sup> (最大135.90mm<sup>3</sup>、最小28.84mm<sup>3</sup>) だった。

ダイズは、小型のものを除いてツ5-625、626をあわせて6点で、長さの平均が8.20mm (最大10.20mm、最小7.28mm)、幅の平均が5.26mm (最大6.31mm、最小4.62mm)、厚さの平均が5.61mm (最大6.26mm、最小5.09mm)、体積 (長さ×幅×厚さ) の平均が242.19mm<sup>3</sup> (最大327.60mm<sup>3</sup>、最小204.29mm<sup>3</sup>) だった。

これらのサイズ (体積) を縄文時代以降の遺跡から出土したアズキとダイズのサイズ (那須2019) と比較した結果、アズキは中部高地の縄文中期の炭化アズキよりも大型であり、京都の上里遺跡から出土したものと同程度だった (図16)。ダイズに関しては、中部高地の縄文中期の炭化ダイズとはほぼ同程度の大きさだった (図17)。

### d. 炭化ダイズ種子表面の膜状組織

今回、炭化ダイズの種子表面に残存した種皮を観察したところ、野生種ツルマメの種皮に見られる膜状組織 (Bloom) に類似した構造があることが分かった (図14)。縄文時代のダイズ属種子に、現在のツルマメに特有な膜状組織が見られることは、中山・佐野 (2014) によって指摘されていた。中山・佐野は神奈川県藤原遺跡の縄文時代後期土器から多数のダイズ属種子圧痕を見出し、そのサイズと膜状組織からツルマメと同定している。今回の津島岡大遺跡から出土した炭化種子には小型のものにも大型のものにも膜状組織に類似した構造が見られた。

## 3. 考察

### a. マメ

今回の再検討により、津島岡大遺跡では縄文時代後期中頃にアズキとダイズが利用されていたことが明らかになった。そのサイズは現在の野生種よりも大きく、縄文時代中期の中部高地のものと同程度か大型であり、人の干渉により大型化した品種が利用されていたと考えられる。一方、炭化ダイズの種皮には、現在の野生種に特有な膜状組織と類似した構造が残っており、種皮の形質は野生種と変わっておらず、ドメスティケーションの過程の品種だった可能性がある。もしこれが膜状組織であるとすれば、ダイズのドメスティケーションの過程において、種子の大型化が種皮の性質の変化 (休眠性と関係) よりも先行していた可能性を示唆する。今後、このような種皮の性質の変化 (膜状組織の有無や種皮の厚さ) についても詳しいデータを蓄積することで、ドメスティケーションの過程の詳細が明らかになってくるだろう。

津島岡大遺跡を含む西日本地域におけるマメの利用については、縄文時代後期中頃以前にアズキやダイズの利用があったのが、今後の課題である。もし縄文後期中頃に急に利用が始まったのなら、すでに小畑 (2010、2016) や山本 (2012) が指摘しているように、中部高地からの大型マメ品種の伝播が想定できるだろう。逆に、

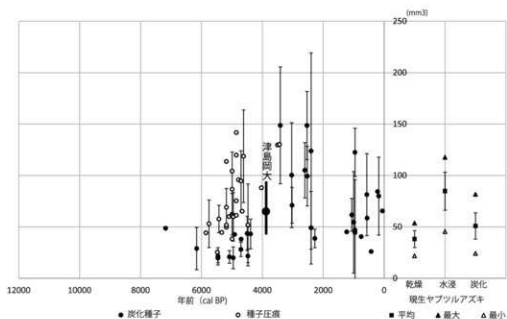


図16 縄文時代以降のアズキ（広義）の種子サイズ（体積）変化  
 (ドットは平均値、エラーバーは標準偏差を示す)

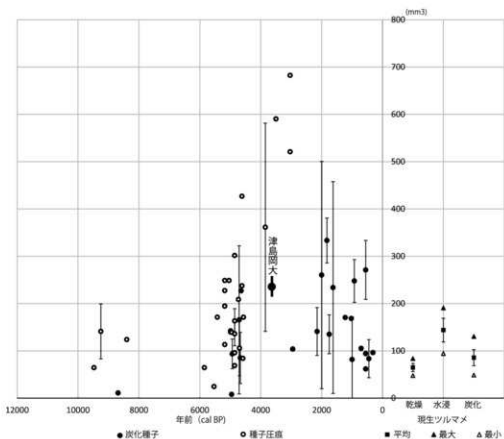


図17 縄文時代以降のダイズ（広義）の種子サイズ（体積）変化  
 (ドットは平均値、エラーバーは標準偏差を示す)

それ以前にも利用があるとすれば、瀬戸内地域での独自のドメスティケーションが考えられる。これらを検証するためには、縄文時代前期～中期の土器圧痕調査や炭化種子の分析が課題である。また、これらのマメ利用が弥生時代にどのようにつながっていくかも課題である。縄文時代晩期前半から突帯文期にかけて継続して大型マメが利用されていたのか、明らかにしていく必要がある。

#### b. モモ

今回の再検討の結果、津島岡大遺跡6次調査SP02出土のモモは縄文後期ではなく、平安時代のモモの混入だったことが明らかになった。モモは中国原産の栽培植物である。縄文時代の遺跡からの報告もあるが、弥生時代に出土遺跡が急増するので（那須2014、南2016、那須2018）、弥生時代になって日本列島に伝播したと考えられる。今回のように、縄文時代のものとして報告されているモモは、全て直接年代測定をして、確認する必要があるだろう。また、今後の課題として、モモが突帯文期にイネ・アワ・キビとともに伝来したのか、それとも弥生前期以降の第2波として伝来したのか確認していく必要があるだろう。

#### c. ザッソウメロン

今回の再検討により、T15 SP28-22の縄文後期のザッソウメロン？は虫の卵の可能性が高いことがわかり、確実な縄文後期のザッソウメロンはなくなった。一方、T3 SP01-6層 6-1の縄文晩期終末（突帯文期）のザッソウメロンとされた資料は、同定に間違いはなく、年代値も突帯文期～弥生前期の値となった。年代幅の誤差が大きいため、今回は確認できなかったが、メロン仲間についてもモモと同様、イネ・アワ・キビと同時に突帯文期に伝来したのか、それとも第2派なのか、今後も年代測定の事例を増やして検討していく必要がある。

#### d. エノコログサ

エノコログサは、栽培植物のアワの祖先野生種だと考えられている。エノコログサからアワへのドメスティケーションは、中国の黄河中流域で10,000-8,000年前頃に起きたと考えられている。エノコログサは、現在の日本列島では各地に分布しているが、縄文時代における確実な証拠は無い。今回の年代測定によって縄文後期のエノコログサとされた資料は現代のコンタミネーションであることが分かった。おそらく、エノコログサは、突帯文期以降に稲作・雑穀作（アワ・キビ）とともに日本列島に伝来した史前帰化植物だと考えられる（那須・百原2018）。

### 4. 評価

津島岡大遺跡出土の縄文時代種子に関する年代測定の再検討では、発掘調査から報告書作成時における理解の一部を修正する結果となり、発掘調査で出土した植物種子の評価や取り扱いに関して、有益な知見を得ることができた。

#### a. マメ資料の評価

本分析対象とした資料は、いずれも津島岡大遺跡第5次・6次調査で検出された縄文時代の湿地型貯蔵穴に伴う。第5次調査では、SP02の1・2層と3層から出土している。3層は大量の堅果類が厚さ約10cmに圧縮された状態で集積した堅果類堆積層であり、1・2層は、3層上部を密閉する層として同層とは一線を画する。マメ資料の出土数は、3層では約90点に達するのに対して、1・2層では両層の合計でも13点にとどまっており、堅果類堆積層を構成する3層への集中は明らかである。その他に、同貯蔵穴では未分層となる「ツ-624」の資料として33点が確認されるが、これら全てが1・2層に属する可能性は極めて低いことを考えると、1・2層と3層間での違いは揺るがないであろう。



第6次調査の資料でも同様の傾向が指摘される。同調査の貯蔵穴SP01と同03から出土したマメ数は、それぞれ5点前後で極めて少ない。そして、両貯蔵穴とも堅果類の保存が終了した状態と評価されている（山本1995）。

以上の状況から、津島岡大遺跡において湿地型貯蔵穴から出土したマメは、堅果類の保存に伴っていた可能性が高いと判断される。両者の関係については、マメに刻まれた被熱痕の評価も合わせ、今後注目していきたい。

#### b. モモ資料に生じたコンタミネーションの背景

分析対象としたモモは、津島岡大遺跡第6次調査の発掘調査において、縄文時代後期の湿地型貯蔵穴SP07の埋土から出土した。本分析の年代値からコンタミネーションが指摘されたことから、その背景を考えてみよう。ここで注目されるのが、同遺構の上部に重複する古代溝SD13の存在である。同溝は幅12m前後で深さは1mを超える規模を有しており、底面レベルは標高1.7~2.5mを測る。一方、モモが出土した貯蔵穴の上面レベルは標高1.5~1.55mであり、図面上は、両数値間に15~20cm程度の差を認められる。しかし、出土遺物の内容から、SD13は縄文時代の包含層を破壊して形成されたとされている（山本1995）。こうした状況から、両遺構が上下関係において極めて近い状態で、発掘作業時に直接的な切りあい関係となったことは十分に考えられる。貯蔵穴内におけるモモの出土位置については特定できないが、同遺構の深さが27cmで比較的浅い点も注意が必要である。さらに、SD13の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀後半~11世紀初頭）と報告されており（山本1995）、本分析のモモの年代と整合的である点や、同溝からモモが6点出土している（南2019）点を勘案すると、SP07出土のモモは古代溝SD13に由来すると判断されよう。（山本）

#### 5. まとめ

今回の再検討により、津島岡大遺跡から出土した植物の位置づけをより明確にすることができた。年代観が異なるだけで解釈が随分変わってくるので、西日本における縄文時代から弥生時代への植物利用の変遷を検討するうえで、極めて重要な再検討だったと言えるだろう。発掘調査における植物種子のコンタミネーションは、いくら気を付けても完全に避けることは難しい。今後は、コンタミネーションがあり得ることを想定したうえで、出土種子を評価していく必要があるだろう。コンタミネーションの判断は難しいが、どのくらいの量の種子がどのくらいの頻度で出土しているのか、これまでの出土記録と比較して時空間的に想定可能かどうか、炭化か未炭化かなどといった情報は、慎重に判断するための基準になる。もちろん、近年は微量で年代測定が可能になってきたので、できるだけ直接年代測定をして確かめる必要があるだろう。また、今回再検討が可能になったのは植物種子の資料をきちんと保存していたからである。こうした植物遺物の資料の保存が、今後ますます重要になってくるだろう。（那須）

#### 参考文献

- 阿部芳郎編1994「津島岡大遺跡」4 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
大森貴之・山崎孔平・松澤貴行・板橋悠・尾高大真・米田博2017「微量試料の高精度放射性炭素年代測定」『第20回AMSシンポジウム』  
沖陽子・山本悦世1994「貯蔵穴出土の種子-小型種子を中心に-」『津島岡大遺跡』4 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
沖陽子1996「津島岡大遺跡第6次調査出土種子の分析」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』13 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
小畑弘己2011「東北アジア古民族植物学と縄文農耕」同成社  
小畑弘己2016「縄文時代の環境変動と植物利用戦略」『考古学研究』63-3 考古学研究会  
藤下典之1992「出土種子からみた古代日本のメロン仲間-その種類、渡来、伝播、利用について-」『考古学ジャーナル』354 ニューサイエンス社

- 中山誠二・佐野隆2015「ツルマメ (Glycine max subsp. soja) を混入した縄文土器-相模原市勝坂遺跡等の種子圧痕」『山梨県立博物館研究紀要』9 山梨県立博物館
- 那須浩郎2014「古代のモモ」『BIOSTORY』22 誠文堂新光社
- 那須浩郎2018「縄文時代と弥生時代の栽培植物」『季刊考古学』145 雄山閣
- 那須浩郎2019「植物利用の変遷」『日本考古学協会2019年度岡山大会研究発表資料集』日本考古学協会2019年度岡山大会実行委員会
- 那須浩郎・百原新2018「稲作農耕伝来後の水田雑草フロラの変遷」『雑草学入門』講談社
- 南健太郎2016「縄文のモモ、弥生のモモ」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』55 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本悦世編1992『津島岡大遺跡』3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本悦世1995『津島岡大遺跡』6 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本悦世編2002『津島岡大遺跡』14 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本悦世2012「縄文時代後期～突帯文期」におけるマメ・イネ圧痕-圧痕レプリカ法による岡山南部平野における調査成果から-」『紀要2010』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (4), 337-360.
- Hua, Q., Barbetti, M., and Rakowski, A.J. (2013). Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. *Radiocarbon*, 55, 2059-2072.
- Reimer, P.J., E. Bard, A. Bayliss, J.W. Beck, P.G. Blackwell, C. Bronk Ramsey, C.E. Buck, H. Cheng, R.L. Edwards, M. Friedrich, P.M. Grootes, T.P. Guilderson, H. Halldason, I. Hajdas, C. Hatté, T.J. Heaton, D.L. Hoffmann, A.G. Hogg, K.A. Hughen, K.F. Kaiser, B. Kromer, S.W. Manning, M. Niu, R.W. Reimer, D.A. Richards, E.M. Scott, J.R. Southon, R.A. Staff, C.S.M. Turney, and J. van der Plicht (2013). IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.

表6 計測値一覧

分類群	調査年次	遺構番号	築体ID	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	長さ×幅×厚さ (mm <sup>3</sup> )
アズキ	75	625	1	817	539	537	23617
		625	2	728	483	581	20429
	75	626	4	102	631	500	32760
	75	626	81	787	527	626	25963
	75	626	82	842	462	56	21781
	75	626	83	728	513	455	16727
			最大値	1020	631	626	32760
		最小値	728	462	500	20429	
		平均値	820	526	561	24219	
		標準偏差	108	039	640	4640	

分類群	調査年次	遺構番号	築体ID	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	長さ×幅×厚さ (mm <sup>3</sup> )
アズキ	75	621	1	562	337	300	5658
		621	2	588	334	296	6133
	75	621	3	508	382	359	6987
	75	621	4	487	317	285	4108
	75	621	5	629	346	389	8944
	75	621	6	527	352	308	5711
	75	621	7	490	369	277	4190
	75	621	8	625	337	331	7295
	75	621	9	539	321	312	5405
	75	621	10	623	359	379	8458
	75	621	11	558	345	330	6435
	75	621	12	532	378	348	7407
	75	621	13	555	389	304	5294
	75	621	14	535	350	327	6120
	75	621	15	372	275	285	3434
	75	621	16	444	232	232	2347
	75	621	17	537	375	359	7252
	75	621	18	490	333	321	5232
	75	621	19	525	389	290	4765
	75	621	20	471	363	348	5933
	75	621	21	579	406	372	8733
	75	621	22	480	325	315	5005
	75	621	23	436	282	282	3773
	75	625	2	500	331	281	4730
	75	625	4	635	337	371	8003
	75	625	5	621	362	330	7418
	75	625	6	487	280	285	4967
	75	625	7	472	329	294	4365
	75	625	8	481	356	275	4709
	75	625	9	463	342	379	6222
	75	625	10	503	420	288	6084
	75	625	11	577	408	375	8742
	75	625	12	382	340	280	3637
	75	625	13	519	303	275	4325
	75	626	1	567	367	325	6763
	75	626	5	693	431	455	13590
	75	626	6	697	420	392	11475
	75	626	7	600	392	371	8526
	75	626	8	463	392	357	6278
	75	626	9	778	378	419	12322
	75	626	10	609	364	357	7911
	75	626	11	447	430	382	6013
75	626	12	707	431	406	12458	
75	626	13	602	421	361	9214	
75	626	14	641	448	361	9927	
75	626	15	714	415	396	11724	
75	626	16	583	413	368	8881	
75	626	17	582	415	363	8768	
75	626	18	653	383	371	9279	
75	626	19	602	364	351	7691	
75	626	20	618	461	369	10513	
75	626	21	516	343	327	5758	
75	626	22	443	328	342	4939	
75	626	23	540	350	340	6636	
75	626	24	410	300	343	4277	
75	626	25	530	385	374	7919	
75	626	26	495	373	263	4836	
75	626	27	620	384	340	8035	
75	626	28	550	331	330	5826	
75	626	29	581	340	345	6815	
75	626	30	547	291	348	5539	

分類群	調査年次	遺構番号	築体ID	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	長さ×幅×厚さ (mm <sup>3</sup> )
アズキ	75	626	31	489	275	233	3049
		626	32	600	346	362	7742
	75	626	33	615	417	434	11130
	75	626	34	593	441	383	10036
	75	626	35	629	348	334	7872
	75	626	36	456	300	273	3735
	75	626	37	478	379	348	6304
	75	626	38	452	384	384	7235
	75	626	39	550	347	317	6030
	75	626	40	450	269	301	3644
	75	626	41	536	306	304	4986
	75	626	42	442	275	273	3466
	75	626	43	615	435	362	9681
	75	626	44	638	359	335	7649
	75	626	45	536	367	328	6434
	75	626	46	540	357	362	7038
	75	626	47	476	330	340	5344
	75	626	48	437	278	269	3298
	75	626	49	479	290	249	3439
	75	626	50	584	385	328	8499
	75	626	51	330	385	340	4938
	75	626	52	442	284	284	3726
	75	626	53	430	310	284	3962
	75	626	54	500	342	281	3881
	75	626	55	555	341	311	5886
	75	626	56	578	364	342	7195
	75	626	57	500	333	326	5428
	75	626	58	516	382	330	6565
	75	626	59	506	331	279	4673
	75	626	60	471	275	289	3743
	75	626	61	654	362	277	6570
	75	626	62	432	296	283	3747
	75	626	63	541	314	327	5555
	75	626	64	529	298	303	4987
	75	626	65	649	362	333	8293
	75	626	66	480	296	259	3527
	75	626	67	384	231	215	1617
	75	626	68	532	336	321	5727
	75	626	69	544	389	269	6111
	75	626	70	698	405	390	11025
	75	626	71	493	354	279	4869
	75	626	72	441	314	296	4285
75	626	73	408	265	285	3070	
75	626	74	530	377	349	7654	
75	626	75	538	385	386	8269	
75	626	76	436	446	411	11844	
75	626	77	420	294	289	3569	
75	626	78	406	296	240	2881	
75	626	79	597	398	351	8340	
75	626	80	563	398	336	7949	
76	700	2	504	303	303	4627	
76	700	3	374	494	374	5973	
76	700	4	436	277	273	3788	
		最大値	778	446	455	13590	
		最小値	380	251	240	2881	
		平均値	546	357	337	6986	
		標準偏差	683	051	648	2646	

## 2. 弥生・古墳時代におけるモモの利用について—岡山県地域南部を中心に—

南 健太郎

### はじめに

モモ (*prunus persica*) は中国西北部や黄河上流域に起源をもち、日本列島では縄文時代以降の遺跡から出土が確認される。モモの利用が活発化するのには弥生時代になってからで、特に後期になると日本列島各地で出土数が増加するようになる(寺沢ほか1981)。近年は奈良県桜井市纏向遺跡第168次調査の大型土坑から2769点の桃核が出土し(桜井市纏向学術センター編2013)、弥生時代のモモに大きな関心がよせられるようになった。この土坑は弥生時代終末期における日本列島最大規模の建物を含む方位をそろえた建物群の廃絶にともなう祭祀行為に関わるものと考えられている。そこで大量のモモが廃棄されていたことは、この時期の祭祀においてモモが重要な役割をもっていたことを想定させる。この時代の人物と考えられる邪馬台国の女王卑弥呼は「鬼道に事え、能く衆を惑わす」とあり、モモを用いた祭祀行為もその一部であった可能性がある。一方、桃核の形態分析からは5世紀段階における新種の出現が指摘されており、これには渡来人が関与した可能性が示されている(金原ほか1990、金原1996)。このような意味で弥生時代から古墳時代においてモモがどのように利用されていたのかを考えることは、日本列島の歴史動態を考えるうえで重要な意味をもっている。

すでに述べた弥生時代後期におけるモモの増加は汎列島規模で展開しているが、なかでも岡山県地域はそれが最も顕著な地域といえる。当地域では弥生時代後期から古墳時代前期の遺構から合計10,000点以上の桃核が出土していることが確認されている(柴田2014、金田2018a・2018b)。ここまで大量のモモが出土している地域は他になく、当地域のモモ利用の実態を明らかにすることは非常に重要であると考えられる。このような意識のもと、筆者は岡山大学構内遺跡である岡山県岡山市鹿田遺跡および同津島岡大遺跡で出土したモモを集成し、出土遺構の傾向についてまとめた(南2019)。鹿田遺跡では弥生・古墳時代の遺構から58点のモモが確認され、出土状況からモモと祭祀行為との間に有機的な関係性が存在したことを指摘した。本論では鹿田遺跡に加え、岡山県地域のなかでも特に大量のモモが出土した岡山県倉敷市上東遺跡、同岡山市津島遺跡、同百間川遺跡群、で報告されている資料を集成し、その出土傾向について検討する。検討にあたっては、モモの利用状況を明らかにするために各遺跡における出土遺構と出土時期に着目する。

なお本論における時期区分は河合忍の成果(河合2015・2018)に従う。

### 1. 鹿田遺跡のモモ

#### a. 遺跡の概要

旭川下流の西側に位置する集落遺跡である。弥生時代中期後葉から集落経営が開始され、弥生時代後期前葉における短期間の遺構空白期をはさんで、古墳時代初頭まで続く。その後は古墳時代後期に小規模な集落が現れるが、すぐに断絶する。弥生時代中期後葉以前は陸と海の境界付近であったようで、集落経営開始後は海を臨むような周辺環境であったと考えられる。

#### b. 出土遺構と出土時期

弥生・古墳時代におけるモモは58点出土している(表7)。時期別の内訳は弥生時代中期後葉の井戸1基(桃核4点、以下( )内の数字は桃核の点数を示す)、後期中葉の井戸2基(18)、後期後葉の井戸1基(2)、後期末の井戸5基(22)、古墳時代初頭～前葉の井戸5基(10)、土坑1基(1)である。注目されるのは、井戸からの出土が際立って多いことである。古墳時代初頭～前葉の土坑から出土したのは1点のみであることを考えると、ほぼすべてのモモが井戸から出土しているといってもよい状況である。鹿田遺跡では井戸を埋める際の祭祀

表7 鹿田遺跡出土桃核一覧

No	調査次	遺構名	遺構時期	点数	その他の種属	備考	文献
1	第1次調査	井戸1	弥生時代中期後葉	4	雑草メロン、ヒョウタン、クルミ、雑草		1・2・3
2	第1次調査	井戸2	弥生時代後期中葉	7	トナ、クルミ、イヌガヤ		
3	第2次調査	井戸1	弥生時代後期中葉	11	クルミ		
4	第2次調査	井戸3	弥生時代後期後葉	2			
5	第1次調査	井戸6	弥生時代後期末	6			
6	第1次調査	井戸7	弥生時代後期末	5			
7	第1次調査	井戸8	弥生時代後期末	1			
8	第1次調査	井戸10	弥生時代後期末	2			
9	第1次調査	井戸13	弥生時代後期末	13	マクワウリ、クルミ、カシ		
10	第1次調査	井戸14	古墳時代初期～前葉	1			
11	第1次調査	井戸15	古墳時代初期～前葉	6	マクワウリ、ヒョウタン		
12	第6次調査	土坑1	古墳時代初期～前葉	1	ヒョウタン、メロン、タカラブドウ、オオイヌタテ、シロバナ		
13	第7次調査	井戸1	古墳時代初期～前葉	1		2点の可能性あり	
14	第25次調査	井戸1	古墳時代初期～前葉	1	雑草メロン		
15	第25次調査	井戸2	古墳時代初期～前葉	1	雑草メロン		

## 文献

- 南野太郎2019「縄文時代～近世におけるモモの基礎的研究－岡山大学橋内遺跡出土資料を中心に－」〔記要2017〕岡山大学縄文文化財調査研究センター
- 岡山大学縄文文化財調査研究センター編 1988『鹿田遺跡1』岡山大学橋内遺跡発掘調査報告第3巻
- 山本悦雄1991「岡田橋内遺跡出土の自然遺物について－井戸出土の様子を中心に－」〔岡山大学橋内遺跡調査研究年報〕8 岡山大学縄文文化財調査研究センター
- 岡山大学縄文文化財調査研究センター編 1997『鹿田遺跡4』岡山大学橋内遺跡発掘調査報告第11巻
- 岡山大学縄文文化財調査研究センター編 2007『鹿田遺跡5』岡山大学橋内遺跡発掘調査報告第25巻
- 岡山大学縄文文化財調査研究センター編 2018『鹿田遺跡12』岡山大学橋内遺跡発掘調査報告第34巻

行為、しかもその局面が変わるところでモモが利用されたと考えられることをすでに指摘した(南2019)が、モモと井戸の結びつきはかなり強いものと考えられる。

鹿田遺跡の井戸は弥生時代後期後葉から掘削深度が浅いものが出現し、これらの井戸には特殊な埋没過程を示すという共通点がある(南2013、ここではこれらを「特殊井戸」と呼称する)。弥生時代後期末では3基の特殊井戸(第1次調査井戸8・11・13)のうち2基(同井戸8・13)から桃核が出土しており、高い比率を示している。特殊井戸で、祭祀的色彩の強い、第1次調査井戸13では鹿田遺跡で最多の13点の桃核が出土している。また、特殊井戸以外でも、古墳時代初期～前葉の第1次調査井戸15は居住域の中心部から距離を置いたところに掘削されたもので、漆塗短甲状木製品が出土している。本井戸からは当該期で最も多い6点の桃核が出土している。

このように鹿田遺跡におけるモモの主要な用途は井戸の埋め戻しの際の祭祀行為に関連したものであったと考えられる。

## 2. 上東遺跡のモモ

## a. 遺跡の概要

上東遺跡は、足守川下流域に展開した集落遺跡である。足守川下流域は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡・遺構密度が非常に高く、津寺遺跡などの大規模集落群が存在する。当地域の中核域であったといえる。上東遺跡は集落群の最も南に位置しており、海浜性の集落であったと考えられている。

## b. 出土遺構と出土時期

モモは9644点以上が出土している(表8)。時期別の内訳は、弥生時代後期中葉の井戸1基(点数未報告)、弥生時代後期後葉の井戸1(36)、弥生時代後期末の井戸1(2)、そして弥生時代後期前葉～古墳時代前半期まで機能した波止場状遺構(9606)である。波止場状遺構を除いては、すべてが井戸からの出土である。井戸での出土が多い点は鹿田遺跡と共通している。弥生時代後期末のオの町調査区P-1は完形、および完形に復元・図示できる土器65点以上が出土した井戸である。土器は、ほとんどの甕と約1/3の底の底部外面に煤が付着して

表8 上東遺跡出土桃核一覧

No	調査区	遺構名	遺構時期	点数	その他の種葉	備考	文献
1		波止場状遺構	弥生時代後期前期～古墳時代前半期	9606			1・2
2	才の町調査区	P-1	弥生時代後期中葉		タリ、ソウマメ、ウリ		3
3	鬼川市調査区	井戸-Ⅱ	弥生時代後期後葉	36	不明種1		4
4	才の町調査区	P-ト	弥生時代後期末	2	トナの実1、センナリビョウタン15、マクワウリ3など		

## 文献

- 1 岡山県教育委員会編2001『F庄遺跡 上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157
- 2 柴田英樹2014「センター収蔵品紹介VOL.15～弥生時代～古墳時代のモモ 上東遺跡・津島遺跡はか～」『所報古備』56 岡山県古代古備文化財センター
- 3 岡山県教育委員会編1977『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16
- 4 岡山県教育委員会編1974『山陽新特産建設に伴う調査Ⅱ（岡山以西）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2

おり、井戸に入れられる前に火を受けていたことがわかる。莢の半数は内部に炭化したコモおよびアワが付着しており、炊事行為を含む祭祀であった可能性もある。モモは2点あり、センナリビョウタン15点、マクワウリ3点も出土している。祭祀性の高い井戸からこれらの植物が出土していることは注目される。

一方、9,606点もの桃核が出土した波止場状遺構は、海に向かって構築された突堤状の高まりとされている。構築されたのは弥生時代後期前葉で、古墳時代前半期には機能が喪失したと考えられている。波止場状遺構から出土した遺物は多様で、日常土器に加え、弧帯文や絵画が刻まれた土器、ト骨などの特殊な行為に使用されたと考えられる遺物も含まれている。モモがどの時期に帰属するかは明確にし難いが、一遺構から出土した点数としては日本列島最多である。これだけの量が狭い地点で出土したことは、弥生時代後期から古墳時代前半期にかけて当地域にコモが豊富に存在したことを示している。

## 3. 津島遺跡のモモ

## a. 遺跡の概要

津島遺跡は旭川下流の西側に位置する集落遺跡である。弥生時代前期の水田が検出されており、朝鮮半島系の松葉型土器の出土もみられる。朝鮮半島から北部九州に渡来した文物を受容している点は、当地域の農耕開始期の様相を探るうえで重要である。また河道1では大量の木製品が出土しており、特に建築部材は弥生時代の建物構造復元に大きく貢献した。

## b. 出土遺構と出土時期

モモは2,366点以上が出土している（表9）。時期別の内訳は、弥生時代中期後葉の池1ヶ所（点数未報告）、弥生時代後期後葉～末の河道1ヶ所（2,359点）、古墳時代前期中葉の井戸1基（2）、古墳時代中期前葉の井戸1基（5）である。河道を除く出土遺構が井戸に限られていることは、先の鹿田遺跡、上東遺跡と共通している。さらに古墳時代中期にまで井戸での出土が継続している点も注目される。弥生時代中期後葉の池は溜池としての機能を有していた可能性が指摘されており、イネ、ウリ類、草本類がともに出土している。出土した土器などに目立った祭祀具などはなく、上東遺跡でみられた埋め戻しの際の燃焼行為なども確認されていない。この他にも古墳時代中期前葉の井戸からモモ5点がサクラ2、カラスザンショウ1、アサ4、キカラスウリ2、ヒョウタン類9（+果皮1）、ウリ類5とともに出土している。井戸の底では完形の手捏ね土器が出土している。モモを含む植物は下層からの出土であるため井戸の埋没過程の初期段階においてこれらが含まれたと考えられる。

一方、2,359点が出土した河道は、幅50mにおよぶものであり、弥生時代後期後葉から明確になり、古墳時代前期には中央がくぼむ程度まで規模を縮小している。このことからモモは弥生時代後期後葉～末に河道の埋土に入り込んだ可能性が高い。河道1からは大量の土器も出土しているが、その中には特殊器台や、特殊器台に類似した筒形の土器（「特殊」な器台）といった祭祀行為に利用されたと考えられる遺物もある。モモの出土状況の全

表9 津島遺跡出土品概観

No	調査区	遺構名	遺構時期	点数	その他の種別	備考	文献
1	-	溝1	弥生時代中期後葉		イモ、ウリ類、草本類		1
2	-	河道	弥生時代後期後葉～末	2359			1・2
3	-	井戸1第8層	古墳時代前期中葉	2	クリ1、ケヤキ多数、カラスゲンショウウ3、ブドウ属1など 多種多量		3
4	-	井戸6下層	古墳時代前期前葉	5	サクラ2、カラスゲンショウウ1、アザ4、キカラスウリ2、 ヒョウタン類9（+葉度1）、ウリ類5		1

## 文献

- 1 岡山県教育委員会編2003「津島遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
- 2 柴田英樹2014「センター収蔵品紹介VOL.15-弥生時代～古墳時代のモモ 上東遺跡・津島遺跡はか～」『所報古備』56 岡山県古代古墳文化財センター
- 3 岡山県教育委員会編2005「津島遺跡6」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告190

体像は不明であるが、建築材の近くでの出土や、21個がまとまって出土したことも確認されているため（金田2018b）、上流から流れ込んできた可能性も完全には否定できないが、建物内に保管されていたものや、まとめて投棄されたものもあったことが想定される。

## 4. 百間川遺跡群のモモ

## a. 遺跡の概要

百間川遺跡群は旭川下流の東側に位置しており、南には操山を望む。百間川遺跡群とは百間川原尾島遺跡、百間川沢田遺跡、百間川兼基・今谷遺跡、百間川米田（旧当麻）遺跡の総称であり、縄文時代以降の多様な遺構・遺物が確認されている。なかでも弥生時代前期以降の水田や、弥生時代中期～後期の手工業生産、弥生時代後期以降の他地域系土器は注目される。

## b. 出土遺構と出土時期

モモは61にもおよぶ遺構から出土しており、遺跡ごとの内訳は、百間川原尾島遺跡が18、百間川沢田遺跡が12、百間川兼基遺跡が5、百間川今谷遺跡が9、百間川米田遺跡が17である。以下、各遺跡の様相についてみていく。

## (1) 百間川原尾島遺跡

百間川遺跡群で最も多くの遺構から出土している（表10）。時期別の内訳は、弥生時代後期中葉の井戸3基、土坑1基、溝1条、窪地1ヶ所、弥生時代後期後葉の井戸1基、堅穴住居1基、後期末の土坑1基、堅穴住居1基、古墳時代初頭～前葉の堅穴住居1基、古墳時代前期中葉の堅穴住居1基、古墳時代中期の溝1条、古墳時代後期の土坑1基、溝1方、堅穴住居1基である。注目すべきは弥生時代後期以降における出土遺構の多様性である。鹿田遺跡、上東遺跡、津島遺跡では、波止場状遺構や河道を除くと、基本的には井戸からの出土に限られていた。百間川原尾島遺跡では井戸、土坑、溝、堅穴住居、窪地といった様々な遺構から出土しており、弥生時代後期末以降は井戸での出土が報告されていない。逆に堅穴住居からの出土が弥生時代後期後葉以降継続してみられる点は興味深い。上記3遺跡ではモモの利用に祭祀的色彩が見て取れたが、百間川原尾島遺跡では異なる利用状況であったことが想定される。

## (2) 百間川沢田遺跡

百間川沢田遺跡では縄文時代後期の土坑から桃核が出土していることが注目される。弥生・古墳時代における時期の明確な遺構の内訳は、弥生時代前期中葉の溝1条、弥生時代後期後半～末の水田1ヶ所、古墳時代前期前葉～中葉の溝1条、古墳時代前期中葉の井戸5基・溝1条、古墳時代後期の溝2条である（表11）。出土遺構としては井戸、溝などがみられるが、その多様性は百間川原尾島遺跡ほど明瞭ではない。弥生時代前期中葉の出土例は弥生時代で最もさかのぼるものであり注目される。モモが出土した溝からはウリも出土している。両者は祭

表10 百間川原尾島遺跡出土桃核一覧

No	調査区	遺構名	遺構時期	点数	その他の種実	備考	文献
1	丸太調査区	井戸-20	弥生時代後期中葉	2			1
2	三股ヶ・丸太調査区	井戸4	弥生時代後期中葉		ウリ類		
3	三股ヶ・丸太調査区	井戸2	弥生時代後期中葉				
4	三股ヶ・丸太調査区	溝27	弥生時代後期中葉				2
5	三股ヶ・丸太調査区	土壇32	弥生時代後期中葉				
6	三股ヶ・丸太調査区	窪地1	弥生時代後期中葉?				
7	三股ヶ・丸太調査区	竪穴住居1	弥生時代後期中葉				
8	丸太調査区	井戸2	弥生時代後期中葉	1			3
9	三股ヶ・丸太調査区	竪穴住居7	弥生時代後期中葉				2
10	三股ヶ・丸太調査区	土壇20	弥生時代後期中葉				4
11	三股ヶ・丸太調査区	P-285 (旧)	弥生時代後期				
12	三股ヶ・丸太調査区	竪穴住居12	古墳時代前期-前葉	5			2
13	三股ヶ・丸太調査区	竪穴住居10	古墳時代前期中葉				
14	丸太調査区	溝-73	古墳時代前期中葉-6世紀前半-7世紀初期		タネミ、トナリ、ヒョウタン、ウリなど		
15	丸太調査区	土壇-255	6世紀後半	4		桃核?	1
16	三股ヶ・丸太調査区	竪穴住居31	6世紀末-7世紀初				2
17	三股ヶ・丸太調査区	P-77 (旧)					
18	従来の調査区	溝13	6世紀末-7世紀初期	2			3

## 文献

- 1 岡山県教育委員会編1984『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
- 2 岡山県教育委員会編1994『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告92
- 3 岡山県教育委員会編1995『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- 4 岡山県教育委員会編1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106

表11 百間川沢田遺跡出土桃核一覧

No	調査区	遺構名	遺構時期	点数	その他の種実	備考	文献
1	西元調査区	土壇125	縄文時代後期	破片 15			1
2	高橋手A地区	溝-69	弥生時代前期中葉		ウリ	圧痕土器	2
3	足洗調査区	水田跡作土	弥生時代後期後半-末				1
4	高橋手B調査区	溝126	古墳時代前期-前期中葉	1			3
5	高橋手A地区	井戸-15	古墳時代前期中葉				2
6	高橋手B調査区	井戸11	古墳時代前期中葉	50	ヒョウタン		3
7	高橋手A調査区	井戸6	古墳時代前期中葉	2			1
8		井戸9	古墳時代前期中葉	401		下層	3・4
9	足洗調査区	溝168・169	古墳時代後期				1
10	西元調査区	溝184	古墳時代後期				1
11	足洗調査区	溝4 (旧)					1
12	足洗調査区	溝171	古墳時代				1

## 文献

- 1 岡山県教育委員会編1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告91
- 2 岡山県教育委員会編1985『百間川沢田遺跡2』百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
- 3 岡山県教育委員会編2007『百間川兼基遺跡4』百間川沢田遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告208
- 4 柴田英樹2014『センター収蔵品紹介VOL.15-弥生時代-古墳時代のモモ 上東遺跡-津島遺跡はか-』『所報吉備』56 岡山県古代吉備文化センター

祀的色彩の強い鹿田遺跡の弥生時代中期後葉の井戸でも共伴しており、これらの関係性を考えるうえで興味深い。また百間川沢田遺跡では古墳時代前期中葉の井戸から401点の桃核が出土している。これは百間川遺跡群最多の出土点数である。同時期では50点が出土した井戸も確認されており、百間川遺跡群ではこの時期に最も盛んにモモが利用されたと考えられる。さらに百間川沢田遺跡では前後の時期に比べると古墳時代前期中葉に出土が集中する傾向があり、百間川遺跡群におけるモモ利用の画期とすることができる。

## (3) 百間川兼基遺跡

時期別の内訳は弥生時代中期中葉の土坑1基・溝1条、弥生時代中期後葉の土坑2基、弥生時代後期中葉の井



戸1基である(表12)。弥生時代後期中葉の井戸は、底に黒灰色土(炭)が堆積し、その上にはレンズ上に草木や炭化材が集中している状況が確認されており、モモやヒョウタンもそこに含まれていた。井戸の埋め戻しの初期段階におけるモモの利用がこの時期すでにおこなわれていた可能性を示している。

#### (4) 百間川今谷遺跡

百間川遺跡群内の他遺跡と同様に出土遺構に多様性がある(表13)。時期別の内訳は、弥生時代中期中葉の建物柱穴2基・井戸4基・土坑1基、弥生時代後期後葉の溝(自然流路)1条、弥生時代後期中葉～後期末の溝1条である。弥生時代中期中葉では最も多くの遺構から出土しているが、大地調査区井戸11や同地区井戸12では1点ずつの出土であり、複数のモモを利用するような祭祀行為が行われていたのかについては慎重な検討が必要である。また本遺跡では弥生時代後期中葉～後期末の溝から63点の桃核が出土しており、弥生時代後期後葉～古墳時代前半期にかけて存在していた河道からは316点の桃核が出土している。後者の点数はすでに挙げた百間川沢田遺跡の古墳時代前期中葉の井戸に次ぐ多さであるが、河道における帰属時期の詳細はさらなる検討が必要である。ただし河道では津島遺跡のように弥生時代後期後葉～後期末におけるある程度まとまった状態での出土も確認されているため、本例も同様に扱うことができるかもしれない。いずれにしても流水・滞水環境にあるところでのモモの出土率の高さが際立っていることは指摘できるだろう。

#### (5) 百間川米田遺跡

時期別の内訳は弥生時代中期中葉～後期中葉の溝1条、弥生時代後期の土坑1基、弥生時代後期後葉の井戸2基、弥生時代後期後葉～終末の井戸1、弥生時代終末の井戸1基、弥生時代終末～古墳時代前期中葉の落ち込み1ヶ所、古墳時代初頭～前葉の井戸9基、古墳時代後期のビット1基である(表14)。際立っているのは古墳時代初頭の井戸での出土率である。井戸から出土する点数で最も多いのものは52点で、次いで43点、20点である。百間川遺跡群における井戸での出土は弥生時代後期までは遺構数、出土点数の両面で目立つものではなく、百間

表12 百間川兼基遺跡出土桃核一覧

No	調査区	遺構名	遺構時期	点数	その他の種葉	備考	文献
1	東高代地区	土壁-65	弥生時代中期中葉		炭化米		1
2	東高代地区	溝-30	弥生時代中期中葉		○	獣骨あり	1
3	東高代地区	土壁-188	弥生時代中期中葉	1	緑豆、小豆		1
4	東高代地区	土壁-109	弥生時代中期中葉	2			1
5	大上川調査区	井戸-2	弥生時代後期中葉		草木、ヒョウタンなど		1

#### 文献

- 1 岡山県教育委員会編1982『百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51

表13 百間川今谷遺跡出土桃核一覧

No	調査区	遺構名	遺構時期	点数	その他の種葉	備考	文献
1	大地調査区	建物5(P-6)	弥生時代中期中葉				1
2	大地調査区	建物8(P-2)	弥生時代中期中葉			コダイヒメモモと記載	1
3	大地調査区	井戸8	弥生時代中期中葉		マツタビ、コナギ、ホタルイなど多数	コダイヒメモモと記載	1
4	大地調査区	井戸9	弥生時代中期中葉			コダイヒメモモと記載	1
5	大地調査区	井戸11	弥生時代中期中葉	1	マツタビ、ムギ		1
6	大地調査区	井戸12	弥生時代中期中葉	1	ザクロソウ		1
7	大地調査区	土壁-27	弥生時代中期中葉	3		コダイヒメモモと記載	1
8		水田4下部溝状遺構	弥生時代後期中葉～後期末	63			2・3
9		溝15・水路2・溝33	弥生時代後期後葉～古墳時代前半	316	アルミ1、ヒョウタン類7など		2・3

#### 文献

- 1 岡山県教育委員会編1982『百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51  
 2 岡山県教育委員会編2009『百間川今谷遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告217  
 3 柴田英樹2014『センター-収蔵品紹介VOL.15-弥生時代-古墳時代のモモ 上東遺跡・津島遺跡はか〜』『所報古墳』56 岡山県古代遺構文化財センター

表14 百間川米田遺跡出土土橋核一覧

No	調査区	遺構名	遺構時期	点数	その他の種実	備考	文献
1	1983～1994年度調査区	溝101	弥生時代中期前葉～後期中葉	9 + a			
2	1983～1989年度調査区	井戸105	弥生時代後期後葉	1			1
3	1983～1995年度調査区	井戸116	弥生時代後期後葉	10			
4	当核調査区	井戸304	弥生時代後期後葉～末	1			2
5	1983～1987年度調査区	井戸111	弥生時代後期末	8			
6	1983～1996年度調査区	落ち込み101	弥生時代後期末～古墳時代前期中葉	1・3			1
7	1983～1985年度調査区	土坑128	弥生時代後期	76			1・3
8	1983～1985年度調査区	井戸103	古墳時代初期～前葉	3	ヒョウタン1、タケノコ3、不明3		1
9	1983～1985年度調査区	井戸114	古墳時代初期～前葉	43	ヒョウタン、スモモ、ムクノキ		
10	1983～1985年度調査区	井戸110	古墳時代初期～前葉	52		文献1には井戸109と記載、遺構番号の誤り(※)	1・3
11	1983～1986年度調査区	井戸112	古墳時代初期～前葉	2			
12	1983～1988年度調査区	土坑141	古墳時代初期～前葉	2			
13	1983～1990年度調査区	井戸101	古墳時代初期～前葉	30			
14	1983～1991年度調査区	井戸107	古墳時代初期～前葉	10			
15	1983～1992年度調査区	井戸108	古墳時代初期～前葉	1			1
16	1983～1993年度調査区	井戸302	古墳時代初期～前葉	1			
17	1983～1996年度調査区	F1245	古墳時代後期	1			

## 文献

- 1 岡山県教育委員会編1989『百間川米田遺跡3』岡山県博物館文化財発掘調査報告22
  - 2 岡山県教育委員会編2002『百間川米田遺跡4』岡山県博物館文化財発掘調査報告364
  - 3 柴田英樹2014『モンスター-収蔵品紹介VOL.15-弥生時代～古墳時代のモモ 上東遺跡・津島遺跡はか～』『所報吉備』26 岡山県古代吉備文化財センター
- ※ 岡山県教育委員会のご教示による

川沢田遺跡や当遺跡の古墳時代初期～前期中葉に顕在化する。

## 5. まとめと展望

以上、岡山県南部地域における主要なモモ出土遺跡について、出土遺構とその時期に着目しながら様相を整理してきた。モモの利用に関わる点は次のようにまとめることができる。

- ・当地域では弥生時代前期中葉からモモの利用がみられるが、前期の事例は1例のみであり、出土例が複数確認できるようになるのは弥生時代中期中葉以降である。
- ・弥生時代中期中葉の出土例は百間川遺跡群に限られている。他遺跡で盛んに利用されるようになるのは弥生時代中期後葉以降であり、この時期には井戸での祭祀行為に利用されている。
- ・上東遺跡の波止場状遺構出土の9,606点（弥生時代後期前葉～古墳時代前半期）、津島遺跡の河道出土の2,359点（弥生時代後期後葉～終末）に示されるように、弥生時代後期において当地域に大量のモモが存在したことは特筆される。
- ・鹿田遺跡、上東遺跡、津島遺跡では、上東遺跡の波止場状遺構と津島遺跡の河道以外ほぼすべてが井戸からの出土で、祭祀的色彩の強い井戸との結びつきが確認できる。
- ・百間川遺跡群では、鹿田遺跡、上東遺跡、津島遺跡と異なり、さまざまな遺構からモモが出土している。40点以上のモモが出土した遺構は井戸、溝、土坑と多様である。ただし井戸では埋め戻しの初期段階における利用がみられ、百間川遺跡群最多の401点が出土したのも井戸である。やはり井戸との関連性は高かったものと思われる。百間川遺跡群で井戸での出土が顕在化するの古墳時代初期～前期中葉である。

今後はモモの利用方法を類型化し、さらに祭祀行為との関係性をより詳細に検討していく必要がある。またモモの歴史的な性格を探るためには他地域の状況や、大陸、朝鮮半島との比較も視野にいれておかなければならぬ

い。これらの点を今後の課題としておきたい。

本論を草するにあたっては金田善敬、柴田英樹、伴祐子、松尾佳子の各氏にご助言、ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

#### 【参考文献】

- 金田善敬2018a 「上東遺跡出土の桃の種」が日本遺産に」『所報古備』65 岡山県古代吉備文化財センター
- 金田善敬2018b 「津高遺跡の桃の種」『所報古備』65 岡山県古代吉備文化財センター
- 河合忍2015 「中国・四国」『弥生土器』考古調査ハンドブック12 ニューサイエンス社
- 河合忍2018 「山陽東部」『前期古墳編年を再考する』六一書房
- 板井市縄向学研究会編2013 『奈良県板井市 郷向遺跡発掘調査概要報告書-トリノノ前地区における発掘調査-』板井市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集 板井市教育委員会
- 柴田英樹2014 「センター収蔵品紹介VOL.15-弥生時代～古墳時代のモモ 上東遺跡・津高遺跡ほか-」『所報古備』56 岡山県古代吉備文化財センター
- 寺沢薫・寺沢知子1981 「弥生時代植物質食料の基礎的研究」『考古学論叢』第5冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 金原正明・金原正子・粉川昭平1990 「和邇遺跡出土種実と花粉分析」『奈良県遺跡調査概報』1989年度 奈良県立橿原考古学研究所
- 金原正明1996 「古代モモの形態と品種」『考古学ジャーナル』No.409 ニューサイエンス社
- 南健太郎2013 「鹿田遺跡における弥生時代から古墳時代初期の井戸について」『紀要2012』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 南健太郎2019 「縄文時代～近世におけるモモの基礎的研究-岡山大学構内遺跡出土資料を中心に-」『紀要2017』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

### 3. 鹿田遺跡出土の香東川下流域「産」／「系」土器について

大久保 徹也（徳島文理大学）

#### はじめに

弥生時代後期中葉～後葉～ほぼ高橋編年Ⅷ期～X期初頭に相当する一段階に、高松平野の香東川下流域で特徴的な土器群を製作している。個性的な形態と製作手法・手順が看取でき、同時に特徴的な胎土調製パターンを採用する。その詳細な内容は追って述べることにするが、形態、製作手法・手順、胎土の特徴を共有し、この点で他の土器群とは明確に識別できる一群を香東川下流域「産」土器と称している。各種壺・甕・高坏など該期の主要な器種から構成され、かつ分別容易な諸特徴ゆえに域外搬出を踏づけやすく、土器地域型式の並行関係把握や、さらに土器流通の実態を把握する点でも有望な土器群である。

鹿田遺跡第一次調査でも香東川下流域「産」土器・甕1個体と、香東川下流域「系」土器・甕4個体が出土している（山本1988）。今、「系」土器と表現したものは、香東川下流域「産」土器の形態等をかなり厳密に踏襲しつつも、胎土調製パターンが相違する一群を指し、製作地は香東川下流域外に想定できる。一部では両者の差異は比較的早くから気づかれてきたが、この点についてまだ必ずしも十分な注意が払われているとはいえない。

筆者は2018年度から一つの研究プロジェクトに参加する機会を得て、香東川下流域「産」・「系」土器の詳細観察と検討を進めている。その一環で、2018年度に鹿田遺跡出土資料をあらためて詳細に観察する機会をもった。また岡山大学埋蔵文化財調査研究センターから関係資料のうち1点について試料を提供頂き、胎土調製パターンの客観的把握にきわめて有効な薄片観察法<sup>1)</sup>を実施している。

その結果、上記したように鹿田遺跡資料に香東川下流域「産」土器／「系」土器の両者が存在することが判明した。鹿田遺跡資料は早くに報告された四国産土器の搬入事例でもあり、香東川下流域「産」土器の典型例と捉えられることも少なくなかった。以下では香東川下流域「産」土器／「系」土器の特徴を示しながら、鹿田遺跡資料を位置づけることにする。

#### 1. 鹿田遺跡第一次調査資料の香東川下流域産／系土器

鹿田遺跡第一次調査資料のうち井戸07で香東川下流域「産」土器・甕1個体（図18-1）、土器溜り-2で4個体の香東川下流域「系」土器・甕（図18-2～5）が出土している。井戸07では井戸上部の炭化物、焼土が目立つ堆積層中に中形壺3、小形壺1、甕8、中小形鉢6、大形鉢1、高坏8以上等がまとまる。堆積状況からは一括廃棄と判断され、ここに香東川下流域「産」土器・甕1個体が伴う。報告ではこれらを鹿田・後4a期とする。土器溜り-2は累積的に形成された土器片や食料残渣等の廃棄地点で、小規模な貝層を伴い、壺7、甕13、小形鉢13、大形鉢1、高坏6、台付直口壺3、手焙り形土器1といった豊富な器種を含み、香東川下流域「系」土器・甕4個体を伴う<sup>2)</sup>。出土土器には明らかな時期差が看取され、報告では鹿田・後・4期～古・1期の幅で捉えている。報告では二重口縁甕の一部に口縁外面凹線文が残る点を重視して井戸07資料を鹿田・後4a期におく。しかし体下半の薄化の進展や底部平坦面の縮小傾向が強い形態の存在も見逃せず、全体としてより新しい様相が目立つように思われる。上記した出土状況からその一括性を評価すれば、全体を今少し下げた方がよいだろう。また土器溜り-2資料では高坏の一部（山本編1988図190-43、45）等に新しい様相が見受けられるが、大半は鹿田・後4b期に比定可能である。つまり両者の編年上の差異はごく小さく、高橋編年（高橋1988）Ⅷb期に位置づけうる。また前者の下流域「産」土器・甕と後者の下流域「系」土器・甕4個体にはほとんど形態面の差異は認められない。体下半まで張りを強め、その結果、底部縁辺は目立たないことと口縁部の薄化傾向が共通する。これは高橋編年ⅧbないしⅧc期に並行する香東川下流域産／系土器・甕の特徴である。したがって他の共伴

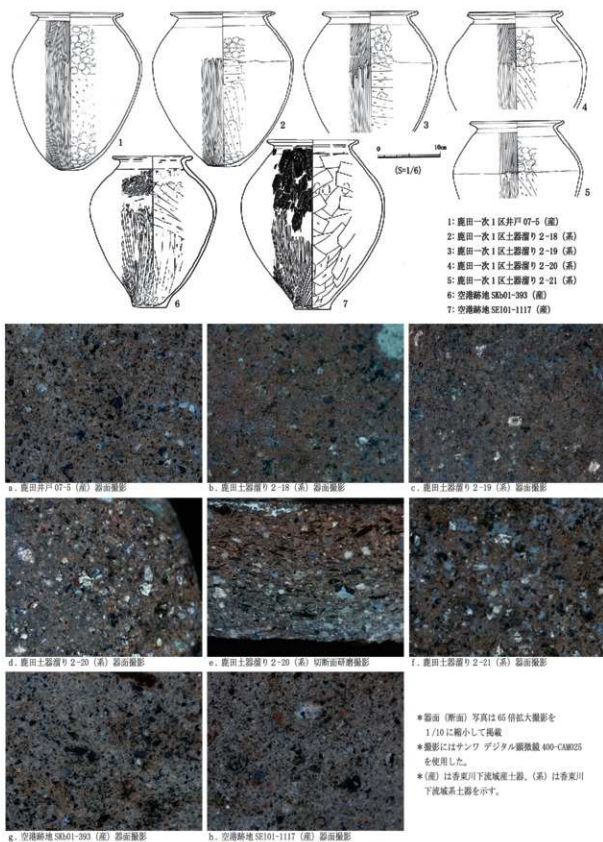


図18 香東川下流域「産」土器／「系」土器と胎土中砂礫配合状態



- 4 白色鉱物、つまり石英・カリ長石・斜長石の量比では一般には石英が後二者の合計数を凌ぐことが多いが、香東川下流域産土器では長石類が石英を凌ぐ構成がまま認められる。
- 5 さらにカリ長石と斜長石の関係では前者を全く含まないこともあり、また多くても後者の8割を超えることはない。

なお、カリ長石と斜長石の量比は香東川下流域産土器の問題にとどまらない。というのは香川県分析58事例のうち、香川県西部の丸亀平野7遺跡の出土資料31例中27例ではカリ長石が斜長石を大きく凌駕する。一方、高松平野及び以東の5遺跡出土資料27例中26例では反対に斜長石が卓越する。少なくとも香川県域ではカリ長石と斜長石の構成比が明確な東西差を示しており、土器生産地（厳密は胎土調合用砂礫採取エリア）を検討する上で重要な示唆を与えてくれる。

以上をまとめれば、第一に全体として有色鉱物（角閃石・雲母）が後期土器一般に比べ多い。そしてやはり角閃石が雲母を凌駕する。また石英に対して長石類（カリ長石、斜長石）が優越する傾向があり、さらに長石類では斜長石がカリ長石に卓越する。香東川下流域産土器の胎土調製パターンをこのように特徴づけることができる。

もちろんこうした構成上の特徴を具える配合砂礫は任意の地点で採取できるものではない。現時点では追求途上だが、香東川下流域に所在する石清尾山塊の南麓の特定地点が候補地となる。この点は別の稿であらためて述べることにしたい。そして香東川下流域で出土する「産」土器にこうした調合パターンから逸脱した胎土の検出例はごく少ない（それらは他地域で製作した「系」土器の搬入事例であろう）。次項で述べるように製作手法・手順の厳格な保持と全く同等に胎土調合パターンを厳格に踏襲するという事実は重要である。

さて上記の所見を踏まえて次に鹿田遺跡資料の胎土調製パターンを確認しよう。同じようにまずは予備的観察所見として図18-a～fで「産」・「系」土器計5個体の接写撮影写真を挙げた。井戸07-05はきわめて濃密に含まれる黒色粒の存在が目をはきく。その形状から角閃石とみてよいだろう。透明白色粒や乳白色粒を明らかにこれが凌駕する。またごく金色に発色した雲母片も散見されるがごく少ない。この他焼結土塊と見られる赤褐色粒若干を見る。

土器溜り2-18～22の砂粒構成は同質といえ、その点で製作地は同一の可能性が高い。そして井戸07資料とは明らかに違う。判りやすい土器溜り2-20を例示しよう。井戸07-05の黒色粒と同質の微細粒を一定程度含むが、あきらかに粗粒の雲母片（金色に発色）がこれを凌ぐ。透明白色粒、乳白色粒や赤褐色粒はいっそう目立たない。なお土器溜り2-20資料で薄片観察法を実施した。その際、採取試料の断面を研磨して接写撮影した写真を図18-eに掲げている。器面観察で目についた雲母片は断面写真では多くは刻み海苔風に見え、やはり他種鉱物を圧倒する。黒色粒は塊状を呈し、写真中央で乳白色粒と絡み様が観察できる。

井戸07-05（図18-a）は典型的な香東川下流域産土器の接写撮影写真（図18-g・h）と異ならない。薄片観察法で検証していないが、前項で確認した製作手法面と合わせ、下流域産「土器」と判定できる。一方土器溜り2の各資料はこれとは相違して、この写真でも雲母片の卓越がわかる。

この点を薄片観察法の同定・計数成果で確認しよう（表15上）。配合砂礫のサイズでは極細粒砂・細粒砂の合計は極細粒砂～細粒砂全体の39.7%と少なめである。中粒砂35.6%、粗粒砂20.5%を合わせると香東川下流域産土器の一般的傾向よりも配合砂礫はやや粗い傾向にある。次にカリ長石を全く含まないことは香東川下流域産土器を含め、香川県東部域出土資料に共通する。もっとも岡山県下資料で薄片観察法の観察データを欠く現状ではこのことを以て香川県東部産と断定するわけにはいかない。石英と斜長石の比では後者は前者のほぼ半数にすぎず、石英が卓越する。この点も香東川下流域「産」土器とは異なる。そして角閃石と雲母の比で後者が前者のほぼ倍に達する点はいっそう決定的な差異といえる。なお香東川下流域「系」土器の製作地は各所に分布するとみ

ているので、上記内容はあくまでその一つ、鹿田遺跡資料の特徴である。

### 3. 香東川下流域「産」甕と鹿田遺跡出土「系」甕の形態・製作技法

次に香東川下流域「産」甕の形態的特徴を製作手法をもとに少し細かくみておく。もちろんその形態も時期的に変化するが、ここでは基本的な形態的特徴を確認し、次いでそれを実現した製作技法・手順に話を進める。

大半のサイズは口径13~16cm、器高23~30cmの範囲に収まる。後期中葉~後葉の甕サイズには今少し幅があり、口径10cm、器高15cm弱の小形品から口径25cm内外、器高40cm前後の大形品までの広がりがあるが、香東川下流域産土器・甕はこの中の専ら中形サイズといえる。頸基部=体部上端の径10~13cm程度に対して体部の最大径は20cm前後から30cm程度に達する。言い換えれば体部を大きく張り出せた上で、その上端を強く絞り込む形と表現できる。最大径は体部高の下から2/3あたりかそれよりやや高い位置にあって、狭い範囲をことさらに強く張り出させる。これがプロポーションの面で一つの個性を生み出している。例えば吉備甕（高橋編年Ⅱb期以降）も体部を強く張る形態であるが、体部中位から肩にかけて張り出し部は上下に長く連続し、提灯状とも称される特徴的な形態を作り出す傾向がある。これとは大きく相違した形である。

強く張った体部の上端（=頸部）を大きくせば、さらにその上端に幅狭い微妙な立上り部を作り出す。この点も形態上の特色といえる。そうしてこの部分に土台として短い強く開く口縁部を取りつける。口縁部は体部上端に対してほとんど鋭角にとりつく点も形態上の特徴といえる。弥生後期の甕一般では体部上端の絞り込みおよび口縁部の開きが弱く、結果として体上部に対して口縁部が鈍角に取り付く形態が少なくない。口縁部は全体として丁寧な横ナデを重ねて仕上げ、狭いが整った端面を作る。さらに端部は小さく揃え上げる。またしばしば口縁部上面と体上端を挟むようにして加えた強い横ナデを以て、口縁部折り返し部をことさらに強調する。以上の形態的な特徴から香東川下流域産土器/系土器と他系統土器一般との識別はごく簡単である。

続いて製作手順と手法上の特徴を解説しよう。粘土帯を積み上げ体部の大略を形作る。この工程にいわれる分割成形を推測する材料はない。この後、体部中位よりやや高い位置、20~22cm前後の体部高であれば底部から15~18cm前後を強く張り立たせる。張り出し部の内側を中心に指頭状の深い圧痕<sup>3)</sup>が集中的に観察される。底部付近から最大径部へ、またそこから体上部に向けても同様の痕跡は観察できるが、最大径部を離れるにしたがってそうした痕跡は目立って減る。なお最大径部付近以下の内面は後で述べるように事後に丁寧なヘラ削りを加えるため、圧痕の一部が残存するだけとなる。さて最大径部を挟んでその上下にやや幅広く叩き目<sup>4)</sup>をとどめる資料も見られる。叩き締め技法を多用していることは間違いないだろう。張り出し部も内外から挟み付けるように圧迫して作り出すとみるが、この部分に限っては通常の叩き締め技法とは手法上相違する可能性がある。顕著な内面圧痕等から、その作出はむしろ内面から突き出すことが主であって外側は板状工具もしくは掌でこの圧を受ける形であったと推測する。

張り出し部作出の後に内面の底部から最大径部にかけて丁寧にヘラ削りを加えるが、ほとんど最大径部以上の肩内面には及ばない。一般に内面ヘラ削りが全体に及ばない場合、施工部の内外で器厚に目立った差が生じてしまうが、香東川下流域産甕ではそうはならない。顕著な薄造りも特徴の一つであるが、それは必ずしも削り手法に基づかないようだ。上述のとおり最大径部は別にしてその上下には通常の叩き締め技法を用いて器壁の薄化を図る。削り手法は粘土帯積み上げ成形の当初は強度を保つために相当に分厚くしておく必要があった底部付近の内壁を削り込むことと、張り出し部の作出に伴う内面の著しい凹凸を解消することに力点があったようだ。

続いて体部外表面の仕上げ調整に進む。この段階ではまだ口縁部を付け足していない可能性があり、少なくとも体部から鋭角に開く最終的な形状は完成していないだろう。体部ハケ調整はほとんど上端から施す。この部分には最終的に強く横ナデを加えるが、それでも横ナデの下にハケ目が残ることがある。口縁部の最終形では上端部にハケ原体を差し込むことは困難だ。無理に差し込んでも原体先端が口縁部側に当たるはずだが痕跡はな



い。また体上端外面の強い横ナデも加えられなくなる。さてハケ調整前の体部外面は叩き痕跡（もしくは当て具痕跡）がある程度残り、大部分は内面調整時の保持に係る掌や指腹の圧痕が薄く広がる程度であっただろう。そこに施すハケ調整はほとんど最大径部より上に限る。器面最終仕上げは最大径部以下のヘラ磨きであるが、磨き痕間にまれに生じる空隙に痕跡を全く観察できないことからハケ調整範囲は上記したように部分的とみている。ハケ調整は二段階で施す。最初に最大径部を含めた体中部にせいぜい上下数cm程の狭い範囲に縦ハケを加える。その後、先行ハケ調整に一部被りながら体上端から最大径部付近まで第二の縦ハケ調整を施す。両者共に方向と範囲を描いて隙間なく丁寧に仕上げる。手順と範囲を含めかなり規格的である。なお観察されるハケ目の多くはかなり明瞭で、単なる薄い木板ではなく、端部を細かい櫛歯状に整えているかもしれない。

ハケ調整が及ばない体下半部は縦ヘラ磨きで仕上げる。口縁部の作出・整形に続く最終工程と思われるが、先にその様相を確認しておこう。ヘラ磨きは最大径部からほとんど下端までの体部外側面と底面に施す。体部外側面を仕上げた後に外底面を磨く手順らしい。前者の磨き範囲は平均的な壺サイズで長さ16~18cm程度だが、原体を押し当てて下端からこの間を一気に磨く。そしてこの後に外底面を丁寧に並行磨きを加える。

最後に口縁部の作出と仕上げの手順を述べよう。先に触れたせいぜい1~2cm程度の狭い立上り部から継ぎ足すように粘土帯を貼り足して口縁部とする。立上り部内面にしばしば指押えが連続したり、この部分に限った狭い横ハケ調整が観察されることが多い。最終仕上げの横ナデではほとんどかき消されるが、これは口縁部用粘土帯を継ぎ足し圧着する工程を反映するものであろう。こうして口縁部の基本形を作り出し、最後に口縁部の強い折り返しを作り整える口縁部外面-端面、端面-上面（外より半分ほど）、上面（内より半分ほど）-体部上端内面を各々挟み付けるように少なくとも三段階に分けて強くかつ丁寧な横ナデを繰り返して口縁部の細部形状を整える。この後体部外面にヘラ磨きを加え完成となる。

以上、かなり冗長な記述となったが、香東川下流域産土器の形態と製作技法面の特徴を詳しく見た。一言で表現すれば弥生時代後期の通常の土器製作に比べ相当に複雑で繊細な手順を重ねていることが明らかだ。また香東川下流域「産」甕では上に述べた手順の部分的省略や置き換えはまず看取できない。その結果、規格的な強い製品群を生み出している。

では胎土調合パターンを違え、製作地及び製作グループが相違するであろう香東川下流域「系」土器群の場合はどうか。鹿田遺跡土器溜り2の関係資料の場合、製作手順・手法の大部分は「産」土器のそれを踏襲し、その結果、外見上ほとんど「産」土器と見分けのつかない形態の再現に成功している。もっともわずかな差異を外面調整の一部に見出すこともできる。土器溜り2-18では体部上半のハケ調整そのものを省き、同20、21では前後2回に分けるべきハケ調整を一段階にまとめて簡略化する。また同19では二段階のハケ調整を加えるがその手順を違えた全体に粗雑化している。ちなみに、井戸07-5資料はこの部分でも「産」甕の手順を守っている。

最後にもう一度まとめておこう。土器溜り2の4個体の胎土調合パターンは「産」土器とは異なる。現時点で配合砂礫の採取地は特定できないが、「産」土器のそれとは異なることとみてもよい。製作地が異なれば胎土調合パターンにこうした差異が生じることは当然である。製作技法と手順はかなりの程度、「産」土器の定則を踏襲するが、完全に一致するわけではない。むしろ細部に及ぶ技法・手順の同調、そしてその結果として形態の精密な複製は、単なる完成品の外見観察では不可能だ。そうするとこの「系」土器製作グループ（の少なくとも一部）に、人的交流を介して「産」土器の製作に関与しその技術を会得した経験が浸透している筈だ。しかしその一方で、やや感覚的な表現だが、局所的に発生した「逸脱」は、関与経験の「風化」を意味するだろう。一般論的に述べれば、関与経験の再開機会あるいは関与経験の波動的な浸透があれば、「逸脱」はおそらく極小化されるであろうし、その逆の場合、「逸脱」は拡張し、最終的に外部由来技術は消滅に向かう。その点では鹿田遺跡「系」土器の「風化」はまだ端緒的だ。ところで後期中業~後業の間、技術伝統の保持に成功した「産」土器は結局のところ、長期にわたり「風化」発生之余地が生じず、結果として「逸脱」を阻んだことになる。「系」土器総体

ではおそらく多様であろう「逸脱」「風化」の度合いを観測することで、逆に「風化」「逸脱」を阻止した「産」土器製作体制の特質を浮彫にする一助となろう。鹿田遺跡資料をはじめ香東川下流域「系」土器はこの意味でも重要である。

近年、筆者が検討を進めている香東川下流域「産」土器／「系」土器の諸特徴の紹介を兼ねて、鹿田遺跡一次調査出土の関係資料の再観察所見を示した。冒頭に記したとおり、この土器群は弥生時代後期における土器製作と流通の実態を解明する有望な資料であり、引き続き多面的に検討を重ねたい。

なお本稿は科学研究費基盤（B）一般「土器生産技術は、いかに共有化され、維持・伝達されたか」（2018～2020 研究代表 愛媛大学 田崎博之）の中間成果の一部である。鹿田遺跡資料の観察にあたっては、山本悦世氏、山口雄治氏をはじめとする岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの諸氏にお世話になった。厚く御礼申し上げたい。

## 註

- 1) 薄片観察法については参考文献に掲げた松田他1999に拠られたい。また兵庫県教委や香川県教委の遺跡発掘調査報告ではこの手法の胎土分析事例が比較的多い。それらでも薄片観察法の概要を知ることができる。なお、鹿田遺跡資料の薄片観察は2018年度科学研究費で実施した（委託先パブリノサーヴェイ）。2020年度の研究報告に掲載する予定である。
- 2) 山本編1988図188-18～22の5点がこれに相当するが、底部片22は下半を欠く20もしくは21と同一個体となる可能性が高い。
- 3) 指頭状の圧痕と表記したが、単純に指先を当てたとは限らない。細かく観察すると圧痕中央に一二本の細い隆線、または網目状の細隆線が見られることが少なくない。指先程度の棒状器具を用いた可能性がある。なお鹿田遺跡土器溜り2-19・20でも同様の細隆線を具えた指頭状圧痕が確認できる。
- 4) ただし必ずしも刻み目を設けた定型な板状工具を用いているわけではないようだ。というのはいわゆる叩き目の残存事例はさほど多くはない。

## 【出典】

図1 掲載写真は久保保彰

実測図18-1～5 山本編1988図145、図188より

実測図18-6 乗松貞也編2004「空港跡地遺跡Ⅵ」香川県埋蔵文化財センター 第156図より

実測図18-7 森格也編2007「空港跡地遺跡Ⅹ」香川県埋蔵文化財センター 第66図より

## 【参考文献】

山本悦世編1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

高橋謙1988「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告』9 岡山県立博物館

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高1999「瓜生堂遺跡から出土した弥生時代中期の土器薄片の観察」『日本文化財科学会第16回発表要旨集』

## 4. 鹿田遺跡出土管玉の原石、遺物成分群同定

薬科 哲 男 (遺物材料研究所)

## はじめに

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多く、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。よって石器の原材産地分析で成功している<sup>1)</sup>、非破壊で分析を行なう蛍光X線分析法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。蛍光X線分析のみで鉱物名を求めることは出来ない。本報告書で使用する鉱物名は考古学で使用する通称名で薄片作成など岩石学的方法により証明されたものでない。遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この遺物成分の元素比の値と同じ成分を持つ遺物を各遺跡から探し、同じ石材を使用しているとして、その使用圏を石材採取遺跡も含めて求める。同じ成分の遺物は同じ石材を使用しているとすれば、石製品の製作行為の石材分割、成形過程の石材面の元素成分を接合していくことで石製品作りに関連づけられ、考古学的研究となり、石製品作りのために古代人が最初に原石を手にした玉材産地の地質学的産地から考古学的証拠を確認してから決定する。考古学的証拠が発見されなければ、玉材産地と決定できない。この時は、周辺遺跡で同じ元素成分の石材が多用されている場合玉材産地に近い関係にあると推測する。石製品の石材産地が不明のときは、同じ石材を使用した遺跡として、同じ石製品を作る遺跡から供給された消費遺跡と考えられる。遺物成分群の作成理由は、蛇紋岩、滑石、緑泥石片岩の露頭の各原石が均一か？否か？不明で、成分組成のバラツキの大きいもので原石群を作ると、原産地間（原石採取地点間）の区別ができない状態になり、産地同定結果を誤判定する可能性が非常に高くなるため信頼性のない結果になる。この誤判定を避けるために、玉類の成分組成で遺物群を作り、露頭の各原石1個、1個と遺物群と比較し一致するか同定をして地質学的産地を求める。そして、この地質学的産地が古代人が最初に原石を採取した地点が否か、考古学者による加工片の散布など証拠を求めて、考古学的産地を同定し、産地分析は終了する。地質学的産地が不明でも特定の地域で同じ成分の遺物が多数出土する地域が考古学的産地に近いとする考え

は、様式上の同形遺物形式が多数見られる地域が様式の発生地とした考察に匹敵すると考えられる。また、1 cmΦの分析管の中に入る玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、玉に含有されている常磁性種を分析し、蛍光X線分析で求めた結果をさらに詳細に石材、遺物成分群を区別するために産地分析に利用する<sup>2)</sup>。今回分析した管玉は、鹿田遺跡第7次調査の堅穴住居1出土の古墳時代初頭の1点<sup>3)</sup>である。

## 1. 碧玉原石の蛍光X線分析

図19に韓国、浦項碧玉、浦項緑色凝灰岩、花山碧玉の蛍光X線スペクトルの例を示した。碧玉の蛍光X線分析で求めた含有元素の中で、石材、遺物成分群の産地同定に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなる

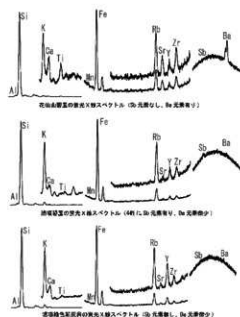


図19 浦項碧玉、浦項緑色凝灰岩、花山碧玉の蛍光X線スペクトル

ので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Sb、Ba、La、Ceのピークの高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。

## 2. 碧玉の原産地と原石の分析結果

これまでに分析した碧玉の原石の原産地を図20に示す。佐渡猿八原産地は、①新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良いものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ヶ所も見られる。分析した原石は猿八の各地点、小倉川河床から表採したもの、および地元で提供された原石などである。また提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、それはグリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重は、2.6～2.1の間で大半は2.6～2.48で、この中には、茶色系碧玉も含まれ、原石の比重が2.6～2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶色系と緑色系の縞があるなど、多少色の違いがあっても分析した元素組成上には大きな差はみられなかった。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は②鳥根県八東郡玉湯町玉造温泉地域である。横原堀地区から産出する原石は、濃緑色から緑色の緻密で割れ面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、他に硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619～2.600の間のものは10個、2.599～2.500は18個、2.499～2.400は7個、2.399～2.300は11個、2.299～2.200は11個、2.199～2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域のものが分析されているのがわかる。これら花仙山周辺の面白谷、瑪瑙公園、くらすこ地区などから原石を採取し元素組成の似た原石で、くらすこ群、面白谷瑪瑙群、花仙山凝灰岩群などを作った。玉谷原産地は、③兵庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で産出する碧玉の色、石質などは

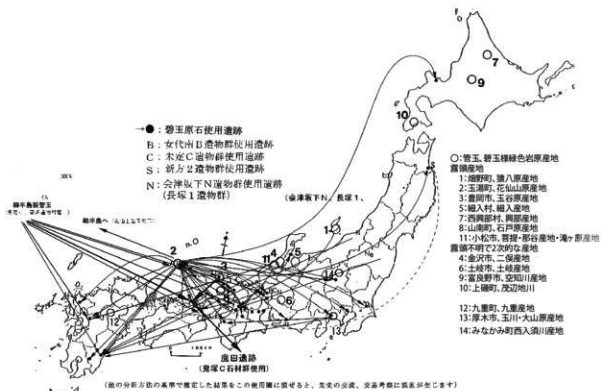


図20 古墳(続縄文)時代の碧玉製管玉の原材料使用分布圖および碧玉・碧玉様岩の原産地

肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑色系に茶褐色が混じるものもみられ、これは佐渡嶽八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡嶽八産原石より緻密で優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した玉谷産原石は、比重が2.644~2.600が多く、2.599~2.589の碧玉も少数採取できた。玉谷産原石は色の違いによる元素組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する元素組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、④石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから露頭は医王山に存在する可能性がある。この河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。また元素組成は他の産地のものと異なっており区別できる。しかし、この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか検証するために、さらに分析個数を増やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県砺波郡細入村割山定座岩地区にあり、そのグリーンタフの岩脈に出現して緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。それは肉眼では他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重を分析した8個は2.25~2.12と非常に軽く、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛知県土岐市地域であり、ここでは赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出している。このうち緻密な光沢のよい濃緑色で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。この原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地は、⑦北海道紋別郡西興部村にあり、その碧玉原石は鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は、⑧兵庫県永上郡山南町地区にあり、その安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少なく淡い緑色で、比重も2.6以上で一部の碧玉の組成は玉谷産碧玉に似る。また大部分の原石は元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.6~2.5が5個、2.5~2.4が5個である。その碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質のもの碧玉を多数収集することは困難である。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の川原で採取される碧玉は不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。⑪石川県小松市菩提、郡谷、滝ヶ原に緑色凝灰岩の露頭があり、その中に緻密な碧玉が包含されている。また、産出量は少ないが良質の碧玉が菩提川、宇田川から採取される。この地域から採取された碧玉の中に、女代南B遺物群に一致する元素組成の碧玉が含まれる。⑫大分県九重町・九重町歴史民族資料館付近から緻密で比重が2.1~2.2の淡緑色~緑色系、茶褐色系などの凝灰岩が採取され、玉材の可能性も推測される。最近、韓国、浦項地域から良質の碧玉及び緑色凝灰岩が見つかり、浦項碧玉A群、浦項碧玉B群及び浦項緑色凝灰岩A群を作った。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り合計62個を表16-1に示す。各母集団に原産地名を付けてその産地の原石群として、例えば原産地名が花仙山の場合、花仙山群と呼ぶことにする。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても元素組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、例えば、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原産地不明の碧玉製玉類の原材料で、玉作り行程途中の遺物が多数出土している。当初、原産地を探索すると言う目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B(女代B)群であるが、同質の材料で作られた可能性がある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。宇木沢田遺跡で採取された産地不明の管玉の中で相互に似た元素組成のものを集めて未定C(未定(C))群を作った。また、岐阜県可見市の長塚古墳出土の管玉で作った長塚(1)、(2)遺物群、



多摩ニュータウン遺跡、梅田古墳群、上ノ段遺跡、梅田東古墳群、新方遺跡、青谷A、B遺物群その他の遺跡などから出土した玉類および玉材剥片でそれぞれ遺物群を作り他の遺跡、墳墓から出土する玉類に組成が一致するか定量的に判定できるようにし、現在原石・遺物群は合計499個になり、これら遺物群を表16-2、-3、-4、-5、-6、-7、-8に示した。この他、鳥取県の鳥取市福部町多蛇ヶ池、鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。兵庫県香住町の海岸から採取された視径大1個の碧玉様の玉材は貝殻状剥離がみられる緻密な石質で少し青っぽい緑の石材で玉の原材料になると思われる。この玉材の蛍光X線分析の結果では、興部産碧玉に似ているが、ESR信号および比重(2.35)が異なっているため、興部産碧玉と区別ができる。

### 3. 蛍光X線分析法および電子スピン共鳴法による碧玉原材料との比較

遺跡から出土した玉類の汚染の少ない部分を探して完全な非破壊分析を行っている。遺物の原産地の同定をするために、(1) 蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2) また、10mm以下の遺物については、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する。

### 4. 蛍光X線法による産地分析

これら産地同定結果は蛍光X線分析装置はセイコーのSEA100L型を使用し、管玉の蛍光X線分析のスペクトルを図21に示し、化合物元素濃度および分析した玉の比重をアルキメデス法で測定し表17に示した。計算された濃度は破壊して行う厳密な定量分析値ではなく、半定量分析で、得られた濃度には誤差が相当含まれる可能性がある。同定のために元素成分比を求めて結果を表18に示す。分析した管玉の表面は緻密で、一見碧玉様であるが、比重が約2.2程度であり通称、緑色凝灰岩製管玉に分類した。原産地同定および遺物成分群同定をするために管玉のAl/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrを用いて原石・遺物群(表16)の結果と数理統計のマハラノビスの距離から8元素比として行う近似式を用いてホテリングT<sup>2</sup>乗検定<sup>a)</sup>により計算した同定結果を表19に示した。管玉は分析場所を変えて、合計49個分析した結果で最も同定確率が高く同定されたのは東大阪市の鬼塚遺跡出土の鬼塚C石材群で信頼限界の5%を大きく超えて同定され、管玉の石材が鬼塚C石材群と同じ石材でな

表17 鹿田遺跡出土管玉の非破壊分析による化学組成濃度

分析番号	非破壊分析による化学組成濃度 (wt.%)										重量	比重
	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	FeO				
129901	2.2	0.5	10.0	80.1	1.6	3.1	0.3	1.9			0.699	2.203
	SrO	BaO	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	Rb <sub>2</sub> O	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>	Nb <sub>2</sub> O <sub>5</sub>				
	0.1	0.1	0.0037	0.0684	0.001	0.004	0.0097	0				

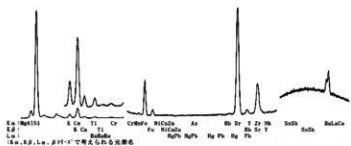


図21 鹿田遺跡出土緑色凝灰岩製管玉の蛍光X線スペクトル

表18 鹿田遺跡出土管玉の元素比分析結果

分析番号	元素比										重量 (g)	比重				
	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr						
129901	0.052	0.774	3.663	0.751	0.056	0.032	2.193	0.065	7.975	0.198	0.047	0.035	0	3.924	0.6987	2.203
JG-1 <sup>a)</sup>	0.081	3.305	0.736	0.198	0.111	0.277	3.479	0.956	1.361	0.187	0.017	0.020	0.096	1.567		

a) 標準試料, Ando, A. Kurusawa, H. Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JG-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8, 175-192.

いと言えない。より産地を正確に特定するために、蛍光X線分析法で同定された遺物の結果がESR分析の結果と一致するかESR分析を行った。

表19 鹿田遺跡出土管玉の石材産地同定

分析番号	ホテリダの分析定(産率)	ESR信号形	比率	総合判定
129901	鬼塚C石材群(71%)、鹿田管玉群(産) (60%)	Feのみ	2.305	鬼塚C石材群

## 5. ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンなど、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は完全な非破壊分析であり、直径が1mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大のものでも分析ができる場合がある。図22-(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、 $g$ 値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、 $g$ 値が2付近の幅の広い信号(II)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(III)で構成されている。図22-(1)では、信号(II)より信号(III)の信号の高さが高く、図22-(2)、-(3)の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。各原産地の原石の信号(III)の信号の形は産地ごとに違いがあり産地分析の指標となる。図23-(1)には花仙山、猿八、玉谷、土岐を示し、図23-(2)には興部、石戸、八代谷-4、女代B遺物群、八代谷を示し、そして図23-(3)には富良野市空知川の空知(A)、(B)、北海道今金町花石および茂辺地川の各原石の代表的な信号(III)のスペクトルを示した。また、図23-(4)には宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形、葉畑形、紫金山形を示した。ESR分析では碧玉のESR信号の形が、あらかじめESR分析している原石、および産地不明遺物群のESR信号形と一致した場合、その産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した鹿田遺跡の管玉のESR信号を図24に示す。ESR信号(III)のDFKの位置に非常に小さな信号と

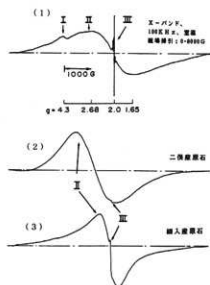


図22 碧玉原石のESRスペクトル  
(花仙山、玉谷、猿八、土岐)

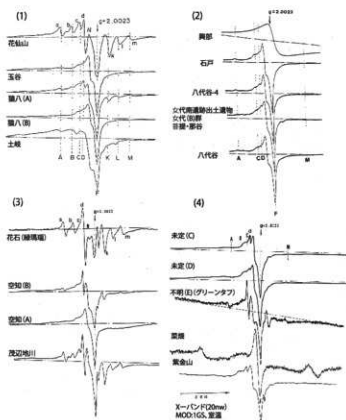


図23 碧玉原石の信号(III)のESRスペクトル



ノコギリ刃状信号が鉄イオンと推測するFe信号に重なる信号形で、表19のESR信号形の欄にFeのみと記載した。鹿田遺跡の管玉のESR信号は、鬼塚C石材群の分析番号124746、124752、124753、124770番で124770番は他と異なるように見えるが、信号の拡大率が大きいため、ESR信号のパラッキの中に入り、ESR信号からも鬼塚C石材群と同定できる。より正確な原産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法ともに同じ原産地に特定された場合は、蛍光X線の元素分析のみで判定した原石・遺物群産地よりも正確に、その原石・遺物群と同じものが使用されているとして総合判定原産地の欄に結果を記した(表19)。

## 6. 結論

今回分析を行った鹿田遺跡出土管玉の石材比重は2.203で、便宜的に決めた基準に従えば碧玉の2.6~2.4の範囲より小さく、緑色凝灰岩と思われる。蛍光X線分析で分析場所を変えて、合計49回分析した結果の中で信頼限界の5%を超える定量的に同定された回数は22回で、定性的に同定する5%以下~0.1%以上が12回で、どこかの遺物群(地質学的産地群も含めて)にも同定できなかった回数は14回であった。この中で最も確率が高く同定されたのは東大阪市の鬼塚遺跡出土の鬼塚C石材群で71%の確率で信頼限界の5%を大きく超えて同定され、管玉の石材が鬼塚C石材群と同じ石材でないとは言えないと推測した。またESR信号からも鬼塚C石材群と同定できて、蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法ともに同じ石材産地に特定された可能性を示す信頼度の高い結果が得られた。本研究は出土した管玉と同じ元素成分の遺物の分布範囲を求めることが主たる目的であることから、鬼塚C石材群に一致しなかった分析部分を含めて、将来、鹿田遺跡出土管玉と同じ元素成分の遺物が使用されているときに同定できるように新たに鹿田管玉群を作り表16の遺物群、原石群の表に登録した。参考資料として、日本の古代の玉材の移動、分布範囲が広域におよんでいる例を図20に示した。

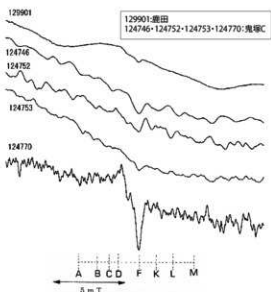


図24 鹿田遺跡出土管玉および鬼塚C石材群のESR信号(Ⅲ)のスペクトル

## 註

- 1) 薬科哲男・東村武信1983「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学16』pp.59-89
- 2) Tetsuo Warashina, 1992. Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. *Journal of Archaeological Science*, 19, pp.357-373
- 3) 東村武信1976「産地同定における統計学的手法」『考古学と自然科学9』pp.77-90
- 4) 山本悦世編2020「鹿田遺跡14」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第36巻

## 【参考文献】

- 茅原一也1964「長者が原産跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)」『長者が原 新潟県糸魚川市教育委員会』
- 薬科哲男・東村武信1987「ヒスイの産地分析」『富山市考古資料館紀要6』
- 薬科哲男・東村武信1990「奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析」『権原考古学研究所紀要 考古学論叢14』
- 李弘鐘・朴淳發・朴天秀・朴圭圭・李在煥・金大煥・薬科哲男・中村大介2008「韓半島における玉類の理化学的分析と流通」『第17回関西考古学会学術大会発表要旨』
- 薬科哲男2010「佐渡玉作遺跡出土石製玉類の石材産地同定分析」『今なぜ佐渡の玉作かー離島「佐渡」の玉作文化を探るー』(2010年日本玉文化研究会佐渡大要旨)



















## 第2章 調査資料の整理および公開・活用

### 第1節 調査資料の整理・保存処理

#### 1. 調査資料の整理

2018年度は鹿田遺跡第17・19・20・26次調査の整理作業を実施した。具体的には、第17次調査では実測・トレース・土壌洗浄等、第19次調査では遺物接合、第20次調査では遺物接合・種子選別、第26次調査ではトレースを行った。そして、鹿田遺跡第26次調査成果について「鹿田遺跡13」（岡山大学構内遺跡発掘調査報告35冊）として刊行した。

自然科学的分析では、鹿田遺跡第26次調査に関わるものでは、土壌の軟X線観察、花粉分析、プラント・オパール分析、樹種同定、種子および種子圧痕同定、動物骨同定を行った。他に、鹿田遺跡第7次調査出土管玉の産地同定、17次調査出土樹種および種子・種子圧痕の同定、25次調査出土漆製品の塗膜構造分析を行った。

表20 2018年度分析一覧

調査次	分析資料	分析の種類	分析者・分析機関	主な結果
鹿田7次	管玉	産地同定	濱村哲男	本書第1章第4節参照。
鹿田17次	種子・種子圧痕	同定	沖 陽子	(鑑定中)
	木製品・自然木	樹種同定	鹿城跡一	(鑑定中)
鹿田25次	丹塗り土師器碗	塗膜構造	(株)吉田生物研究所	(鑑定中)
	漆製品	塗膜構造	(株)吉田生物研究所	赤色漆と透明漆が塗られていた。
鹿田26次	土壌（小区調査群）	軟X線観察	文化財コンサルティング株式会社	土壌構造の充分な観察はできなかった。
		プラント・オパール分析		イネ・ジユスタマ属の植物遺体が発出された。
		花粉分析		弥生時代後期のクロマツ属厚皮。古墳時代前期のクワの育成が確認された。
	木製品・自然木	樹種同定	鹿城跡一	計量器ではマツ属繊維管束が、広葉樹ではクワが利用されていたことが明らかとなった。
動物および付着有機物	樹種同定・材質調査	(株)吉田生物研究所	樹種はスギ。付着有機物はアザビであった。	
漆製品	塗膜構造・樹種同定	(株)吉田生物研究所	樹種はアナトシイ属で、赤色漆と透明漆が塗られていた。	
動物骨	同定	江川達也	大型・中型・小型の哺乳類を確認した。	
種子・種子圧痕	同定	沖 陽子	種子は35科1種、種子圧痕はイネ科2種を確認した。	

#### 2. 調査資料の保存処理

##### a. 木製品のPEG処理

2018年度は昨年度から行ってきた第13期の保存処理を継続して実施した。処理槽からの木器の引き上げは8月9・10、16・17、21・23日に一部博物館実習の一環としても行った。

第13期：鹿田遺跡第9・11次（加工木、杭）、第10次（板材）、第24次（井戸枠、板材ほか）

##### b. 出土遺物の委託保存処理

鹿田遺跡第17次調査出土丹塗り土師器碗および25次調査出土漆製品の保存処理を（株）吉田生物研究所に依頼し、2018年12月に納品された。

## 第2節 調査成果の公開・活用

### 1. 公開・展示

#### a. 第19回キャンパス発掘成果展「The 鹿田庄」

##### (1) 概要

本年度は鹿田キャンパスで「鹿田庄」を主要テーマとして開催した。同キャンパスでの発掘成果展の開催は4回目である。鹿田遺跡と鹿田庄の概要について、鹿田キャンパスの歴史を建物配置図からたどるコーナーと、古代と中世に焦点を絞り紹介する2つのコーナーの3つから構成した。

期間は4日間であり、開催期間中に展示内容に関わる講演会を開催した。開催期日、参加者数は以下の通りである。

・展示会：2018年7月27日（金）～30日（月）参加者：136名  
（7/29は台風接近により半日休館）

・講演会：2018年7月28日（土）参加者58名  
徳永響子（岡山大学大学院社会文化科学研究科）

「中世のお墓の格差事情」

山本悦世（本センター副センター長）

「烏帽子のはなし」

##### (2) 展示会の内容

展示は出土遺物、パネルで構成した。導入部では、鹿田キャンパス構内地図に、これまでの発掘調査地点と主要な遺構・遺物について写真を利用してわかりやすく示した。鹿田キャンパスでの発掘調査はこれまでに28回に及んでおり、冒頭で既調査範囲と特徴的な遺構・遺物の概要をつかむことを意図した。

次に「鹿田キャンパスの歴史をたどる」コーナーとして、建物配置図の変遷を①1928（昭和3）年、②1945（昭和20）年、③1970（昭和45）年、④1979（昭和54）年の4枚のパネルで提示した。建物自体の変化だけでなく、大正時代から終戦前後、そして高度成長期に至る社会の変化にも気づく内容である。

発掘成果を伝えるコーナーでは、古代と中世の2つのコーナーを設けた。まず「古代の鹿田キャンパス」コーナーとして、8世紀後半～9世紀の遺構・遺物を提示した。建物群と大型の井戸、井戸から出土したマツリの道具、黒色土器や緑釉陶器といった高級品、文字に関連する出土品等から、当時の鹿田遺跡に物資が集積し、経済的にも豊かな管理者がいたことをうかがえる内容とした。次いで「中世の鹿田キャンパス」コーナーでは11世紀～15世紀の遺構・遺物を展示した。溝により区画された屋敷地の出現、活発な経済活動を示す各地からもたらされた品々、烏帽子を被った武士の墓等をパネル・遺物・模型を用いて示した。

出土品の多くはオープン展示とし、手に取って間近で見ることができるようにした。いずれのコーナーでも随所に、関連する文献をわかりやすくパネルで解説し、観覧者の理解を助けた。

##### (3) アンケート結果

54名から回答を得た。観覧者の40%にあたる。質問項目のうち、回答者に関するものは性別、年代、所属、リピーターであるか否かの4点である。展示内容については①印象に残ったもの、②開催情報入手方法、③意見・感想（自由記述）の3点である。回答者属性では、男女比が男性71%、女性29%、年代は70代以上が34%、60代



図25 展示会の様子  
（上：展示風景、下：講演会）

21%、50代22%と、50代以上で8割近くを占める。所属は学外76%、学内24%、リピーターが61%を占める。

展示内容について①では絵馬、烏帽子、井戸の順に回答が多く、こちらが際立つように展示したものが注目されている結果と言える。②では「本センターからの案内」が42%と多く、次いで「チラシ」19%、「知人から聞いて」12%であった。そのほかに「通りがかり」5%、「鹿田夏祭り」33%が少ないながらも目を引いた。③にはさまざまな意見が寄せられたが、「的を絞った内容が良かった」一方で、「もう少し展示品が多い方が良い」、「ボリュームが少ない」という意見も見られた。手に取って間近で見ることのできる展示は好評価であった。

#### b. 特別公開「倉敷市真備町二万大塚古墳の世界」

岡山大学文学部考古学研究室による倉敷市真備町「二万大塚古墳」の調査成果報告書の刊行に合わせて、考古学研究室・本センターの共催で同古墳に関する特別展示公開を実施することとなった。また、同古墳の立地する真備町が2018年7月の西日本豪雨で大きな被害を受けたことも、本特別展示開催の動機の一つとなった。本展示企画に際しては両者の協議により進め、広報・展示期間中の対応についても両者で分担して行った。会場は、岡山大学津島キャンパスにある文化科学系総合研究棟1階の考古資料展示室の1/3のスペースを用いて行った。

考古資料展示室では、考古学研究室の調査成果と埋藏文化財調査研究センターの調査成果の一部を展示しており、これらについても同時に見学していただいた。開催期日・参加者数は以下の通りである。

・展示会：2018年10月29日（月）～11月11日（日）観覧者数：588名

・講演会：2018年11月11日（日）参加者数：78名

新納泉（岡山大学大学院社会文化科学研究科）

「二万大塚古墳の調査成果」



図26 特別展示ポスター

(岩崎)

#### c. 第7～9回公開講座

3年目となる公開講座は通算第7～9回の3回を、年度後半の11月、1月、3月に実施した。各回の募集定員は約50名で、前年に引き続き参加費は500円とした。全体テーマは「考古学と関連科学」で、各回の個別テーマは構内遺跡の研究に関連するものとした。講座の基本構成は各回2本の講話とフリートーク、遺物のミニ展示である。講師は当センター教員と外部からの招聘で、できるだけ考古学と関連科学の内容となるように人選した。

各講話では、外部からの講師の方々にもご協力をいただき「YES/NOカード」を用いたクイズ形式の設問を取り入れた。こうした問いかけやフリートークは、全員参加型、双方向型の講座とするための工夫であり、参加者には好意的に受け入れられている。

ミニ展示については、第8回でとりあげた青銅器は、会場に持ち込めないため、この回のみ文化科学系総合研究棟内の考古資料展示室に移動し、青銅器を観覧した。貯蔵穴をとりあげた第9回は、講座会場と同規模の隣室を展示用に確保し、貯蔵穴の実物大模型や出土品（土器・石器・有機遺物）を展示した。

会場については、参加者の便宜を図るため今年度は試みに3回とも同じ講義室に固定し、定員50人強の講義室を準備したが、参加者数が予想よりも多かった回もあった。2018年度の実施内容は以下のとおりである。

第7回 2018年11月17日(土)「貝と貝塚の科学」

岡山大学津島キャンパス文・法・経済学部講義棟

1階 15番教室 参加者28名

福田宏(岡山大学環境学研究所准教授)

「貝類を知り、世界を知る」

山口雄治(本センター助教)

「岡山県の縄文貝塚」

第8回 2019年1月26日(土)「最新技術でみる青銅器」

岡山大学津島キャンパス文・法・経済学部講義棟

1階 15番教室 参加者39名

増田浩太(鳥根県立古代出雲歴史博物館学芸員)

「出雲の弥生青銅器」

南健太郎(本センター助教)

「青銅器の授受からみた吉備の弥生社会

—銅鏡、銅鐸、銅織を中心に—」

第9回 2019年3月16日(土)「縄文時代の知恵と工夫」

岡山大学津島キャンパス文・法・経済学部講義棟

1階 15番教室 参加者53名

水ノ江和同(同志社大学文学部教授)

「低湿地貯蔵穴と縄文人」

山本悦世(本センター教授)

「岡山県域における貯蔵穴の調査から」



図27 公開講座の様子

(野崎貴博)

## 2. 資料・施設等の利活用

### a. 調査・研究への支援

#### (1) 資料調査協力

- ・津島岡大遺跡第15次調査出土種子：富岡直人・那須浩郎(岡山理科大学) 2018年4月25日、6月11日
- ・津島岡大遺跡第5次調査出土土器：高野紗奈江(京都大学大学院) 2018年6月4～8日・11～15日
- ・津島岡大遺跡第3・5・11・19・21次調査出土土器：石本雄一郎(岡山大学大学院) 2018年8月22日
- ・鹿田遺跡第1次調査出土土器：大久保徹也(徳島文理大学) 2018年9月11日
- ・津島岡大遺跡第17次調査出土土器：平野芳英(荒神谷博物館) 2018年12月26日

#### (2) 圖書の貸し出し

- ・図書の外借貸し出し：2冊(岡山大学学生)

#### (3) 資料の貸し出し

- ・津島岡大遺跡第3・15・17・22次調査出土土器・石器、鹿田遺跡第1・5・9・11・13・15次調査出土土器・木器：広島大学総合博物館 2018年10月1日
- ・津島岡大遺跡第17次調査出土土器：荒神谷博物館 2019年1月29日

#### (4) 資料提供

- ・鹿田遺跡第1次調査出土土器：大久保徹也(徳島文理大学) 2018年12月21日

## (5) 写真掲載・画像使用

- ・「吉備の弥生時代」掲載写真：奈良市教育委員会 2018年4月19日
- ・「吉備の弥生時代」掲載写真：(株)新泉社 2019年1月15日
- ・「吉備の弥生時代」掲載写真：奈良市教育委員会 2019年3月7日

## (6) マスコットキャラクター利活用

- ・しかたん画像提供：鹿田学区活性化推進委員会 2018年4月4日
- ・しかたん着ぐるみ貸し出し：岡山大学総務・企画部 2018年10月10日

## b. 教育支援

## (1) 博物館実習 2018年8月9・10日、16・17日

2018年度は、19名の実習生が受講した。1班10名前後に分かれて、各班2日間にわたる実習を行った(8月9・10日、16・17日)。発掘調査で出土した遺物の整理作業体験から、考古資料の取り扱いに関する基礎的知識の習得を目的に、本センター内での室内作業を実施した。実習では、出土土器の註記・接合、出土木器の取り上げと洗浄、出土種子の観察記録、出土貝類の計測記録作業を行った。最終日には本実習の総括と実習内容についての発表の時間を設けた。チームで課題解決に取り組ませることで、授業の習熟度アップに加えてコミュニケーション力の向上を図った。さらに、非常勤職員とともに作業を行うという職場環境の中で、実践型社会連携教育の効果も図った。

表21 2018年度非常勤講師の委嘱依頼

職名	氏名	担当科目	委嘱期間
教授	山本 悦世	人文系博物館実習a	平成30年4月1日～平成30年8月31日
助教	岩崎 志保	人文系博物館実習a	平成30年4月1日～平成30年8月31日
助教	野崎 真博	人文系博物館実習a	平成30年4月1日～平成30年8月31日
助教	南 穂太郎	人文系博物館実習a	平成30年4月1日～平成30年8月31日
助教	山口 謙治	人文系博物館実習a	平成30年4月1日～平成30年8月31日

## (2) 大学における授業の受け入れ

- ・博物館資料保存論(学生約80名) 2018年11月19日

## (3) 学内ワークスタディ

2018年度は2名の学生(文学部、工学部)を雇用し、構内遺跡出土の遺物整理作業を行った。

## c. 社会貢献

## (1) 中学生職場体験

- ・岡山市岡北中学校 2018年11月13～15日 2人
- ・岡山市中央中学校 2018年11月13～15日 3人

## (2) 職員の兼業

山本悦世

- ・岡山県環境影響評価技術審査委員会委員
- ・岡山県埋蔵文化財保護調査指導委員
- ・岡山県文化財保護審議会委員
- ・徳島県文化財保護審議会委員
- ・高知県古代文化センター企画運営委員

山口雄治

・ノートルダム清心女子大学文学部現代社会学科 非常勤講師

(3) 展示見学の受け入れ

・常設展示室見学者：45名（一般19名、明治大学博物館友の会23名、荒神谷博物館3名）

・明誠学院高校：23名 考古資料展示室・戦路遺構見学 2018年12月14日

(4) マスメディア対応

・第19回キャンパス発掘成果展：山陽新聞 2018年7月28日

(5) 地域の催しへの参加

・鹿田学区活性化推進委員会主催「第4回鹿田夏祭り」 2018年6月9日

(6) 協力・支援

・ラオス国立大学へ発掘道具、測量器具、遺物収納容器等112点を寄贈 2018年5月10日

・史料ネットへ超音波洗浄機、シーラー、洗いかご等を貸し出し 2018年11月12日

### 第3節 調査研究員の個別研究活動

#### 1. 外部資金獲得状況

山本悦世：基盤研究（C）「中部瀬戸内地域における縄文時代の環境変動と人間活動に関する考古学的研究」  
研究代表者

岩崎志保：基盤研究（C）「中部瀬戸内地域における縄文時代の環境変動と人間活動に関する考古学的研究」  
（研究代表者：岡山大学 山本悦世）研究分担者

山口雄治：基盤研究（C）「西日本における縄文時代の人口動態に関する研究」研究代表者

基盤研究（C）「中部瀬戸内地域における縄文時代の環境変動と人間活動に関する考古学的研究」  
（研究代表者：岡山大学 山本悦世）研究分担者

公益財団法人高梨学術奨励基金平成30年度若手研究助成

「中央アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代の年代学的研究（2）」研究代表者

#### 2. 論文・資料報告ほか

岩崎志保「津島岡大遺跡における放射性炭素年代測定に関して」『紀要』2017 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.39-42.

久米正吾、早川裕弐、覚張隆史、藤澤明、新井才二、金田明美、山口雄治、宮田佳樹、バフティヨル・アブドゥラエフ、ヒクマトウツラ・ホシモフ、アイダ・アブディカノフ、ボキジョン・マトノバエフ2019「中央アジア初期農耕牧畜民の交流から東西交流の始まりを考えるーキルギス、モル・ブラク1遺跡（第2次）、ウズベキスタン、ダルヴェルジン遺跡（第1次）の発掘調査（2018年）」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』西アジア考古学会 pp.41-45.

紺谷亮一、山口雄治、下釜和也、フィクリ・クラックオウル2019「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けてーキュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2018年ー」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』西アジア考古学会 pp.16-18.

田嶋正憲、山口雄治、杉山一雄2018「岡山県の外来系土器集成」『中国地方の外来系土器』第29回中四国縄文研

- 研究会 pp.73-104.
- 中川朋美、中尾央、田村光平、山口雄治、松本直子、松本武彦2019「弥生時代中期における戦争－人骨と人口動態の関係から－」『情報考古学』24-1・2 情報考古学会 pp.10-29.
- 野崎貴博「書評 文化財保存全国協議会編『文化財保存70年の歴史－明日への文化遺産』」『考古学研究』第65巻第1号 考古学研究会 pp.93-96.
- Sato, A., Minami, K., Ninomiya, K., Kubo, M., Kenya, Tomono, D. and Kawashima Y. 2018. Non-destructive non-contact substance analysis of archaeological materials using muon X-rays. 『アジア鑄造技術史学会研究発表資料集』12号 アジア鑄造技術史学会 pp.9-11.
- Sato, A., Minami, K., Ninomiya, K. and Terada, K. 2019. Status and Prospects of Non-destructive Element and Isotope Analysis with Negative Muons. 『材料とプロセス (CAMP-ISIJ)』日本鉄鋼協会 p.94
- 南健太郎2018「岡山県下のいわゆる「滑石」製石鍋・「滑石」製品について」『古代古備』第29巻 古代古備研究会 pp.32-45.
- 南健太郎2018「西日本の破鏡からみた白枝荒神遺跡」『白枝荒神遺跡』出雲市の文化財報告38 出雲市教育委員会 pp.32-37.
- 南健太郎2019「漢三国六朝期における鏡の使用法とその伝播」『先史学・考古学論究』Ⅶ 龍田考古会 pp.391-402.
- 南健太郎2019「縄文時代～近世におけるモモの基礎的研究－岡山大学構内遺跡出土資料を中心に－」『紀要』2017 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.9-16.
- 南健太郎2019「瀬戸内海沿岸における古代山城の築城年代」『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第1集 九州国立博物館 pp.139-150.
- Minami, K. 2019. Casting surfaces and abrasion from the perspective of the surface condition of molds and products-Based on a use-wear analysis of bronze ware. *Proceeding book of BUMA IX*. The Korean Institute of Metals and Materials. pp.79-82.
- 山口雄治2018「中央アナトリアにおける銅石器～前期青銅器時代の年代学的研究」『高梨学術奨励基金年報－平成29年度研究成果報告－』公益財団法人高梨学術奨励基金 pp.79-83.
- 山口雄治2018「岡山平野における水稲農耕導入前後の諸様相」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2017』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.66-70.
- 山本悦世、鈴木茂之、山口雄治、岩崎志保2019「岡山平野における環境復元へのアプローチ－岡山大学構内遺跡を中心としたボーリング調査から－」『紀要2017』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.17-29.

### 3. 研究発表・講演ほか

- 岩崎志保「漢墓の変遷と周辺地域への影響」2018年9月15日 鳥根県立荒神谷博物館（鳥根県立荒神谷博物館講演会）
- 上杉彰紀、紺谷亮一、山口雄治、下釜和也、千本真生「キュルテバ遺跡北部区域における文化変遷とアナトリアにおける社会変容」2018年6月16・17日 金沢大学（日本西アジア考古学会第23回大会）
- 久米正吾、早川裕式、張銀隆史、藤澤明、新井才二、金田明美、山口雄治、宮田佳樹、バフティヨル・アブドゥラエフ、ヒクマトゥラ・ホシモフ、アイダ・アブディカノフ、ボキジョン・マトババエフ2019「中央アジア初期農耕畜民の交流から東西交流の始まりを考える－キルギス、モル・ブラク1遺跡（第2次）、ウズベキスタン、ダルヴェルジン遺跡（第1次）の発掘調査（2018年）」2019年3月23・24日 池袋サンシャイ



- ンシティ文化会館（第26回西アジア発掘調査報告会）
- 久米正吾、早川裕次、覚張隆史、藤澤明、新井才二、ゲードレ・モツザイテ=マツゼビチウテ、金田明美、山口雄治、宮田佳樹、バフティヨル・アブドゥラエフ、ヒクマトゥッラ・ホシモフ、アイダ・アブディカノフ、ボキジョン・マトババエフ2019「天山・フェルガナの初期農耕牧畜民の考古学—キルギス、モル・ブラク遺跡およびウズベキスタン、ダルヴェルジン遺跡の発掘調査—」2019年1月23・24日 帝京平成大学（文化庁「東アジア芸術家・文化人等交流・協力事業」国際シンポジウム・国際研究会「シルクロードを掘る」）
- Kume, S., Hayakawa, Y. S., Gakuhari, T., Fujisawa, A., Arai, S., Motuzaitte-Matuzeviciute, G., Kaneda, A., Yamaguchi, Y., Miyata, Y., Abuddulaev, B., Hoshimov, H., Abdykanova, A. & Matbabaev, B. "Early pastoralism and farming in the Tien Shan and Fergana in the Bronze Age: recent excavations." 2019年13・14日 Vilnius University, Lithuania. (*International Seminar on Archaeology of Central Asia.*)
- 紺谷亮一、山口雄治、下釜和也、フィクリ・クラックオウル「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテベ遺跡北トレンチ発掘調査2018年—」2019年3月23・24日 池袋サンシャインシティ文化会館（第26回西アジア発掘調査報告会）
- 南健太郎「考古学とミュオン非破壊分析」2018年11月 大阪大学（ミュオンによる非破壊分析の可能性—考古学・文化財への応用を考える）
- 南健太郎「鏡の使用方法からみた東アジアの文化伝播」2019年2月 岡山大学（考古学研究会岡山2019年2月例会）
- Sato, A., Minami, K., Ninomiya, K., Kubo, M., Kenya, Tomono, D. and Kawashima, Y. 2018. "Non-destructing non-contact substance analysis of archaeological materials using muon X-rays." 2018年9月 専修大学（アジア鑄造技術史学会2018年東京大会）
- Sato, A., Minami, K., Ninomiya, K. and Terada, K. 2019. "Status and Prospects of Non-destructive Element and Isotope Analysis with Negative Muons." 2019年3月 東京電機大学（日本鉄鋼協会第177回春季講演大会 国際セッション「Innovative perspectives and techniques in a study of cultural materials.」）
- 山口雄治「岡山県の縄文気塚」2018年11月17日 岡山大学（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター第7回公開講座）
- Yamaguchi, Y. "Database Project in Fergana Basin." 2018年11月24日 Ikuo Hirayama International Caravan-Sarai of Culture, Tashkent (*First meeting and associated activities for International Contribution to Cultural Heritage Protection Project in Central Asian Countries funded by the Agency for Cultural Affairs, Japan.*)
- Yamaguchi, Y., Hayakawa, Y. S. 2019 "Work shop GIS & Database Software: QGIS basic use." 2019年1月28・29日 Tokyo University of the Arts. (*International Contribution to Cultural Heritage Protection Project (2018-19) of Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, "Protection of Cultural Heritage in Uzbekistan and Other Central Asian Countries" Workshop*)
- 山本悦世「山陽地域における縄文・弥生移行期の様相」2018年10月31日 松江市（鳥根県古代文化センター客員研究員検討会）
- 山本悦世「岡山県域における貯蔵穴」2019年3月16日 岡山大学（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター公開講座）

## 第3章 2018年度における調査・研究のまとめ

### 調査

2018年度は、鹿田遺跡で1件の発掘調査を実施した。鹿田遺跡第28次調査は、弥生時代中期後半以降の集落跡が確認された第1次調査地点のすぐ北側に位置する。弥生時代から江戸時代にいたる遺構が多数確認された。調査は2019年度まで継続して行われたため、その詳細は次号で報告されることだろう。試掘・確認調査は、津島岡大遺跡で1件実施した。第26・27次調査地点のすぐ西隣りに位置し、弥生時代前期の旧地形に関する知見が得られた。具体的には、第26・27次調査地点の地形が連続的に広がっていることを確認した。また、第27次調査地点では弥生時代前期の水田畦畔が確認されていることから、本調査地点の周囲にも水田が広がっている可能性が考えられた。立会調査は、旧陸軍の土塁の調査を行った。この土塁は旧陸軍第十七師団駐屯地の敷地境界に位置するもので、北側がよく残存しており、土塁とその下部に水路が築かれていることが確認された。測量調査においてGNSS (Global Navigation Satellite System) とSDM (Structure from Motion) を利用した3次元測量を実施した点は特筆される。非常に容易に行うことができ、従来の平板測量にかかる人的・時間的コストを大幅に削減することができた。また、土塁の東側10mを保存することとなった。

### 研究

資料整理では、鹿田遺跡第26次調査の成果をまとめ、『鹿田遺跡13』として刊行した。本調査地点は、鹿田遺跡の南西部にあたる。弥生時代後期～古墳時代前期前葉の井戸、畦畔の可能性のある帯状高まりなどを検出した。本調査地点北側の第6・7次調査地点では集落域が、東側の第9・11・20A・25次調査では水田域が確認されている状況から、本調査地点は北側の集落の縁辺部にあたること、および東側に展開する水田域が本調査地点の南側にまで広がっていることが明らかとなった。花粉分析では、この時期にクロマツからアカカシ亜属などへの変化が指摘された。この結果は、沖積化による海岸線の南下を示している可能性が高い。中世前半では、井戸や溝などが確認された。13世紀前半～14世紀の溝は屋敷地を区画する溝と考えられ、北側の第7次調査地点で確認されている溝との距離が約1/2町であることが明らかとなった。また本調査地点以南の試掘・確認調査の状況から、本調査地点が中性前半においても鹿田集落の南西端部であった可能性が指摘された。

科学研究費補助金は、研究代表として2件、分担2件、民間1件を受けた。そのほか特筆される件として、ラオス国立大学への発掘道具等の寄贈や被災文化財のレスキューに取り組み史料ネットへの超音波洗浄機等の貸し出し、研究活動における異分野との共同研究や国際舞台での発表などが多かった点が挙げられる。

### 情報発信

展示会は、『The鹿田庄』と題し2018年7月27日～30日にかけて開催した。鹿田庄を主要テーマとして、鹿田遺跡における古代・中世の屋敷地・土器・墓などに注目し、その時代の人や社会の変化について取り上げた。出土品の多くはオープン展示として、手に取って間近に見ることができるような工夫をした。会期中には講演会も開催し、2名の講師に展示内容に関わる講演を依頼し、好評を得た。また、本学考古学研究室と共催で『二万大塚古墳』の展示も行った。公開講座は3年目に入らし、各回40名前後の参加者を得た。

学内ワークスタディでは、2名の学生に遺物の整理・保管、展示会の準備といったセンターの主要業務を行ってもらった。そのほか博物館実習や授業・職場体験の受け入れ、鹿田夏祭りへの参加などを行った。

### まとめ

以上、2018年度も調査・研究とその成果の公開および教育活動を行った。本年度は、調査・研究における新しい測量技術の導入や学内外の組織との連携、国際発表が特徴としてあげられよう。こうした成果を今後は社会に発信できるよう、取り組んでいきたい。

(山口)

# 資 料

## 1. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程・組織等

### a. 2018年度岡山大学埋蔵文化財調査研究組織

#### (1) センター組織



#### (2) 運営委員会

##### 【委員】

菅 誠治 財務・施設担当理事（センター長）  
山本悦世 本センター教授（副センター長）  
今津勝紀 大学院社会文化科学研究科教授  
松本直子 大学院社会文化科学研究科教授  
加藤鎌司 大学院環境生命科学研究所教授

大橋俊孝 大学院医歯薬学総合研究科教授  
清家 章 大学院社会文化科学研究科教授（調査研究室長）  
鈴木茂之 大学院自然科学研究科教授（調査研究専門員）  
松山忠生 施設企画部長

##### 【2018年度協議・報告事項】

第93回 2018年7月11日

##### 報告事項

- 平成29年度決算について

##### 協議事項

- 平成30年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画（案）
- 平成30年度予算（案）について

##### その他

- 埋蔵文化財調査研究センター活動予定等について
- 1. 鹿田遺跡第27次調査報告
- 2. 第4回特別展示開催報告
- 3. 第4回鹿田夏祭り開催報告
- 4. 第19回キャンパス発掘成果展
- 5. 公開講座
- 6. 大学博物館構想
- 7. 有期雇用職員の5年を超える契約について

第94回 2019年2月7日

##### 報告事項

- 平成30年度埋蔵文化財調査研究センター業務報告について

##### 協議事項

- 平成31年度埋蔵文化財調査研究センター事業計画（案）
- および予算（案）について
- その他

## b. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの規程

## (1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

〔平成16年4月1日  
岡大規程第93号〕改正 平成20年3月31日規程第28号  
平成23年3月31日規程第26号  
平成23年9月27日規程第84号  
平成26年1月28日規程第1号

## (趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学園（平成16年岡大規則第1号）第26条の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

## (目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項

## (自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。  
2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

## (教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

## (センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。  
2 センター長は、財務・施設担当理事をもって充てる。  
3 センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。

## (副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。  
2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。  
3 副センター長は、センター長の職務を助ける。  
4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

## (調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するための調査研究室を置く。  
2 調査研究室は、室長、センター専任の教員及びその他必要な職員で構成する。  
3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長の推薦に基づき、学長が任命する。  
4 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。  
5 調査研究室の構成員は、センター長の命を受け、センターの業務に従事する。

## (調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員（以下「専門委員」という。）を置く。  
2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が委嘱する。  
3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

## (運営委員会)

第9条 センターに、センターの運営に関する重要な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。  
2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

## (事務)

第10条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

## (雑則)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

## 附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

## 附 則

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

## 附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

## 附 則

この規程は、平成23年11月1日から施行する。

## 附 則

この規程は、平成26年1月28日から施行する。

## (2) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

〔平成26年1月28日〕  
〔岡大規程第2号〕

改正 平成27年3月31日規程第65号

### (趣旨)

第1条 この規程は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程（平成16年岡大規程第93号）第9条第2項の規定に基づき、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

### (審議事項)

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する次の事項を審議する。

- 一 センターの業務に関する重要事項
- 二 教員の教育研究業績の審査に関する事項
- 三 その他センターの運営に関する重要事項

### (組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

- 一 センター長
  - 二 副センター長
  - 三 本学の教授のうちからセンター長が必要と認めた者若干人
  - 四 センターの調査研究室長
  - 五 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長が必要と認めた者 1人
  - 六 施設企画部長
- 2 前項第3号及び第5号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の在任期間とする。
- 3 教員の選考に関する事項を審議する場合には、第1項第

4号及び第5号のうち教授でない者並びに第6号の委員は、審議に加わらないものとする。

### (委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

### (委員会の成立等)

第5条 運営委員会は、委員の半数以上の出席がなければ、議事を開き、議決することができない。

2 運営委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

### (委員以外の者の出席)

第6条 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

### (事務)

第7条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

### 附 則

- 1 この規程は、平成26年1月28日から施行する。
- 2 この規程の施行後に最初に任命される第3条第1項第3号及び第5号の委員は、この規程の施行に伴い廃止される岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会内規（平成16年4月1日学長裁定）第3条第1項第3号及び第4号の委員をそれぞれ充てることとし、その任期は、第3条第2項の規定にかかわらず、平成26年3月31日までとする。

### 附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

## c. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

### 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年5月15日

埋蔵文化財調査研究センター長  
施設部長

#### 1. 請負業者が留意すべき事項

1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2. 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注

意すること。

3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

## II. 発掘現場で注意すべき事項

1. 服装・装備・用具等
  - 1) 安全で機能的な服装にする。
  - 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
  - 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
  - 4) グラインダーを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
  - 5) スコップ・草削りなどの用具は、危険がないよう使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
2. 掘削
  - 1) のり面の角度
 

造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の埋戻を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。
  - 2) のり面の保護
 

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
  - 3) 深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）
 

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。
3. 高所（高さ2m以上の場所）での作業
  - 1) 作業中には安全帯を使用する。

- 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
  - 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。
4. 発掘用機械類の操作
 

(ベルトコンベアー・ポンプ等)

    - 1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
    - 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
    - 3) ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないように措置をする。
    - 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
    - 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。

(重機関係)

    - 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
    - 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
    - 3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
  5. 健康管理
    - 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

## III. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2)の1)～3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

## d. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター教員審査に関する申し合わせ

平成20年10月29日  
埋蔵文化財調査研究センター  
運営委員会承認  
改正 平成27年3月30日

埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に教員審査委員会（以下「審査委員会」という。）を設置する。

### (趣旨)

第1条 この申し合わせは、岡山大学教授会規則（平成16年岡大規則第20号）第10条の規定に基づき、埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）における教員の審査に関し、必要な事項を定める。

### (教員審査委員会)

第2条 センター長は、教員審査の必要が生じたときは、埋

蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）に教員審査委員会（以下「審査委員会」という。）を設置する。

- 2 審査委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。
  - 一 センター長
  - 二 副センター長
  - 三 運営委員会委員からセンター長が必要と認めた者若干名
- 3 審査委員会に委員長を置き、審査委員会で選出される。
- 4 審査委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立

し、議事は、出席者の2分の1以上をもって決するものとし、可否回数の際は、委員長が決する。

- 5 審査委員会は、審査の方針について定め、候補者の資格及び適性について審査し、その結果を運営委員会に報告する。

**(公募)**

第3条 採用人事は、原則として公募により行うものとする。ただし、センターの教員（専任教員を含む。）で審査基準を満たす者があると認められる場合は、公募を行わないことがある。

**(審査基準)**

第4条 教授、准教授、講師及び助教となることのできる者は、規則に定める資格を有する者とする。

2 教授、准教授、講師及び助教の審査にあたっては、履歴書、業務日録（発掘調査の実績を含む）、論文（著書を含む）、主要研究業績についての適切な説明書の提出を求めるものとし、必要に応じてその他審査に必要な書類の提出を求めるものとする。

**(雑則)**

第5条 この申し合わせに定めるもののほか、教員の審査に関し、必要な事項は、センター長が別に定める。

**附 則**

この申し合わせは、平成20年10月30日から施行する。

**附 則**

この申し合わせは、平成27年4月1日から施行する。

## 2. 2017年度以前の調査・研究一覧

付表1 1982年度以前の構内主要調査(1980～1982年度)

年度	地区名	種類	工事名称・調査名称	調査組織	調査面積 (㎡)	文献	備考	
1980	鹿田	立会	理学部附属動物実験施設新築	岡山山教育委員会	8			
		*	農学部畜舎新築	*				
	津島	BD05	*	文法経 合併処理施設	*			
		*	*	文法経 合併処理施設	*			
		BD09, BC09～11	*	基幹整備(共同溝取付)	*			
		BD～BE04～07	*	路上段々地改修(配水管施設)	*			
1981	鹿田	*	(医病) 高気圧治療室新築	*				
		*	(医病) 動物実験棟新築	岡山山教育委員会			大学が市教委への確認調査依頼をせずに概削。その後、岡山山・岡山山教委が残存部分の調査を実施	
	*	(医病) 理解型体験型地理保管庫新築	岡山山教育委員会					
	*	*	医学部運動場改修	*				
	1982	津島	AW06-10, AW05-14, AX08, BD07, BE10	試験	排水基幹整備	*		津島AW14区で発生時代包含確認。協議→津島岡大連携第1次調査へ
			AW14	発掘	文法経 排水集中槽(NP-1)埋設 津島岡大第1次調査	岡山大学	24.0	3
*			試験	武道館新築	岡山山教育委員会	2.3		
鹿田		AY15-16	*	法経 校舎新築	*	7.0		
		*	*	医学部基本保存庫新築	岡山山教育委員会	8.0		
		*	(医病) 外来診療棟新築	*	4.0	2		
*	立会	医学部動物実験施設関連排水管・ガス管埋設	岡山山教育委員会		1			
*	AE～AN22, AE22～26	*	農学部電話ケーブル埋設	岡山山教育委員会 岡山大学理蔵文化財調査室				

文献

1. 光木真一 1983「岡山大学医学部附属動物実験施設新築工事に伴う排水管埋設工事に伴う立会調査」『岡山山理蔵文化財報告』13 岡山山教育委員会  
2. 河平 清 1983「岡山大学医学部附属動物実験施設改築に伴う発掘調査」『岡山山理蔵文化財報告』13 岡山山教育委員会  
3. 吉原秀敏 1985「岡山大学津島地区小機法目録調査(AW14区)の発掘調査」岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第1集 岡山大学理蔵文化財調査室

付表2 2017年度以前の構内主要調査(1983～2017年度)

年度	地区名	種類	工事名称・調査名称	調査組織	調査面積 (㎡)	文献	備考
1983	津島	立会	理学部附属動物実験施設新築	岡山山教育委員会	8		
1983	津島	立会	農学部畜舎新築	*			
1983	津島	立会	文法経 合併処理施設	*			
1983	津島	立会	文法経 合併処理施設	*			
1983	津島	立会	基幹整備(共同溝取付)	*			
1983	津島	立会	路上段々地改修(配水管施設)	*			
1983	鹿田	立会	(医病) 高気圧治療室新築	*			
1983	鹿田	立会	(医病) 動物実験棟新築	岡山山教育委員会			大学が市教委への確認調査依頼をせずに概削。その後、岡山山・岡山山教委が残存部分の調査を実施
1983	鹿田	立会	(医病) 理解型体験型地理保管庫新築	岡山山教育委員会			
1983	鹿田	立会	医学部運動場改修	*			
1983	津島	立会	排水基幹整備	*			
1983	津島	発掘	文法経 排水集中槽(NP-1)埋設 津島岡大第1次調査	岡山大学	24.0	3	【小機法目録】と報告
1983	津島	試験	武道館新築	岡山山教育委員会	2.3		
1983	鹿田	立会	法経 校舎新築	*	7.0		
1983	鹿田	立会	医学部基本保存庫新築	岡山山教育委員会	8.0		
1983	鹿田	立会	(医病) 外来診療棟新築	*	4.0	2	
1983	鹿田	立会	医学部動物実験施設関連排水管・ガス管埋設	岡山山教育委員会		1	
1983	津島	立会	農学部電話ケーブル埋設	岡山山教育委員会 岡山大学理蔵文化財調査室			

付表2-1(1) 発掘調査

&lt;津島地区：津島岡大遺跡&gt;

総合 番号	年度	番号	調査名称・工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概要(主要遺構ほか)	文献
※1	1982	-	津島岡大遺跡第1次調査 排水集中槽(NP-1)埋設	AW14	10.28～11.24	24	発生中期・古代：溝、小機法目録調査と報告	3
1	1983	-	津島岡大遺跡第2次調査 水主管埋設	BE14-18, BF17-18 EG14 BE14-15	84.19～95	265	発生早期・前期：遺物	4
2	1983	-	津島岡大遺跡第2次調査 合併処理埋設	BH13	11.14～11.22 4.19～3.5	276	発生前期水田開墾遺構(溝様)	4
15	1986	2	津島岡大遺跡第3次調査 男子学生寮新築	AV06, AW00-01	12.1～87.6.18 8.24～9.5	1550	縄文後期河田、発生早期：貯蔵穴群・河田、発生前期～近世：水田溝、古代桑里間溝	19
16	1986	3	津島岡大遺跡第4次調査 屋内運動場新築	BF-BG09	87.1.19～1.22	70	発生前期溝、中世河田	6
26	1988	1	津島岡大遺跡第5次調査 大学院自然科学研究科棟新築	AY06～08 AZ06-07	6.27～89.3.19	1537	縄文後期-発生早期：貯蔵穴群・河田、発生時代末～近世：水田開墾遺構	27
27	1988	2	津島岡大遺跡第6次調査 生物応用工学科棟新築	AV-AW04-05	9.20～89.5.31	600	縄文後期：貯蔵穴群・河田、古代桑里間溝、発生前期～近世：水田溝	35
28	1988	3	津島岡大遺跡第7次調査 情報工学科棟新築	AV-AW05-06	10.12～89.3.31	800	縄文後期：砂・ピット、発生前期～近世：水田溝	35



総合 番号	年度	番号	調査名称：工事名称	横内座標	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	概要（主要遺構ほか）	支線
39	1990	1	津島岡大遺跡第5次調査 ：自然科学研究所棟共同掘-排水施設設置	AY-AZ08	4.3-4.21	90	古墳後期溝	27
44	1991	2	津島岡大遺跡第6次調査（A地点） ：遺構・土坑施設調査	BD18-19	7.23-12.25	690	縄文時代土坑、弥生時代-近世：溝群	32
45	1991	3	津島岡大遺跡第7次調査（B地点） ：中世処理施設調査	BH13	7.23-12.2	140	弥生時代溝、古代-近世：水田	32
50	1992	1	津島岡大遺跡第9次調査 ：生体機能応用工科大学新館	AU-AW04	7.1-9.19	690	縄文後期-弥生前期：土坑-溝-火竈、弥生時代-近世：水田開墾遺構	47
51	1992	2	津島岡大遺跡第10次調査 ：総合情報処理センター新館	BB-BC10-11	9.21-3.31 4.17-7.31	400	弥生後期土坑群、古墳時代：井戸-住居-中、古代特 穴群、中世溝、近世耕作関連遺構	64
54	1993	2	津島岡大遺跡第11次調査 ：総合情報処理センター新館	AV-AW11-12	9.14-9.11.11	640	縄文後期：ビツト-中、弥生前期中層階	36
50	1994	3	津島岡大遺跡第12次調査 ：図書館新館	AV-AW13-14	9.4.29-3.31 4.1-11.30	1472	弥生前期水田、弥生中期-古墳時代：溝群、古代- 近世：築基関連遺構	64
64	1994	2	津島岡大遺跡第13次調査 ：植物学施設（本館）新館	AW-AX11-12	10.6-11.30	816	縄文後期ビツト、弥生水田、弥生-古墳時代：溝群	41
69	1995	2	津島岡大遺跡第14次調査 ：植物学施設（南棟）新館	BB-BC12-13	10.25-9.6.14	896	弥生前期水田、弥生-古墳時代：溝群	46
70	1995	3	津島岡大遺跡第15次調査 ：サウライトベンチャーマジックスタジオ ラトリ-新館	AW00-01	9.6.16-4.25	1600	縄文後期-弥生早期：貯蔵穴群-河造、縄文後期：ビツ ト群-石材ヤブ-火竈、弥生前期水田、古墳-中世- 水田-溝	72
74	1996	2	津島岡大遺跡第16次調査 ：動物学新館	BD19-20	5.7-15	30.3	A地点：縄文時代-古墳時代：土坑 B地点：中世溝、古代特穴群、弥生前時代水田	44
75	1996	3	津島岡大遺跡第17次調査 ：環境理工学部校舎（1期）新館	AW02-04	5.21-9.7.19	1451	縄文後期：住居-土坑-溝、弥生前期：水田、弥生時 代溝群、古墳後期住居-中、古代水田、中世耕作遺 構	77
85	1998	2	津島岡大遺跡第18次調査 ：環境施設（南）ボンプ機取設	BH11	4.7-4.10	16	古代溝状遺構	53
86	1998	3	津島岡大遺跡第19次調査 ：コアコレクションセンター新館	AZ09-10	7.27-9.9.21.8	1019	縄文後期：ビツト-中、弥生前期：水田-土坑-河造、 古墳時代-中世-溝、近世：道路状遺構-溝	65
87	1998	5	津島岡大遺跡第20次調査 ：環境理工学部校舎ボンプ機取設	AY07	10.19-28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
88	1998	6	津島岡大遺跡第21次調査 ：1学部エレベーター設置	AX09	11.6-24	30.2	縄文中期土坑、弥生早期-前期：溝、古代：土坑-溝	65
89	1998	8	津島岡大遺跡第22次調査 ：環境理工学部校舎（2期）新館	AW02-03	9.9.3-7.12	77.5	縄文後期-弥生前期：河造、弥生早期土坑、弥生前 期水田、弥生中期溝、古墳-近世：築基関連遺構-水田	77
109	1999	5	津島岡大遺跡第23次調査 ：総合研究棟新館	AZ15-BA14	0.0.2.3-7.28	1309	縄文後期-弥生前期前遺、縄文後期土坑、弥生早期 貯蔵穴、弥生前期：溝、中世：弥生-近世：溝	80
111	2000	3	津島岡大遺跡第24次調査 ：総合研究棟西り面下建設	AZ14	12.5-14	34.2	縄文後期：河造-坑列	80
112	2000	4	津島岡大遺跡第25次調査 ：排水施設設置	BA15	01.29-31	20	中世-近世：溝	61
2000	2000	5	津島岡大遺跡第26次調査 ：事務用棟新館	BC-BD14-15	01.3.26-9.30	1500	縄文-中後期：土坑-中、弥生前期貯蔵穴、弥生前期 土坑、弥生後期溝、古墳後期-中世：槽列-道路状遺 構、近世-溝-中	76
121	2001	2	津島岡大遺跡第27次調査 ：創立五十年記念会館新館	BB-BC14-15	02.2.1-6.24	1648	縄文後期中、弥生-古墳時代：溝群、中世階層（築基 関連）	68
127	2002	1	津島岡大遺跡第28次調査 ：自然科学系総合研究棟新館	AW-AY06-08	4.30-9.20、 11.28-03.11.15	1298	弥生前期水田、弥生前期-中期：溝、古代：溝（中 に柱穴群）、中世開墾遺構	87
128	2002	4	津島岡大遺跡第29次調査 ：共同溝設置	BF16	9.18-10.3	62.6	弥生-古墳時代：溝-ビツト	71
163	2007	1	津島岡大遺跡第30次調査 ：湖川インクニペータ新館	BC19-20	8.1-12.17	1035.4	縄文後期-弥生前期：土坑群、弥生-古墳時代：溝 群、古代道路状遺構、中-近世：土坑群-階層-溝群	93
168	2008	1	津島岡大遺跡第31次調査 ：大学生協東館施設取替	AX04	6.17-8.22	212	弥生前期階層、古代道路状遺構	95
184	2009	1	津島岡大遺跡第32次調査 ：教学生活支援施設新館	AX02	7.16-10.13	383	縄文後期貯蔵穴群、弥生前期階層、弥生前-中期-中 世溝：溝	100
196	2010	1	津島岡大遺跡第33次発掘調査 ：生物学部基礎棟新館	BH17-18、BC17-18	7.16-11.11	972.2	縄文-中後期：ビツト、弥生時代：土坑-溝、古墳時 代代溝-古代：貯蔵建物、古代-中世：道路状遺構	117
197	2010	2	津島岡大遺跡第34次発掘調査 ：国際交流会館新館	AU-AV13-14	7.30-9.28	1590	弥生前期：階層-溝、近世土坑群、平面調査は中世土 面まで実施し下部は保存	105
216	2013	1	津島岡大遺跡第35次発掘調査 ：防風園舎増築	AW13	7.8-8.29	80	縄文時代：ビツト、古墳時代後期：溝-ビツト、古 代：ビツト列、近世：階層、土坑、溝	116
236	2015	1	津島岡大遺跡第36次発掘調査 ：職員宿舎新館	BH-BH16	5.26-6.17	43.5	縄文後期：土坑、弥生前期-前期：水田階層、弥生 後期-古墳時代：溝、古代-中世：ビツト、旧陸軍 水路-建物	124

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合 番号	年度	番号	調査名称：工事名称	横内座標	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	概要（主要遺構ほか）	支線
1	1983 1984	-	鹿田遺跡第1次調査 ：外庫跡発掘新館	AU-BD28-40	7.27-11.22 8.1.9-8.31	2188	弥生時代中期後半-中世の築基遺構群	7

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	概要（主要遺構はか）	支那
2	1983	-	廣田通第2次調査 ：NMR-C1室新設	BG-B18-21	8.1-12.30	176	弥生時代後期-中世の集落遺構群	7
10	1986	1	廣田通第3次調査 ：医療技術短期大学校舎	CN-CU27-28, CT-CY19-27, CX-DD16-25, DD-DG22-23	6.2-11.29	2300	中世の集落遺構群、古代の橋脚・河迹	10
12	1987	3	廣田通第4次調査 ：医科総合施設の配管施設	DD-DF25 DG-DG27-28	11.2-11.21	30	古代の河迹	10
13	1987	2	廣田通第5次調査 ：管理棟新設	BB-BH35-42	106-88.32 88.323-3.31	1192	弥生時代中期後半-中世の集落遺構群	24
16	1990	2	廣田通第6次調査 ：アイソトープ総合センター新設	BW-CC67-71	11.30-91.6.30	690	古墳時代初期土坑、中世集落遺構群	40
25	1997	4	廣田通第7次調査 ：北園医学棟新設	BH55-BX61 BY56-57	98.2.27-8.6	829	古墳時代初期-中世の集落遺構群、近世の水田・溝	85
27	1998	4	廣田通第8次調査 ：医科総合新設	BP-BS30-32	7.28-9.1	165	古墳時代と中世の溝群	85
28	1999	1	廣田通第9次調査 ：病棟新設	CD33-37, CE-CF28-37, CG-CJ30-37, CK-CL25-37	11.27-99.5.11	2088	弥生時代水田・溝、中-近世集落遺構群	126
31	1999	3	廣田通第10次調査 ：共同溝設置関連	CD-CE10-12 DD-DF16-22	5.7-10.14	2441	古代の枝列、弥生時代ビッド、近世溝	108
32	1999	4	廣田通第11次調査 ：病棟新設	CD-CM19-42	8.19-12.22	2020	弥生時代水田畔群、古代の曲状遺構、中-近世集落遺構群	126
40	2000	2	廣田通第12次調査 ：エネルギーセンター新設	CO-CY35-44 CN-CM28-41 CN28-38	10.2-01.05.10	1897	弥生時代溝・河迹、古墳時代溝・土部盛り・中世集落遺構群、近世土坑・溝	56 61
46	2002	3	廣田通第13次調査 ：総合教育研究棟新設	BL-BR86-91	4.30-10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土部盛り・溝、中世集落遺構群、近世土坑群	98
55	2003	1	廣田通第14次調査 ：病棟（B期）新設	CD-CM12-20	7.31-12.17	1331	弥生-古墳時代の畦畔・溝、中世の集落遺構群、近世のため池・土坑	113
56	2003	2	廣田通第15次調査 ：総合教育研究棟外構	BQ-BSE5-96	10.16-10.29	30.4	古墳時代初期の井戸・溝	98
59	2004	1	廣田通第16次調査 ：2号駐車場新設	AH-A16-7 AF12-13, AN-A04	10.21-11.8	49.15	近世-古代の畦畔・溝・土坑、中世の土坑、弥生-古墳時代の河迹	81
60	2006	1	廣田通第17次調査 ：総合研究棟（医学系）新設	BR-BY90-94	7.10-11.14	642	古墳時代-中世の集落遺構群、近世土坑・溝	88
64	2007	1a	廣田通第18次調査A地点 ：中央診療棟新設	BT13-BY20	10.10-08.3.14	8722	弥生時代後期-近世の集落遺構群	92
65	2007	1b	廣田通第18次調査B地点 ：防火水栓設置	CG-CB9-10	10.16-11.1	43.2	古代後半の井戸、近世入江状遺構・溝跡施設	108
66	2007	1c	廣田通第18次調査C地点 ：用水路改修	CM-CM9-10 CO10-11	12.27-08.1.16	56	弥生時代土坑・溝	108
76	2008	1	廣田通第19次調査 ：医学部遊り廊下設置	AW-AY22-23	6.26-9.12	80	弥生時代後期の「方形高まり」、貝塚・竪穴・土坑・溝、古墳時代土坑・溝、古代ビッド、近世土坑	95
80	2009	1a	廣田通第20次調査A地点 ：中央診療棟共同溝設置	BZ-CC31-40	6.18-7.31 8.5-24	632	弥生時代-近世の遺構・遺物	131
81	2009	1b	廣田通第20次調査B地点 ：中央診療棟新設（本体工事）	BS20-23 BT-BW20-24 BX-CCL3-25	10.15-11.2.22 3.1-8	2482	弥生時代-近世の遺構・遺物	102
84	2010	1	廣田通第20次調査C地点 ：中央診療棟新設	BR-BSE12-21 BT-BX12-13	7.30-10.8	276	弥生時代-近世の遺構・遺物	105
85	2010	2	廣田通第20次調査D地点 ：中央診療棟新設	BT-BU24	2011.2.18-3.2	15	中世-近世の遺構・遺物	105
86	2010	3-1	廣田通第21次調査A地点 ：外水栓周辺他設備整備	AD-AF30-31		21.2	平安時代河迹、鎌倉時代溝状遺構	105
87	2010	3-2	廣田通第21次調査B地点 ：外水栓周辺他設備整備	AG-AH30-31	11.18-12.9	22	平安時代河迹、鎌倉時代溝状遺構	105
88	2010	3-4	廣田通第21次調査D地点 ：外水栓周辺他設備整備	AS-AT25-28		59.4	弥生時代包含層	105
94	2011	1	廣田通第22次調査 ：地域医療人育成センター新設	AV-BB 04-07	7.14-9.22 10.14-11.18	533	弥生時代井戸・溝、中世井戸・溝、近世溝・池	107
96	2012	1	廣田通第23次調査 ：1号ビル新設	AN-AR 37-62	6.25-8.30	612	弥生時代-古墳時代初期群、古代溝、中世溝・中、近世溝・土坑・島、近代溝・トロッコ軌道	130
97	2012	2	廣田通第24次調査 ：医薬業融合棟新設	BD-BL 57-69	11.27- 20.13.25	1867	弥生時代溝、古墳時代土器群、古代井戸・土坑、中世溝・畦・井戸・土坑、近世溝・土坑、近代遺状遺構	130
101	2013	2	廣田通第25次調査 ：中央診療棟Ⅱ期	BY-CDE14-38	20.4.16-4.17	660	弥生時代畦畔、中世井戸・土坑・溝、柱穴、近世土坑・溝	131
124	2014	1	廣田通第26次調査 ：中央診療棟Ⅱ期	BS-BY24-41	20.4.15- 8.25	1895	弥生時代井戸、中世井戸・土坑・溝・柱穴、近世土坑・溝	131
125	2014	2	廣田通第26次調査 ：動物実験施設改修	CD-CJ46-48, CJ-CK61-62	20.4.18- 11.17	265.5	弥生時代溝・畦畔、古墳時代井戸・土坑・溝・島状遺構、古代土坑・ビッド、近世土坑	135

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	概要（主要遺構ほか）	文献
142	2017	1	農田灌漑第27次調査 ：自然発電設備	CN-C043-44	2017.10.10～ 11.10	34.5	弥生時代～古墳時代遺、古墳時代後期～飛鳥時代遺、 中世ビット	134

<三朝地区：福島灌漑>

総合番号	年度	番号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	概要（主要遺構ほか）	文献
1	1997	1-2	福島灌漑第1次調査 ：実証研究機新設	-	97.5.10～20 7.28～31	309	縄文時代早期～弥生時代中期～中世～近世の集落	55
2	1997	3	福島灌漑第2次調査 ：実証研究機新設に伴うスロープ設置	-	97.11.25～12.5	120	古代～中世～近世の集落	55

付表2-（2） 試掘・確認調査

<津島地区：津島岡大灌漑>

総合番号	年度	番号	調査対象地名	値	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	T/P数	概要 内容・その他の対応	文献
43	1983	-	農学部総合処理槽予定地		BH13	2.5	-	1	→津島岡大第2次調査：1983年度	
4	1983	-	農学部排水管理中間ポンプ槽予定地		BF17	3.5	-	1	→工事立会	
5	1983	-	農学部排水管理槽予定地		RE～BG14, BE～BH15、HE18, BF16～18、BC18	2.0	-	29	→津島岡大第2次調査：1983年度	
6	1983	-	農学部農産物倉庫予定地		BF22-23	2.0～3.0	0.6	2	土層計→1987年度工事立会	1
171	1983	-	大学事務員棟予定地		BC-BD15	2.0～3.0	0.9	3	→津島岡大第26次調査：2000年度	
181	1983	-	保健管理センター予定地		BE10	2.0～3.0	0.8	1	→津島岡大第10次調査：1999年度	
9	1983	-	津島宿舎予定地		BE16	0.9	0.9	2	土層計→1987年度工事立会	
10	1983	-	工学部校舎新築予定地		AW05	3.0	1	1	土層計	
12	1983	1	教養講義棟予定地		BE08	3.5	1.2	2	遺構など本確認→1986年度工事立会	
13	1983	2	教育研究棟予定地		AX02	2.6～3.4	1.2	3	構文→弥生・中世土層出土	5
14	1983	3	男子学生寮予定地		AV-AW99～01	2.0～3.0	1	12	→津島岡大第3次調査：1986年度	
117	1986	3	屋内運動場予定地		BF-BG09	2.4、1.2～1.7	1.1	3	→津島岡大第4次調査：1986年度	
181	1986	4	大学院自然科学研究棟棟予定地		AV-AZ07	1.6～3.2	0.6～0.8	3	→津島岡大第5次調査：1988年度	6
22	1987	4	外国人宿舎予定地		AP02	2.2～2.8	-	2	縄文時代～弥生時代、古世の遺構面	
231	1987	5	総合情報処理センター予定地		AV11	2.0～3.0	2	2	→津島岡大第11次調査：1993年度	
24	1987	6	理学部身体障害者用エレベーター予定地		AY09	3.0～3.5	約1.0	1	中世～近世の遺物、古代～中世の土層 →継続して調査	8
25	1987	7	教養部身体障害者用エレベーター予定地		BD09	2.5	0.7	1	縄文時代遺構、縄文・中世～近世土層 →継続して調査	
29	1988	17	工学部校舎予定地		AX04-06、AW04	2.0～3.5	1～1.5	6	→津島岡大第6・7次調査：1988年度	
30	1988	19	動物実験飼育棟・遺伝子実験棟予定地		BD18-19	2.3	1.1～1.2	3	→津島岡大第8次調査：1991年度	11
31	1988	20	国際交流会館予定地		BC26	2.5	1.2	3	中～近世土層→1988年度工事立会	
33	1989	2	教育部身体障害者用エレベーター予定地		AZ-BA05	2.5	0.8	1	縄文前期～弥生前期の基岩、縄文前期～中世 土層→継続して調査、面積38.5m <sup>2</sup>	
34	1989	3	大学院自然科学研究科総合処理槽予定地		AZ17	4.0	1.6～2.0	1	中世～明治の土田明時遺→1989年度工事立会	14
35	1989	4	学生宿舎予定地		BD02	2.0～3.2	1	1	弥生早期～前期の遺→1989年度工事立会	
361	1989	5	図書館予定地		AV-AW13	3.0	1.4～1.6	2	→津島岡大第12次調査：1993年度	
40	1989	3	学生宿舎南ポンプ予定地		BC02	2.5	1.1	1	弥生前期明時、中世土層	18
41	1990	6	福利厚生施設予定地		AW-AX11	3.9	1.4～1.6	2	→津島岡大第13次調査：1994年度	
56	1993	3	農学部汎用耕種実験実習施設予定地		RE～BF22～23	1.5	-	2	中～近世の耕作土	30
65	1994	3	農学部動物実験施設予定地		BD20	2.0	0.9	1	GL-1.4mで黒色土、縄文土層1点→盛り土保存	33
71	1995	4	国際交流会館予定地		BE26	4.1～2.4	1.6	2	中世→明治の明時、以下土田遺、遺構・遺物も し、明治前のみ→工事立会	
72	1996	5	環境理工学部校舎予定地		AW02-03	2.4	1.2	2	→津島岡大第17次調査：1996年度	28
73	1996	6	ボタニング部ボックス棟予定地		BF07	3.0	1.2	1	標高25mで黒色土、弥生～古墳時代の遺構、 古代溝1条	
900	1998	9	コラボレーションセンター予定地		AZ09	2.7～3.4	1.3	2	→津島岡大第19次調査：1998年度	
911	1998	10	環境理工学部校舎予定地		AW02-03	4.5	1.2	2	→津島岡大第22次調査：1998年度	
92	1998	13	工学部システム工学科棟予定地		AW04	2.8	1	1	GL-1.8m黒色土、縄文後期の遺構	33
93	1998	14	遺跡保護区整備関連掘削		AU02-03-06、 AV03	2.4～3.8	0.8～1.6	5	TP1-3-5：隆高地、TP2-4：軌道地、TP1： 弥生溝、TP3：弥生溝+ビット、TP4：中世溝	
1051	1999	6	文芸部 総合研究棟予定地		AZ15、BA14	2.7、3.5	0.8 1.1	2	→津島岡大第23次調査：1999年度	
106	1999	7	環境研究室設備予定地		AV08	1.2	0.2	1	標高土以下に基盤となる岩盤層	96
114	2000	6	縄文～弥生時代における環境復元に伴う 調査		AX00-02-03、 AZ06、AW08	2.6～3.2	1.7～0.9	6	縄文～弥生時代の隆高地、古代溝	61
115	2000	7	創立五十周年記念館予定地		BE14	2	0.8	1	→津島岡大第27次調査：2001年度	
129	2002	5	事務員旧本館棟移転予定地		BD15	2.1	1	1	黒色土の盛り	71
185	2009	2	学童保育室予定地		AV14	3.24	1.95	1	黒色土確認	
186	2009	3	農学部構内緑化工事予定地		BF30	3.4	2.3	2	近世溝・明時 弥生中期～古代におきる溝	102
198	2010	3	国際交流会館予定地		AU13-14	3.4	1.6～1.9	3	→津島岡大第34次調査：2010年度	105

総合番号	年度	番号	調査対象地名 概	構内座標	掘削深度 (m)	造成土層 (m)	概 要		文献
							T/F数	内容・その後の対応	
199	2010	4	生活アレハブ予定地	IK12	2.2	0.9	1	黒色土は未確認を確認	105
208	2011	1	文芸経フェンス工事	AW17, AX17, AY17, AZ16	1.1~2.0	10~1.6	—	近代の土壌、水跡	107
				BJ02	0.8	—	—	門前・跡地建物基礎	
213	2012	1	工場跡活用施設予定地	BI02	2.9	1.1	1	縄文時代~古代層確認	111
217	2012	2	Jリテラス新宮	BI13	1.8~2.3	1	2	縄文時代G17、弥生時代前期土坑・遺構	116
247	2013	2	風見台新宮	BI16~BI17	2.2等	1.0	2	弥生早期~前期土坑	124
251	2016	1	津島岡大遺跡南東部に2017年確認調査	BI07	3.0	1.23	1	弥生時代土坑、近代水跡	129

## &lt;鹿田地区：鹿田遺跡&gt;

総合番号	年度	番号	調査対象地名 概	構内座標	掘削深度 (m)	造成土層 (m)	概 要		文献
							T/F数	内容・その後の対応	
14	1984	—	西橋樑北側受水槽予定地	BU30-31	1.4	0.5~0.7	2	中世土層・包含層確認→盛り土保存	
15	1984	—	医療短期大学部校舎予定地	CT-CU25, CZ19-20-23-24	2.7	0.8~1.0	3	→鹿田第3次調査：1986年度	2
6	1985	4	外車診療棟増築整備工事範囲	AJ33, AJ40, AJ-AK26	2.2~3.0	0.9~1.4	3	弥生時代~中世の遺物	5
(17)	1990	5	Aフットボール総合センター予定地	BY-BZ66	2.3	1.2~1.3	1	→鹿田第6次調査：1990年度	18
(20)	1997	8	基礎工機予定地	BT57	2.2	0.9	1	→鹿田第7次調査：1997年度	30
29	1998	11	病棟予定地	CP-CG43-44, CH25-26, CK35-36, CK15	2.0~2.4	1	4	→鹿田第9次調査：1998年度	53
82	2009	2	学生サウナ棟予定地	CR70-71, CW75	2.1~2.3	0.9~0.7	2	弥生時代鉄器遺。中世以降層作地。集落外縁	102
89	2010	4	岡田跡地西側総合支援センター予定地	AZ04-BA08	2.3~2.4	1.2~0.6	2	古墳遺構・弥生包含層確認→鹿田第22次調査2011年度	105

## &lt;倉敷地区&gt;

総合番号	年度	番号	調査対象地名 概	構内座標	掘削深度 (m)	造成土層 (m)	概 要		文献
							T/F数	内容・その後の対応	
1	1990	4	倉敷生物学研究所遺跡確認	—	2.5	0.7	1	中世後半以降の土壌	18
2	1998	12	バイオ実験棟予定地	—	1.5	0.2	1	近世下地層内、遺構未確認	53
3	2013	1	植物ストレス科学研究等拠点施設建設工事	—	2.0	0.7	1	近世新土層確認	116

## &lt;東山地区&gt;

総合番号	年度	番号	調査対象地名 概	構内座標	掘削深度 (m)	造成土層 (m)	概 要		文献
							T/F数	内容・その後の対応	
3	2006	1	附属小学校校舎予定地	—	3.0	0.3~0.5	4	近世~近代・漢3巻、中世?銅幣	88
4	2008	1	附属中学校校舎予定地	—	2.3~2.4	1	2	古代明礬	95
5	2013	1	附属小学校屋内運動場建て替え工事	—	2.1	0.9	1	中世~近世新土層確認	116

## &lt;三朝地区：福呂遺跡&gt;

総合番号	年度	番号	調査対象地名 概	構内座標	掘削深度 (m)	造成土層 (m)	概 要		文献
							T/F数	内容・その後の対応	
3	1997	5-6	実験研究棟予定地	—	1.66~2.1	0.8	2	→福呂遺跡2次調査：1997年度	50
5	2004	1	三朝自治所増築予定地	—	1.3	0.5~0.9	2	遺構・遺物・包含層未確認	
6	2004	2	高江藩・電話線設置予定地	—	1	0.85	1	河原塚、踏石埋藏確認	81

## 付表2-(3) 立会調査

## &lt;津島地区：津島岡大遺跡&gt;

総合番号	年度	番号	工事名称/掘目	構内座標	掘削深度 (m)	造成土層 (m)	概 要		文献
							T/F数	内容・その後の対応	
11	1984	—	南宮台合葬処理場周縁配水管建設	BI15~17	1.0~2.2	1	溝・土坑、弥生土層・須恵器	2	
19	12		教養部校舎新宮	BE08-09	2.3	1.3	中・近世；中・土層		
20	1986	21	ハンドボールコート新設	BG08	0.2~2.0	0.8	黒色土	6	
21	26		教養部校舎新宮に伴う電気配管	BP07-08	1.8	0.9	中世包含層		
32	1988	17	テニスコート夜間照明施設	BG10-11	2.2	1.5	GI、砂2mで黒色土。西に向かう落ち筋定	11	
37	1989	8	自然科学研究科棟新宮；工事用道路	AZ08	1.4	—	弥生後期水田、近世溝、75cm		
38	10		生物応用工学科棟新宮に伴う電気配管	AV04-05	1.5~1.9	0.7~1.2	黒色土	14	
42	16-19		岡山市道本町津島東線拡幅	AV04~10	0.4~3.0	0.6~1.4	5ヶ所。黒色土、桑葉南之溝		
43	1990	20	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補排水管設置	BC08-04, BE03-04	2.3	1.2	GI、2.3mで黒色土	18	
46	9		消防用水継ぎ	BI18	2	0.8	基盤部まで掘削、石敷		
47	17		津島地区基幹整備（電気）	BS16	1.7~1.8	0.5	2ヶ所。明瓦管～鉄灰色粘土層		
48	1991	19	津島地区基幹整備（電気）	BD15	1.7	1	GI、1.5mで黒色土	21	
49	40		南之郷路外灯設置	BC-BE-BF12	1.5	—	3ヶ所。GI、1.4mで古代層		
52	15		倉伝子実験施設ハンドホール設置	BD18	1.5	0.75~1.1	縄文後期層まで、遺土本		
53	1992	34	附属岡部池池畔駐車場整備	AV12	3	1.7	造成土以上は粘土層	25	
57	1993	17	保健管理センター新宮	BD~BI10~12	1.8	0.6~0.7	黒色土以上GI、1.15~1.7m	30	

総合番号	年度	番号	工事名称/種目	構内座標	掘削深度(m)	造成上層(m)	概要	支線		
	58	19	保健管理センター新設	旧機改修電気設備	BB11	1.1	0.8	養生土留、土留完成		
	59	23	津島地区基幹整備(共同利用施設)排水処理施設	BA07	3.2	-				
	60	28		ボックスカラバート	BD-BE13	15	1	1次壁~中世層	30	
	61	33	津島地区環境整備	水廻り設置	BD-BE12-13	1.8	0.5~1.2	10+所、中世層まで、一部で昭和色土層	30	
	62	34		信号設置	BD-BE12-13	1.6	1	中世層まで、一部で昭和色土層	30	
	63	30-41	野球場バックネット-鳥籠ネット改修	BC05-07 BC06-41		20-32	1	GL-1.2~2.0m付近で黒色土、以下黄色砂~赤灰色粘土		
	66	9	津上線社照明灯設置	BD-BE-BF04-07	2	0.96	GL-1.92~2.0mで黒色土			
	67	194	総合情報処理センター新設電気工事	AV10, AW10, AI11	2.2	1.5	GL-1.7mで黒色土、近接溝	33		
	68	30	機設備設置	BD30	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土			
	76	4	農・畜学部動物実験棟新設	造成土取り	BC18	2.2	1.9	黒色土層付迄まで		
	77	5		ハンドホール設置	BD16-19	1.3	-	4+所、造成土以下に5層		
	78	196	12	サクライトバンチャーパービス ネスタボトリ-新設	外灯設置	AV02, AV03, AV04, AV90, AW02, AW04	10~1.5	0.70~1.1	6+所、明治層~中世層?	44
	79	13		配管設置	AV03-AW03	2	0.95	赤土時代層まで、古墳前期~遺構・遺物		
	80	18	環境理工学部会館新設宇記地電柱移設	AW03	2	-	黒色土まで			
	81	25	新築図書館新設雨水側-外構工事	AV13	1.3	1	造成土以下に:青灰色・黄褐色・灰褐色粘質土			
	82	16	南北道路ガス管理設	BB13-BH13	1.5	-	中世層まで			
	83	197	24	福利厚生施設新設に伴う共同溝新設	AW11-BA12	2	-		50	
	84	24			BC12	2	0.8	GL-1.6mで黒色土、古代-直置の溝		
	94	15	外灯設置	BA09	1.47	1	GL-1.42mで黒色土			
	95	22	コラボレーションセンター支障配管布設	AZ09, BA09	1.4	1	GL-1.4mで黒色土			
	96	24	南福科外灯設置	BH12, BC12	1.4	0.95	中世層まで			
	97	31	環境理工学部会館新設に伴うガス管理設	AW03-AX-AV03-06	1.2~1.4	0.65~0.95	中世層まで (12+所)			
	98	34	学生会館改修に伴うトラップ撤去	BC10	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘土、GL-2.2mまで灰色粘土			
	99	196	35	NTT電柱移設	BA00	1.5	0.9	造成土以下に褐色粘質土	53	
	100	41	環境理工学部実験排水管理設	AX03-AV07	1~2.4	0.6~1.4	10+所、5地点で中世層、2地点で古代層、1地点で古墳時代層まで			
	101	42	馬場修設に伴う排水移設	AI02	2.2	1.1~1.3	GL-2mで赤土層階層、GL-2.2mで縄文系層			
	102	44	環境理工学部会館新設	生活排水側設置	AV03, AW03	1.97	1.4	古墳時代層まで、須恵器-土師器		
	103	48		ガス管理設	AW03	1.45	1	中世層まで		
	107	8	外灯設置	AY00, AZ01-03	1.15~1.35	0.5~1.2	3+所で黒色土 (GL-0.85~1m)			
	108	12	コラボレーションセンター新設:ハンドホール設置	AZ09-09	1.48~2.1	1.03~1.16	2+所、そのうち1+所は古墳時代層まで			
	109	199	13	環境理工学部会館新設に伴うスロープ設置	AW02	3.5	1.2	両側面掘削、築造土下面まで、近代土塊、古代土塊、縄文後期粘土	56	
	110	42	コラボレーションセンター新設に伴う排水側設置	AZ09	1.0~1.2	0.8~1.0	6+所、1+所で黒色土対応層まで			
	116	17	津島地区電柱設置	BA12	1.6	1	造成土下に:灰色粘質土・粘褐色粘質土層			
	117	23	理学部会館改修	本館基礎補強	AY09	1.3	0.9	造成土下に:暗青灰色粘質土・褐色粘質土・灰色粘質土		
	118	300	28	理学部会館改修	機械設備電気	AX10, AY10	0.85~1.60	0.8~1.6	南側ハンドホール:GL-1.6mまで、GL-1.52mで中世層(方向は南東-北西)	61
	119	42	精選応用化学科棟都市ガス改修		AW08, AX08	1.6~2.05	1.45	GL-1.82mで明灰褐色粘土(中世層)		
	120	44	文法館 総合研究棟仮設電柱設置	BA16	1.5~1.7	1	GL-1.4mで中世層?車庫間の築山:土高一部掘削			
	122	4	理学部会館改修:電気設備	ハンドホール	AZ10	1.6	1.0~1.2	中世層		
	123	11	本館棟新設	電柱	BB-BE16	1.5~2.1	1.2~1.4	2+所、GL-1.4mで灰色粘土、GL-2.1mまで砂か?		
	124	27		車庫移設	BB-BC13	0.5~1.6	1	2+所、中世層まで	66	
	125	30		御水移設	BB14	1.6	0.65~0.8	GL-1.4mに灰色粘質土層(古代)		
	126	31	旧変電室基礎解体		BD14	1.05	0.45~0.75	12+所掘削、中世層まで		
	130	29	農学部会館改修:電気設備		BE15	1.8	1.5	3+所、古代-古墳層まで		
	131	34		排水側-井路	BC13-15	1.2~2.5	0.7~1.2	突発文土層-石砂多数、古墳溝、養生溝		
	132	51	本館棟新設	雨水排水側-井路	BB13	1.57	0.8	中世-古代-古墳層		
	133	54		外灯	BH13-BD14	0.95~1.9	0.8	2+所で中世層と古代層まで、GL-1.3mで白色土	71	
	134	55	一般教育棟日棟外灯設置工事		BC07-09	1.0~1.20	0.95	4+所、中世層まで		
	135	57	創立五十周年記念館新設	汚水排水	BB-BE14-15	1.0~2.3	0.85~1.0	一部黒色土上面まで		
	136	1	創立五十周年記念館新設	雨水排水側-管理設	BH13-15	1.3	0.7~0.8	中世層まで		
	137	4	総合研究棟新設機械設備ガス管理設		AX06	1.4	0.9	古代層まで		
	138	6	田事務局庁舎改修電気設備工事		BC15	2.43	0.85	GL-1.9mで黒色土、GL-2.1mで縄文系層		
	139	7	農学部総合研究棟改修電気設備工事		BB, BC18	1.7	0.7	GL-1.5~1.6m前後で縄文後期基盤層		
	140	2003	8	総合研究棟新設その他工事	雨水排水	AX06-BA06	1.7	0.7~0.8	標高3.3~3.4mで黒色土、赤土-古代:東西溝多数、浅置-古代:東西溝-埋埋	74
	141	14		電気設備工事(9灯)	AW, AX06, 07	1.4	-	中世層まで		
	142	15	総合研究棟新設その他工事	排水	AW-AX06-07	0.5~2.5	1.6	例で一部縄文系層まで掘削、養生溝		
	143	17	田事務局庁舎改修:外部給水、消火配管		BC-BD15	2.75	1.1	例で縄文系層		
	144	21-1	公共下水処理施設工事	No.1区間 農学部合併処理槽	BG-BH13	1.8	0.9	縄文系層層まで		

年度	番号	工事名称/種目	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概要	支額
145	21-2	No.20区 体育館東～武道場西	BE-BG10	1.95-2.25	0.8-0.9	構文基礎層、管路で張生早・南側まで、張生溝、構文土坑	
146	21-4	No.4区 文・法・経2号館西	AZ16	2.45	1.5	構文基礎層まで、張生溝	
147	2003	公共下水道接続工事	BA10	1.9	0.7	中世頃の土坑を確認	74
148	21-6	No.6区 農学部4号館東	BG22	1.5-1.9	0.9-1.4	構文基礎層まで、張生・古墳跡面(ピット)、近代埋戻状遺構	
149	21-7	No.7区 津島泊南	BI6	1.15-1.3	0.8	中世層まで	
150	2004	No.8区 南宿舎	BI5	2.0-2.45	1.1	構文基礎層まで	
151	21-8	公共下水道接続工事	BB-BD26	1.2-1.68	1	中世層まで	81
152	6	津島キャンパス環境整備：留学生センター西	BF9-10	0.5-1.15	0.4-0.6	張生後期(包含層・遺構、礎層)	
153	3	総合研究棟改修 仮設電柱	AV08	1.5	0.9	青灰～白灰色の積層土、黒色土は確認されず	
154	5	総合研究棟改修 アース板	AW09	1.8	-	構文基礎層まで、黒色土	
155	2005	キャンパス環境整備(門扉改修等)	BE02、BG07	1.0-1.13	0.7	-1mで中世層、近世埋戻	83
156	13	プールの改修(排水管改修)工事	BC-BB03、 BB-BC02	0.75-2.4	0.8-1.3	構文基礎層まで、黒色土、張生・古墳：溝多数、近世土坑、近代：大規模・溝	
157	14	サッカー場陸上ネット設置工事	BB-BC04	2.0-2.2	-	オーヤによる掘削、一部で黒色土	
158	2	総合研究棟改修工事：耐震工事に伴うPC耐震柱基礎掘削	AX10	1.4-1.6	1.0	中世層まで、近世：南北方向の溝	
159	3	教育学部公共下水道接続工事	AZ-BA02-04	1.3-2.3	0.7-1.0	溝：深3.2m、配管：深3.05-1.92m、黒色土or基礎層まで、東西方向の溝	
160	5	プールの改修配管接続工事	BA-BB02、BC02	1.7	0.7-0.8	張生土層or基礎層まで、古墳時代頃の溝状遺構	88
161	11	総合研究棟：耐震工事に伴うPC耐震柱基礎掘削	AX08-09	1.8	-	古墳～張生時代層	
162	13	農学部2号館南電柱移設	BF16	2.0	-	中世層まで	
164	4	公共下水道接続工事(理学部南)	BA12	2.0	0.8-0.9	GL-1.6mで黒色土、張生時代溝	
165	8	総合研究棟改修 外灯基礎及び管路	AV-AX07-08	1.4-1.7	1.2	近世～中世層	
166	10	総合研究棟改修 外構・配管(東手前)	AW07-08	1.1-1.8	0.9	近世層、土坑基	92
167	13	インフラセンター施設外構配管	BA-BC20	1.2-1.4	0.6-0.8	縄文時代～近代層、中世～近代の溝	
169	7	理学部ヘリウム装置基礎工事：基礎杭設置	AZ09	4	-	黒色土無し、GL-4m以下で礎層	
170	21	電気工事：建柱	AY03-AZ03-BA03	2	-	3地点の掘削、北地点で黒色土無し	
171	22	総合研究棟(教育系)改修 電気工事：接地施設	AY04	1.7-1.28	-	古代層下に黒河川の砂層	
172	26	電気工事：廊下ガス	AZ03	1.2	-	GL-0.95mで黒色土	
173	28	KDDI無線基地局新設工事：建柱	BE12	1.8	0.8-1.05	灰褐色砂質土層まで、黒色土未確認	
174	32	プールの排水道エアーターゲットガス取設工事	BE04	0.9-1.5	-	中世層(?)まで	
175	33	南宿舎電柱設置工事	BJ17	2	-	GL-1.2-1.5mで黒色土	
176	29	大学生協車庫利施設新築	ガス管 AX04	0.85-1.21	1	中世層まで	95
177	40	大学生協車庫利施設新築 外灯移設	AX05	1.1-1.2	0.68-0.95	2地点の掘削、古代層まで	
178	42	新技術センター公共下水道接続工事	AW00-01	0.85-1.75	0.7	中世～近代溝4条(南北並行)、黒色土層まで	
179	43	動物室	AY01	0.85	0.85	黒色土上面で張生～古墳時代の赤土相層	
180	44	教育学部体育館他改修 電気設備	AY03、BA03	1.2-1.7	-	2地点の掘削、北：中世層まで、南：東西溝	
181	49	接合部施設 掘削施設	AY02	0.3-1.7	-	古代層まで	
182	52	大学会館他改修工事：一般教育講義棟ガス設備	BB10-11	0.7-1.2	0.55	GL-1.0m以下で礎層、土坑基、溝?1条	
183	53	工学部内外ガス配管改修工事	AV04-06、AW04	0.8-1.48	0.8-1.1	一部で中世層まで	
185	6	総合教育棟(共通教育)改修工事：高位テーブル	BE-BF04-08	1.3	-	2ヶ所、中世層・近世層まで	
188	14	環境整備(施設誘導案内板)新設工事	BE10	0.8-0.95	0.6	管理棟センター北東で張生?遺構埋土	
189	16	工学部2号館(動物飼育室)改修 ガス管	AX06	0.8-0.9	-	一部張生?包含層	
	17	工学部2号館(動物飼育室)改修 排水管	AU06-07	0.65-0.69 2.2	1.25	北東部で河溝	
	21①	西門南東	BE12	1.8	-	中世～張生層まで、底面で黒色土	
	22	西門北東	HA12	2.0	-	構文層まで、黒色土確認	
	23	西門北西	HA13	2.05	-	構文層まで、黒色土確認	
	24	季節間前北東	BD12	1.56	-	構文層まで	
	25	ガス管	AY-AZ02-03	0.8	-	張生層確認	
	27	電気設備：アース埋設 電気設備：配管 電気設備：外灯	AY01-AZ03	1.65 0.8 0.8-1.3	0.4	構文層まで、黒色土・中世以前の遺構 張生包含層・遺構 黒色土まで	
	29	総合研究棟B期(教育系)改修 屋外排水	AY02-03	1.15	1	黒色土・張生遺構	102
	30	総合研究棟B期(教育系)改修 屋外排水：管路	AZ00-02	管路 1.7 1.2-1.7	0.7	包含層・明野・小溝	
	32	電気設備：アース埋設 電気設備：配管 電気設備：外灯	AZ00-AY-AZ01	1.7 0.8-0.9 1.3	0.6	構文層まで、北：黒色土、南：黒色土無し、 構文層まで、黒色土 包含層・土層部小片 改設土内	
192	42	文法館ゴイラー用機架設工事	AX16	2.5	1.5	構文層まで、張生・後期溝1条	
193	48	総合研究棟(薬学系)改修 電気設備：配管 電気設備：アース板	BB16-BC17	1.45 1.50-1.54	1.05	近世層、近代溝 包含層(中世?) 張生・古墳層まで、近代東西相層1条	
194	54	環境理工学部公共下水道接続工事	AU03	2.3	0.9	黒色土上面まで	
195	55	薬学部西水道管位置確認工事	BC18	2.7	0.55	～岡山市教育委員会対応～ 構文層まで、黒色土	

総合 番号	年度	番号	工事名称/科目	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要	文獻		
	2003	8	外灯整備工事	教育学部	A206	1.1	0.7	黒色土		
	2003	17		創立五十周年記念館	BD14-15	1.1~1.6	1.15	洗石層、近代石組用水路		
	2002	23	総合研究棟(工学系)に付 う北陣管理設備	生活排水-実験棟上	BB-BD17	0.87~1.4	0.8	古土層		
	2003	26	テニスコート場設後田工事		BG11	1.9	-	既設内、後陣池-岡山車道引込		
	2004	30	31	電気設備:管線	BC-BD18	0.7~1.28	-	中世層	105	
			電気設備:ハンドホール		2	1.1	既設時代層、近世-近代/埋填土			
	2005	35	理学部本館改修工事	外灯設置:管線	BB17	0.63~0.74	0.85	近世-近代層		
	2006	36	農学部水道管復旧工事(緊急対応)	外灯設置:基礎	BF15	1.08~1.34	-	中世層		
	2006	36		打釘	BF15	1.1	-	既設内		
	2007	37	国際交流会館	排水側掘削工事	AU-AV13-14	22~25	-	4ヶ所、中世土層から0.50m掘削、軟土後期層		
	2009	1	文法経フェンス工事		AW17, AX17, AV17, AZ16	1.1~2.0	1.0~1.6	近代の土層、水路		
	2010	8			AZ17	0.8	-	門前・陸軍建物基礎	307	
	210	9	津島観配水管布設工事		BA10	1.3	0.6	中世層まで、近世-近代埋填土		
	211	9			BA08	1.5	0.6	中世層まで、近代埋填土		
	212	12	教育学部講義棟トイレ設備工事<屋外排水>		A204	0.9~1.5	0.55	近代、近世-近代通層		
	214	9	新しい学部整備	防凍ネットボール	BB06-07	3.0	1.0	基礎層まで		
	215	11	農学部屋頂排水管整備	柵・管線	BB-BF13	1.6	1.0~1.3	基礎層まで	311	
	218	5c	設置管線①			0.9	-	近代の埋填土		
	219	5d	設置管線②			0.75	-	近代の東西方向石組溝		
	220	6a	総合研究棟改修(工学系)	埋地掘削①	AV05					
	221	6b		埋地掘削②		1.65	0.85	構文層確認		
	222	8		電気設備:管線	AW05	0.8	-	近代の東西方向石組溝		
	223	16	NTT電柱引き込み	電柱	BB15	1.6	-	旧陸軍東西方向水路		
	224	19b		埋地ビッド②	BC10	1.05~1.1	0.5	中世層、近世南北方向溝		
	225	21a		東西道路南側外灯①	BB08	1.0	0.55	赤土層確認		
	226	21b		東西道路南側外灯②		1.1	-	旧陸軍東西水路		
	227	21c		東西道路南側外灯③	BB09	1.3	-			
	228	21d		東西道路南側外灯④	BB11	1.4	0.3	埋石確認		
	229	21e		東西道路南側外灯⑤		1.5	0.95	中世層、近世東西方向溝		
	230	21f		東西道路南側外灯⑥	BB12	1.4	0.85	中世層、近世東西方向水路		
	231	21g		東西道路南側外灯⑦		1.1	0.7	近世層、近世東西方向溝		
	232	22a		集水柵①	BB10	1.4	0.6	埋石確認	316	
	233	22b		集水柵②	BB11	1.4	0.9	中世層、近世東西方向溝		
	234	23b	大学会館周辺地盤環境整備	東西道路南側樹木植穴①-④	BB10-11	0.6~0.7	-	旧陸軍東西方向水路		
	235	24		自由勾配掘削①	BB09~12	0.8	0.6	洗石層、近世南北方向の段・溝、近代南北方向溝		
	236	25		臺北管管線	BB10-11	1.0~1.1	-	旧陸軍東西方向水路		
	237	26a		ガス管管線①-①	BB10	1.0	-	旧陸軍東西方向水路2条		
	238	26b		ガス管管線①-②	BB10	1.2	0.55	埋石、近世土層、近代南北方向溝		
	239	28a		さくら広場外灯①	BB10	1.4	0.5	赤土前庭層確認		
	240	28b		さくら広場外灯②	BC10	1.1	0.45~0.65	古墳時代前期層、古墳時代後期土坑(横土口)、近世土坑		
	241	30		ガス管②	BB10-BC10	0.75~1.4	0.85	近世層、近世土坑、近世-近代東西方向溝		
	242	31		バーゴラ電気設備	BC11	1.5	0.75	埋石、赤土時代ビッド、戦国時代南北方向溝		
	243	35a	ガス漏れ修理		A203	1.1	0.5	赤土時代前期黒色土確認		
	244	8	Jテラス新設	排水管	BC-BB13	0.7	-	旧陸軍南北方向水路	321	
	245	12	津島沼治所	電柱新設工事	BB16	2.7	-	オーストラリア、GL-1.6~1.8mで黒色土		
	248	9			BB16	0.8~1.9	1.0	陸軍水路確認GL-0.4m		
	249	13	職員宿舎新設		BB16	0.9~1.45	0.65~0.85	埋石GL-1.3mで赤土後期層確認	324	
	250	16			BB16-17	2.5	0.9~1.2	オーストラリア、GL-1.6mで黒色土、-1.8mで埋石層確認		
	251	7	職員宿舎電柱立替		BB14	2.5	0.8	オーストラリア、GL-1.6~1.8mで黒色土		
	252	13		遊水ブロック柵		1.1	0.6	黒色土まで確認		
	253	14		新設柵①		1.5	1	黒色土まで確認		
	254	15	講義棟改修(教育学系)	新設柵②		1.4	0.65~0.9	黒色土まで確認	328	
	255	16		外灯基礎①		1.4	0.78	黒色土、中世埋石確認		
	256	17		外灯基礎②		1.4	0.7	黒色土、中世埋石確認		
	257	18		外灯基礎③		1.4	0.8	黒色土まで確認		

<鹿田地区:鹿田溝跡>

総合 番号	年度	番号	工事名称/科目	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要	文獻	
	3	1983	外水処理施設電気配管設置		AO-AW22	1.3	-	赤土後期(土影・分銅石)土製品、貝殻層	1
	7	6	外水処理施設保排水管理施設		AW-BH23, BH-BH24	1.3~1.7	0.7~1.3	赤土-中世:遺構・遺物	
	8	1985	基礎環境整備緑化工事:電気配線ハンドホール掘削		AG1, AG24, AF23	1.2~1.7	0.9~1.3	3ヶ所、中世埋石層・ビッド	5

総合 番号	年度	番号	工事名称/種目	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概要	交差	
	9	9	記念館東側雨水管改修工事	BR-BN4	0.8-1.3	0.8	中世包含層、土層		
11	1986	24	溝及び開溝工事	CL-CR12, CF-CX13, CX-DA14	2	0.8-1.0	中世包含層	6	
14	1987	8	管理棟新営に伴う基礎杭掘削	BC37	2.5		弥生時代?包含層-遺構	8	
15	1989	46	旧管理棟跡地埋設整備-外灯基礎	CE30-37-44, CJ-CX45, CL28-29	1.2-1.5	0.7-1.0	2ヶ所、中世層	14	
18	1992	29	アイソトープセンター-1号側溝-集水栓	BW71	1.4-1.5	0.9	中世溝1基		
19	1992	41	テニスコート脇電気埋設	CF73	1.2	1	古代土層1点	25	
20	1994	5	溝改修工事	DH60-62	1.5	0.8	近世層以下は遺構層上か、溝3基・ビット9基	33	
21		11		防風病院連絡通路新設	BG-BD18	1.5	1	造成土以上は茶褐色土・青灰色粘質土層、遺物なし	
22		14	農田地区基幹整備	溝掘タンク設置	CD07-08	2.3	1	中世2階、溝3基、溝内から古代・中世土層部	
23	1995	17		溝掘タンク埋字溝埋設	CD08-CC11	1.23	0.85	包含層、中世土層、掘削で区画全長1/2程度破壊	38
24		23		防球ネット取設工事	DF56-67	3	0.8	径60cmを12ヶ所、内4ヶ所で土層片-石器、南西角4号井(GL-2m以下は旧河道か)	
30	1998	36	校舎新営に伴う仮設電柱工事	BV73, CN78	1.2	1	中世層まで	53	
33		15		給排水配管-管路	BV65-71	1.2-1.4	0.9	中世層まで	
34		18		排水溝	BU65	2.2	1.1	面積82㎡、近世溝、中世・遺・ビット	
35	27	35	基幹整備(電気設備)-地中配管	BV42-43, B143-44	1.25-1.45	0.45-0.5	2ヶ所、中世層まで、時期不明遺構		
36	1999	41	病棟新営	共同溝解体	CF21-28, CF-CL28, CD-CF28-33	1.7	-	面積18㎡、農田11次調査南側で中世ビット	56
37		46		汚水排水-管路	CN46-DE49	2.3	1.2	古墳時代?層1基・土坑1基、中世遺構等	
38		47	グラウンドゴルフネットゴール	CM-CN-CP-CR- CT-SR, CV-DA- DC-DD-DF59	2.0-2.3	-	11ヶ所、青銅6ヶ所・河道、7-10ヶ所・農地、最北端・河道		
39		48	病棟新営	汚水排水	HT51	2	1	古墳時代層まで	
41		25	病棟新営	管路-汚水排水	CD41-CN45	1.6-1.8	-	溝か?	
42	2000	26	電柱及び外灯の埋設工事	CN15-21-27, CO1-42, CS45, DV45	1.6	-	7ヶ所、灰白色土層-赤褐色粘質土層-暗褐色粘質土層、農地等	61	
43		29	医学生ガス配管切り直し用/バルブ取付工事	DE7	0.8-1.15	0.7	GL-0.85mで青灰色粘質土層		
44		47	農田地区基幹用水路築替埋設工事	DG-DI28-67	2.1-2.3	1.3-1.5	幅120mの断面調査、古代の遺構-中世		
45	2001	37	総合教育研究棟新営に伴う機械設置工事	BR-CA43, CA43-55, CAM-CL45, BR-CA55	1.65	0.7-0.9	中世層まで、中世土層多数出土地点あり	66	
47		19	農田地区基幹配管埋設工事	CH11-CN22	1.0-1.3	0.87	中世層まで		
48		10		BT-BU11	0.5-1.8	-	2ヶ所、GL-1.22mで古Ior中世層		
49		22		共同溝排水管	QH1-42	1.5	-	1ヶ所、包含層まで	
50	2002	25	エネルギーセンター-機新営	外灯	CG41, CO34, CP43, CO38	1.47-1.66	-	4ヶ所、中世層まで	71
51		27		外溝	CV36-45	0.9-1.9	0.9	中世・井戸・柱穴・溝	
52		36	総合教育研究棟新営その他の工事	BR-BS45-53	1.85-2.0	0.8-1.0	5ヶ所、中世層まで		
53		52	本館新営その他の工事	植栽移植	DO67	1.25	-	中世層	
54		56	旧道合病棟グリーストワップ改修	BG18	1.68	-	前面で発生-古墳層、土層		
55		5		屋外排水	BS-BZ46, CA-CO46, CO45	1.7	0.7-1.0	洪水中間?包含層まで、近世土坑、中世ビット多数、地味保証	
56	2003	9	総合教育研究棟	外溝工事(雨水・汚水・実験排水)	BL-BS45-53	0.8-1.75	0.7-0.9	一部赤土中世包含層まで、古墳時代溝、中世層か、近世土坑等	74
57		10		排水配管埋設	BR-BS50-54	1.33	0.8	一部で中世層まで	
58		13		外溝工事(外灯)	BR53, BL54	1.4	0.8	中世層まで	
60		3	医病棟内支障ガス配管改修工事	AP16, AP-AJ17, AJ9-16	1.0-1.9	0.7-0.8	埋設部・近世-古代水田層、中世磁器、発生-古墳河道(移)		
61	2004	5	医病棟内支障給水管配管改修工事	AE4-16, AF-AI16, AP-15, AJ-AO9	0.9-1.9	0.85	中世・中世?近代磁器、発生-古墳河道(移)	81	
62	2005	3	医学生部電通ビット埋設高圧ケーブル設置工事	DH-DJ18, DJ19	1.1-2.5	0.7-1.1	一部で発生-近代層	83	
63	2006	6	エネルギーセンター機新営に伴う工事	CT-CU45	2.5	0.9	農田地区2次調査地点と重複	88	
67		4	基幹埋設整備(道路等)工事	CG13-20, CD12-29	1.2-2.2	0.9-1.2	基幹層まで、中世・東西-南北溝		
68		5	中世館屋上防水改修その他の工事	AS03-07, AV-AV07, AY-BB09	0.6-0.9 1.4, 1.8	0.7	古墳時代北溝、中世東西溝		
69	2007	7	中央診療棟新営:ガス管切断工事	BT11	1.28	0.5	中世層		
70		10	基幹整備(電気設備)工事	CO42, CV36	1.3-1.65	1.3	中世層まで、遺構	92	
71		11		ガス配管1	CG08, CF09-10, CG-CH1, CH11	0.85-1.3	0.9	中世・井戸(古銅)・ビット・溝	
72		17	埋設整備(道路等)工事	ガス配管2	CL12, CM13, CN14-15	1.0-1.2	0.4	中世層、中世遺構	
73		27	総合研究棟(医学系)新営その他の工事	BT-BU65	1.35	1	中世層		



総合 番号	年度	番号	工事名称/額目	構内座標	掘削深度 (m)	造成上層 (m)	概 要	文獻
74	2007	28	排水路改修工事	CJ7-CP12	1.7-2.0	0.6-0.8	包含層及び柱状土層上に掘削地	92
75	30	高エネルギー炉燃室改修工事	BE33	1.4	0.6-0.7	中世～近代	埋石・溝、弥生後期土器	
77	6	基礎整備（西病棟とりこ）	B723-25	0.98-1.4	0.7	弥生基層層まで		
78	6	17 外灯整備工事；研究棟南駐車場 ライトコート工事	BC24、B824	0.75	0.5	湿水性基層層		
79	2008	7	基礎型支柱一部とりこわしに伴う支脚ガス配管移設工事	A033-54、 AL51-A054、 AL54-61、 AL62-AF60	0.76-1.0	0.5	近世層まで、土坑2基	95
83	2009	3	喜田遺跡第20次A調査発掘打ち	CF00、CB40	0.8-0.9	0.7	中世層まで	102
90	6	高精度放射線測定機屋外排水工事	BH32-35、 BI-BI35	0.75-0.9	0.6	中～近世の遺構？		
91	2010	7	中央診療棟新設；アース無設置工事	BR14-16-19-22	0.9-1.8	1.1	包含層	105
92	17	外灯整備工事；研究棟南駐車場	BY66-50	1.2	1.2	遺構埋土？		
93	22	保育所改修工事	CY-CY29-29	1.6	1.15	弥生基層層まで		
95	2011	4	立体駐車場新設<配管>	CN45-49、 CO-DF49、 CW-DD44、 DD45、DD-DF46、 DF47-49	0.7-2.38	0.50-1.0	弥生時代土坑、古代土坑、中世溝、近世土坑・溝・経路	107
98	8	グラウンド防犯ネット設置	CL-DF57	2.0	1.0	オーズ掘削		
99	2012	9	医療薬学総合支脚配管	BL-BI46	2.0	1.2	中世溝・土坑？、弥生基層層まで	111
100	13	講義実習棟改修	BL-BY66	1.6	1.1	中世以前（灰土褐色砂質土）まで		
102	3	浄化槽撤去	BM57-58	3.6	1.1	弥生基層層以下まで		
103	4	共同溝撤去	BE65	2.3	1.1	弥生基層層まで		
104	5	ボイラー撤去	BH-B66-68	3.9	1.1	弥生基層層以下まで		
105	6	薬油タンク撤去	BC67-68	3.5	1.1	弥生基層層以下まで		
106	7	煙突撤去	BJ-BK69	4.9	1.1	弥生基層層以下まで		
107	8	工事用電気引き込み	AV68	2.0	1.0	中世層(?) 確認		
108	9a	排水配管 (A工区)	AD-AH66-67	2.45-2.68	1.2-1.60	古代河川、中世～近代層、近世溝		
109	9b	排水配管 (B工区)	AI-AK67	2.2-2.45	1.6-1.60	古代河川、中世～近代層		
110	9c	医療薬学合型教育研究拠点施設新設	AJ66-AK67-68、 AL-AF67-68	1.8-2.66	1.35-1.7	古代河川、中世～近代層		
111	9d	排水配管 (D工区)	AO-AT68	1.7-2.05	1.2-1.35	弥生時代後期包含層、弥生～古代砂層、古代河川、中世～近代層		
112	9e	排水配管 (E工区)	AS-AW68	1.45-1.9	0.7-0.75	弥生層、弥生ピット、弥生土器片出土、弥生～古代砂層、近代層		
113	2013	9f	排水配管 (F工区)	AU-AX-A268、 AX-AZ-BH69	1.33-1.84	0.7-0.75	弥生層、弥生～古代砂層、中世～近代層	116
114	9g	排水配管 (G工区)	BC66-70、 BD61-63-64、 BE60-63	0.88-1.5	0.89-1.15	中世～近代層、近世土坑		
115	11	1ホール新設	AL33	1.5	0.8	中世？～近代層確認		
116	12	給排水管路	AK-A362-67	0.65-1.85	1.3	中世～近代層確認		
117	19	臨床研究棟改修	BJ-BK43	1.64-1.73	0.6-0.71	古墳？・中世・近世層確認		
118	20a	排水配管 (A工区)	AD40	2.0	1.3	中世層、近世土坑		
119	20b	排水配管 (B工区)	AD-AE39-40	1.75	1.5	中世～近代層、河川？		
120	20c	排水配管 (C工区)	AF40-42	1.52-1.63	1.06-1.2	中世～近代層確認		
121	20	給水・消火管	AI-AW40-42	1.4	0.8	中世？～近代層確認		
122	22a	中世B期発掘調査に伴う支脚物撤去	BZ-CC42、 BX-BY43	1.1-1.45	0.85-1.0	中世～近代層、近世土坑・経路		
123	22b	排水配管 (C工区)	BT35	2.3	1.1	中世～近代層、中世溝		
124	13	動物実験施設改修	CS38	1.4	0.9	中世溝、近世近代層		
127	13	機械設備撤去	CS58	1.8	1.1	弥生～古墳層まで掘削、中世土坑		
128	15	医療薬学合型教育研究拠点施設新設	BI69	1.6	0.7	中世～近世近代層	121	
129	19	カーブミラー基礎	BL20	1.3	0.8	中世～近代層確認		
130	24	グラウンド復旧工事	CP-DF68	2.1	1.1-1.2	オーズ掘削、1ヶ所で貝層確認 (GL-約1.6 m)		
131	11	外灯1	BA21	1.3	0.75	中世溝、弥生後期の包含層確認		
132	13	外灯3	BF11	1.3	0.8-1.05	中世層#2基・溝1基確認		
133	14	旧統合病棟とりこわし外灯工事	AY-AZ08	1.3	0.5-0.6	中世ピット2基・溝2基確認、弥生後期包含層確認	124	
134	15	パワーカー1	BG10	0.9	0.75	近世溝または河川確認		
135	16	パワーカー2	BG09	0.9	0.65	近世土坑1基・溝1基確認		
136	17	パワーカー3	BG09	0.9	0.7	近世溝または河川確認		
137	30	臨床講義棟改修工事	BV40-BW41	1.0	0.6	中世層確認		
138	2	中央診療棟新設	CA44	1.15	1.05	中世層確認		
139	7	管路1	AD63-65	2.3	1.6	古代河川道床層まで確認		
140	8	旧17化学棟改修工事	AF62-65、 AD-AF66	1.7-2.3	1.5-1.7	古代河川道床層まで確認	128	
141	9	管路3	AJ63-67	1.95	1.6	中世層まで確認		
143	2017	4	自家発電	CM43-CF46	1.2	1.0-1.1	中世層確認	134

## &lt;東山地区&gt;

報告番号	年度	番号	工事名称/編目	境内座標	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文獻
1	1983	-	岩屋中学校新舎	-	4.0-5.0	-	シスト層中	1
2	1987	29	岩屋小・中学校校舎増設工事	-	1.2	0.79	GL-1.1mで近き水田層、溝1条	30

## &lt;三朝地区：福吉遺跡&gt;

報告番号	年度	番号	工事名称/編目	境内座標	掘削深度(m)	造成土厚(m)	概要	文獻
4	1997	18	実験研究棟新舎に伴う電気配設管路工事	-	1	-	GL-1.0mで中世包合層は東に向かい上昇	30

付表3 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要（2019年3月現在）

種別	遺跡名(地区名)	調査名：工事名	遺 物 数 (1期～約30フィート)						特殊遺物ほか	文献		
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他			ヤヅル*	
泉原	泉原	第1次調査：再発掘機	5465	503	6	20	0.5	1	16	丹波り土器器、白磁、瓦器、木製短甲、人面鏡類土器、ガラス片、瓦片等	7	
		第2次調査：NMR-CT室	1064	96	0.4	4.5	0.5	1	4	黒色土器、田舎、木製、磨製土器、和服型、円筒磁器	10	
		第3次調査：医局校舎	586	36	0.3	18	0.3		4	石器	10	
		第4次調査：医局配管	4	2	0.3	0.5	0.2	1		古代土器、煮煎製品	24	
		第5次調査：管理棟	1012	88	2.5	6	1.5	0.2	3	木器、炭化種子、牛歯骨、焼き印付き片断	40	
		第6次調査：RC総合センター	62	59	0.5	1	1.5			青銅製物	85	
		第7次調査：基礎医学棟	775	73	1	1.3	0.2	1	1	磁器土製品	56	
		第8次調査：医局診療棟	10	10						備前焼板、瓦器類、磨製産物	108	
		第9次調査：病棟	1201	96	0.1	1.3			9	2	本朝土器	56
		第10次調査：共同講	2	2							古代土器、杖	168
		第11次調査：病棟	74	66		4			2	2	本朝土器	56
		第12次調査：スウェーデンセンター	147	77	1	54					石製遺物、鏡、磨製産物	98
		第13次調査：総合教育研究棟	309	259	24	10					動物	112
		第14次調査：病棟	662	55	1	2	0.2	1	7	1	木器、瓦器類	98
		第15次調査：総合教育研究棟	4	3							-	81
		第16次調査：立保健学場	1	1							-	87
		第17次調査：総合研究棟	1112	68	4	8	0.2	1	30		-	92
		第18次調査：中央診療棟（本体）	1555	116	19	18	0.5	2			-	102
		第18次調査：中央診療棟（その他）	4	2							2	108
		第19次調査：歯学部図書下	185	145	1	4			35		磁器土製品、近世遺物木材	95
		第20次調査（A・B地点）：中央診療棟	296	148	68	62		6	12		密閉、磨製鏡、貝	102
		第20次調査（C・D地点）：中央診療棟	861	55	16	7	1	0.1	7		-	105
		第21次調査：環境整備	151	4	1	3		0.1	2		磁器土製品	105
		第22次調査：地域医療人育成センター	175	146	3	25	1		1		-	107
		第23次調査：Jホール	33	30		1			2		-	111
		第24次調査：医薬薬学棟	105	52	4	21			2		結馬（壺駒矢、牛）	111
		第25次調査：中央診療棟2期	85	52	3	4		5	21		烏帽子	121
第26次調査：動物舎	75	34	4	7		2	28		-	121		
第27次調査：自家発電設備	2	2							-	134		
津島岡大	津島岡大	第1次調査：NP-1	5	0.5	0.5	4				-	3	
		第2次調査：農学部合併処理槽	15.5	12	1.5				2		変容土器、弥生前期土器	4
		第3次調査：男子学生寮	59	48	1.5	2	4.5		3		縄文後期土器、変容土器、石製器類、瓦器土器片、礫状石器、磨製物、種子	19
		第4次調査：屋内運動場	1	1							-	27
		第5次調査：大学院自然科学研究科棟	85	71	3	1	8		2		縄文後期土器、耳輪、輪、磨製物、種子	6
		第6次調査：生物応用工学科棟	53	36	1	9	6		1		古代土器、丸形木器、編み物、弥生前期人形土製品、磨製物	35
		第7次調査：情報工学科棟	13.5	10	0.5	1			2		-	32
		第8次調査：遺伝子実験施設	11.5	11	0.5						-	32
		第9次調査：生体機能応用工学科	42.5	35	2.5	3	2				磨製物、種子、縄文後期土器	47
		第10次調査：保健管理センター	86	78	1	7					分銅類土製品、銀器関連、器台	64
		第11次調査：総合情報処理センター	4.5	3	0.5	1			1		-	36
		第12次調査：図書館	60.2	38	1	20	0.2	1			弥生土製道具類、銅	64
		第13次調査：福利厚生施設北	12.5	12	0.5						-	41
		第14次調査：福利厚生施設南	12.2	11	0.2				1		-	46
		第15次調査：サウナセンター（サウナ・リラクゼーション）	38	15	2	20			1		縄文後期耳輪、編み物、磨製物	72
		第16次調査：動物実験棟	2.3	0.3							2	44
		第17次調査：環境理工学部校舎	74	63	1.1						-	57
		第18次調査：南陽科ボンプ棟	0.2	0.2							-	73
		第19次調査：コラボレーション・センター	38	21	1	4		1	1		砂管、輪石口	65
		第20次調査：環境理工学部ボンプ棟	0.2	0.2							-	53
		第21次調査：工学部エレベーター	7	5	2						縄文中期土器、磨製物	65

種類	遺跡名 (地区名)	調査名：工事名	種 数 (1期：約30リットル)						特徴遺物ほか	文献			
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他**					
発掘	津島岡A	第22次調査：環境理工学部校舎	339	26	4	3	0.2	0.2	0.5	古代塚部材	77		
		第23次調査：総合研究棟	81	20	0.5	60	0.5			縄文後期土、石棒	80		
		第24次調査：総合研究棟南西下	2.1	1	0.1	1					80		
		第25次調査：農学部校舎施設	0.3	0.1		0.2					61		
		第26次調査：事務局本部棟	25	17	2	5			1		76		
		第27次調査：創立五十周年記念館	182	14	1		0.2	3		縄文後期土器(中津)	68		
		第28次調査：自然科学系総合研究棟	152	13	2		0.2				87		
		第29次調査：農学部共同棟	1.1	1	0.1						71		
		第30次調査：イオンエベーター	23.3	5	0.3	18			0.2		93		
		第31次調査：大学生協東エリヤ店舗	5.7	5	0.5						95		
		第32次調査：教育学部前道場	17	12	3					2	編み物	100	
		第33次調査：薬学部講義棟	126	11	1.5		0.1				縄文中期土器(船元)	105	
		第34次調査：国際交流会館	1	1								105	
		第35次調査：図書館(増築)	1	1								116	
		第36次調査：職員宿舎	25	0.5						2		129	
		第1次調査：実験研究棟	7	6	1						縄文早期土器	55	
		第2次調査：実験研究棟スロープ	31	3				0.1				55	
		試掘 確認	奥田	奥田駐車場(1985)	1	1							5
				奥田アイトープ総合センター(1990)	1	1							18
	地域広域総合支援センター(2010)			1	1								105
津島岡B	男子学生寮(1985)		1	0.7	0.3							5	
	大学院自然科学研究科棟(1986)		1	1								6	
	理学部身障者用エレベーター(1987)		0.3	0.3								8	
	教養部身障者用エレベーター(1987)		0.7	0.7								8	
	工学部校舎(1988)		1	1								11	
	動物実験飼育棟・遺伝子実験棟(1988)		0.7	0.7								11	
	国際交流会館(1988)		0.3	0.3								11	
	大学院自然科学科合費処理槽(1989)		0.2	0.2								14	
	学生合宿所(1989)		0.4	0.2					0.2			14	
	教育学部身障者用エレベーター(1989)		0.3	0.3								14	
	図書館(1989)		1	1								14	
	学生合宿所ガンプ棟(1990)		0.4	0.4								18	
	福利厚生施設(1990)		0.5	0.5								18	
	農一農学部動物実験施設(1993)		0.1	0.1								33	
	環境理工学部校舎(1995)		0.1	0.1								53	
	システム工科学科棟(1998)		0.1	0.1								53	
	王滝村古跡施設(2012)		2	0					2			111	
(土生)	科田入館舎(1987)	1	1							8			
(倉敷)	牧師生物科学研究所(1990)	0.1	0.1							18			
(粟山)	附属小学校校舎(2006)	1.1	0.1						1	87			
	附属中学校体育館(2013)	1	0						1	116			
立 倉	1983年度	2	2							分割粘土製品	1		
	1984年度	1	1								2		
	1985年度	1	1								3		
	1986年度	0.5	0.5								6		
	1987年度	0.5	0.5								8		
	1991年度・1992年度	0.3	0.3								21.25		
	1993年度～1999年度	0.8	0.8								30.33.38 44.50.53 56		
	2000年度	3	3								61		
	2002年度	8.5	2.5	6							71		
	2003年度	2	2								74		
	2004年度	1	1								81		
	2005年度	1.1	0.1					1			83		
	2006年度	1.1	0.1					1			87		
	2007年度	0.5	0.5								92		
	2008年度	1	1								95		
	2009年度	0.2	0.2								102		
	2010年度	4.2	0.2					4			105		
	2011年度	3	3								107		
	2012年度	0.5	0.5								111		
	2013年度	1.5	1.5								116		
2014年度	0.6	0.1						0.5		121			
2015年度	0.5	0.5								124			
2016年度	0.1	0.1								129			
2017年度	0.1	0.1								134			
分布調査	1989年度 三朝・津島	0.3	0.3								14		
合 計			3851.6	2094.4	215.4	450.5	32.5	34.4	223.4				

\*：木器・種子・サンプルは整理の進捗状況により容量および保管形態が変化するため、表中の数値は当該年度の収量を示す。

付表4 埋蔵文化財調査室刊行物

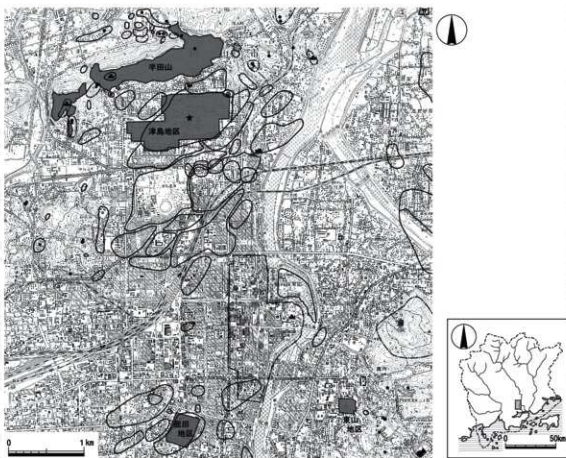
番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報1	1983年度	1985年2月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報2	1984年度	1985年3月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第1集	1985年5月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ(農学部構内BH13区他)	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊	1986年3月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報3	1985年度	1987年3月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報4	1986年度	1987年10月

付表5 埋蔵文化財調査研究センター刊行物(2019年3月まで)

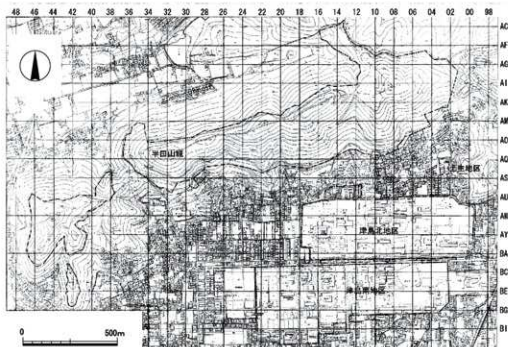
番号	名	称	発行年月日
7	鹿田遺跡Ⅰ	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊(鹿田遺跡第1次・2次調査)	1988年3月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報5	1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第1号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊(鹿田遺跡第3次・4次調査)	1990年3月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報6	1988年度	1989年10月
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第3号	1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7	1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第6号	1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報8	1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊(津島岡大遺跡第3次調査)	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9	1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡3	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊(鹿田遺跡第5次調査)	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報10	1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡4	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊(津島岡大遺跡第5次調査)	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報11	1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡5	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊(津島岡大遺跡第8次調査)	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報12	1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊(津島岡大遺跡第6次・7次調査)	1995年12月
36	津島岡大遺跡7	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊(津島岡大遺跡第11次調査)	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報13	1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡4	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊(鹿田遺跡第6次調査)	1997年3月
41	津島岡大遺跡8	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊(津島岡大遺跡第13次調査)	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報14	1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡9	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第13冊(津島岡大遺跡第14次調査)	1997年12月
47	津島岡大遺跡10	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊(津島岡大遺跡第9次調査)	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報15	1997年度	1999年1月

番号	名 称	発行年月日
51	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報 16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡1 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第15冊 (福呂遺跡第1次・2次調査)	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報 17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報 18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊 (津島岡大遺跡第10次・12次調査)	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 (津島岡大遺跡第19次・21次調査)	2003年3月
66	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-紀要 2001	2003年3月
67	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊 (津島岡大遺跡第27次調査)	2003年5月
69	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-紀要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊 (津島岡大遺跡第15次調査)	2004年3月
73	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊 (津島岡大遺跡第26次調査)	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊 (津島岡大遺跡第17次・22次調査)	2005年3月
78	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第34号	2005年10月
79	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第35号	2006年3月
80	津島岡大遺跡17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊 (津島岡大遺跡第23次・24次調査)	2006年3月
81	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-紀要 2004	2006年3月
82	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第36号	2006年10月
83	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-紀要 2005	2007年3月
84	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第37号	2007年3月
85	鹿田遺跡 5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊 (鹿田遺跡第7次・8次調査)	2007年3月
86	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第38号	2007年10月
87	津島岡大遺跡18 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊 (津島岡大遺跡第28次調査)	2008年3月
88	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-紀要 2006	2008年3月
89	岡山大学理蔵文化財調査研究センターの20年 -自然と人間、地中に埋もれた命の対話-	2008年3月
90	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第39号	2008年3月
91	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第40号	2008年9月
92	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-紀要 2007	2008年12月
93	津島岡大遺跡19 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊 (津島岡大遺跡第30次調査)	2009年3月
94	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第41号	2009年3月
95	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-紀要 2008	2010年2月
96	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第42号	2010年2月
97	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第43号	2010年3月
98	鹿田遺跡 6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊 (鹿田遺跡第13次・15次調査)	2010年8月
99	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第44号	2010年12月
100	津島岡大遺跡20 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第27冊 (津島岡大遺跡第32次調査)	2011年3月
101	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第45号	2011年3月
102	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-紀要 2009	2011年3月
103	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第46号	2011年11月
104	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第47号	2012年3月
105	岡山大学理蔵文化財調査研究センター-紀要 2010	2012年3月

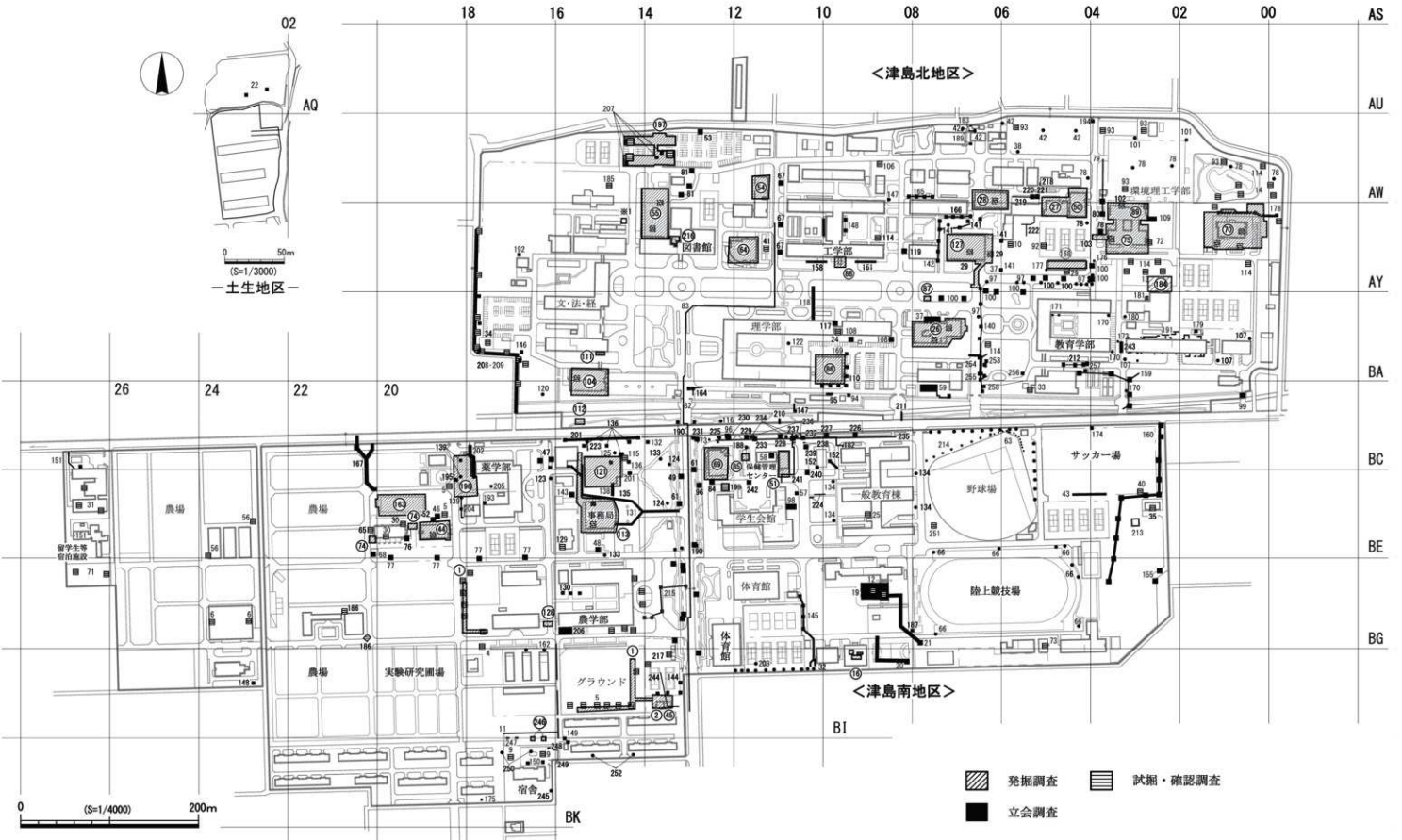
番号	名 称	発行年月日
106	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第48号	2012年9月
107	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2011	2013年1月
108	鹿田遺跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊 (鹿田遺跡第10次、18次調査B・C地点)	2013年3月
109	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第49号	2013年3月
110	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第50号	2013年10月
111	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2012	2013年12月
112	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第51号	2013年12月
113	鹿田遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊 (鹿田遺跡第14次調査)	2014年3月
114	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第52号	2014年12月
115	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第53号	2015年3月
116	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2013	2015年3月
117	津島岡大遺跡21 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第30冊 (津島岡大遺跡第33次調査)	2015年3月
118	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第54号	2015年10月
119	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第55号	2016年2月
120	鹿田遺跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊 (鹿田遺跡第23次調査)	2016年2月
121	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2014	2016年3月
122	吉備の弥生時代	2016年3月
123	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第56号	2016年12月
124	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2015	2017年3月
125	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第57号	2017年3月
126	鹿田遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊 (鹿田遺跡第9・11次調査)	2017年3月
127	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第58号	2017年10月
128	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第59号	2018年1月
129	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2016	2018年2月
130	鹿田遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊 (鹿田遺跡第24次調査)	2018年3月
131	鹿田遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊 (鹿田遺跡第20A・25次調査)	2018年3月
132	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第60号	2018年8月
133	岡山大学理蔵文化財調査研究センター報 第61号	2019年3月
134	岡山大学理蔵文化財調査研究センター紀要 2017	2019年3月
135	鹿田遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第35冊 (鹿田遺跡第26次調査)	2019年3月



付図1 岡山大学の位置と周辺の遺跡分布 (縮尺1/50,000・1/3,750,000)

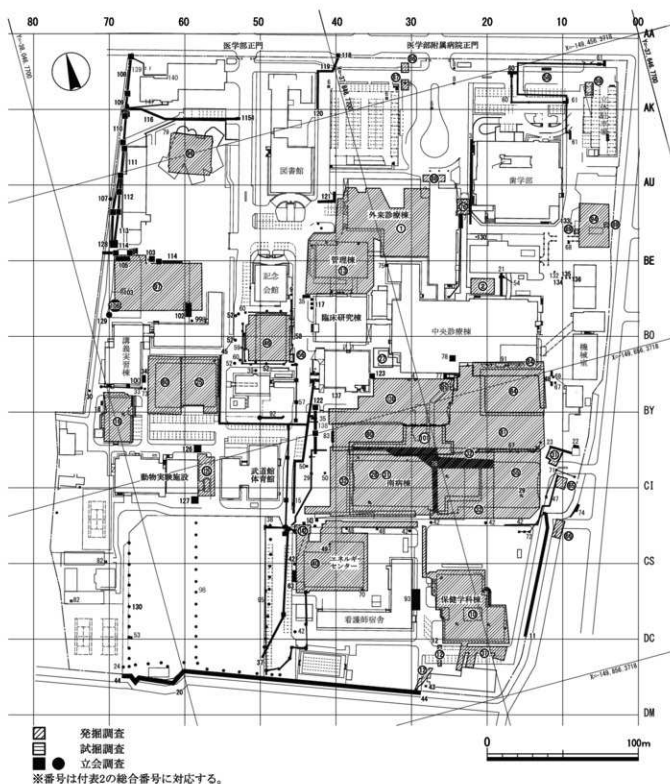


付図2 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)

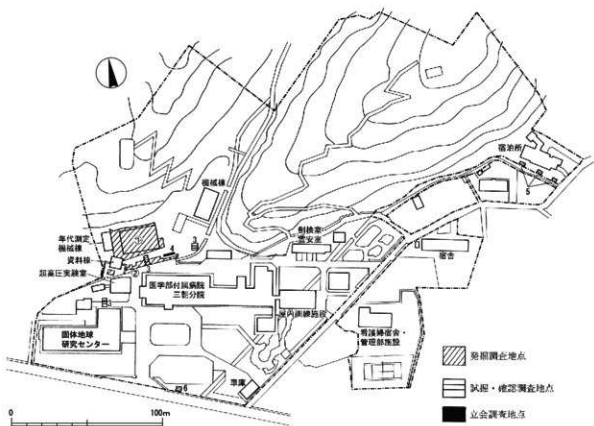


付図3 2017年度以前の調査地点【1】—津島地区— (縮尺: 津島地区: 1/4,000・土生地区: 1/3,000) ※番号は付表2の総合番号に対応する。

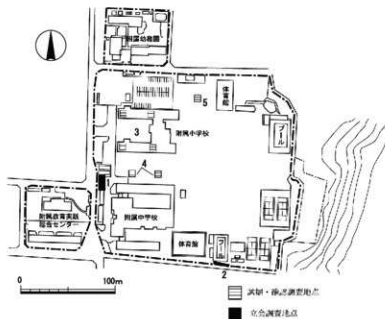




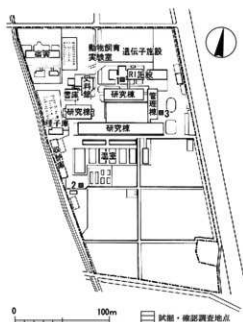
付図4 2017年度以前の調査地点【2】-鹿田地区- (縮尺1/2500)



付図5 2017年度以前の調査地点【3】  
 -三朝地区- (縮尺1/2,500)



付図6 2017年度以前の調査地点【4】  
 -東山地区- (縮尺1/4,000)



付図7 2017年度以前の調査地点【5】  
 -倉敷地区- (縮尺1/4,000)

### 3. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター30年間の業務関連資料

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター業務一覧：1983（昭和58）～2017（平成29）年度

※1983～1987年度は埋蔵文化財調査室、1988年度以降は埋蔵文化財調査研究センター

1. 発掘調査：発掘件数63件 発掘総面積54171m<sup>2</sup> 年平均調査面積 1548m<sup>2</sup>
  - ・1983～1987年度 8件 総面積8217m<sup>2</sup> 年平均調査面積 1643.4m<sup>2</sup>
  - ・1988～2007年度 42件 総面積33199m<sup>2</sup> 年平均調査面積 1659.9m<sup>2</sup>
  - ・2008～2017年度 15件 総面積12755m<sup>2</sup> 年平均調査面積 1275.5m<sup>2</sup>
2. 試掘・確認調査：調査件数66件 年平均1.9件
  - ・1983～1987年度 20件 年平均4件
  - ・1988～2007年度 32件 年平均1.6件
  - ・2008～2017年度 13件 年平均1.3件
3. 立会調査：年間20～50件
4. 分布調査：計4回 1986年度 半田山塊/1987年度 本島/1989年度 本島/1989年度 三朝地区
5. 測量調査：計3回 1989年度 半田山塊/1997年度 陸軍関連庭園（文法経）/  
2006年度 陸軍橋梁演習場
6. 刊行物
  - ・発掘調査報告書 34冊  
(1983～1987年度：3冊、1988～2007年度：21冊、2008～2017年度：10冊)
  - ・構内遺跡調査研究年報 18冊  
(1983～1987年度：4冊、1988～2000年度：14冊)
  - ・紀要 17冊 (2001～2007年度：7冊、2008～2017年度：10冊)
  - ・センター報 1～61号 (1988～2007年度：1～39号、2008～2017年度：40～59号)
  - ・その他 4冊 (1997『今、よみがえる古代』、2000『自己評価・外部評価報告書』、  
2008『岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年』、2016『吉備の弥生時代』)
7. 収蔵遺物：3852箱  
(1983～1987年度：1101箱、1988～2007年度：1914箱、2008～2017年度：837箱)
8. 自然科学的分析
  - a. 年代測定26件/b. 植物珪酸体16件/c. 花粉分析15件/d. 珪藻分析3件/e. 植物種子17件/  
f. 植物遺存体9件/g. 動物遺存体16件/h. 樹種同定37件/i. その他28件
9. 遺物の保存処理
  - ・外部委託 (42件)
  - ・センター内でのPEG含浸処理 1992～2017年度：13回
10. 展示：24回  
(津島地区16回、鹿田地区4回、岡山シティミュージアム（岡山市デジタルミュージアム）4回)
11. 公開講座：6回（2016年度より年3回開催）
12. 教育面での受け入れ状況：26件  
中学生職場体験：2003～2017年度15件、小・中学生の総合学習1997～2017年度：6件、その他：5件
13. OJTおよびワークスタディ：11件  
OJT：2010～2017年度6件、ワークスタディ：2010～2017年度5件
14. 科学研究費・外部資金採択状況：計39件（2008～2017年度）

付表6 自然科学的分析一覧（1983～2017年度）

凡例 ・各項目における分析者の所属は、分析依頼当時の名称である。

・☆：下記の研究費使用の分析を示す

1. 山本奨 2000-2001年度基盤研究（C）②「縄文時代の景観認識と生態に関する実証的研究」
2. 山本奨 2002-2003年度基盤研究（C）②「縄文時代から弥生時代における景観比較と植物遺体の標本化」
3. 2014-2015年度理山大学最先端分野融合研究領域文化財研究コア「先端技術を用いた古墳地域環境文化財の異分野融合研究」

・件数は必ずしも分析資料点数を示すものではない

・報告：発掘調査報告書

## a. 年代測定（26件）

遺跡名	調査地点	種類	点数	分析方法	測定値の報告	分析機関・分析者
津島岡大	第3次調査	貯蔵穴内壺葉類	1	放射性炭素年代測定	報告19・紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第3次調査	貯蔵穴内壺葉類	1	放射性炭素年代測定	-	国立歴史民俗博物館
津島岡大	第3次調査	土器付着炭	2	放射性炭素年代測定	紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第3次調査	土器付着炭	1	放射性炭素年代測定	紀要2017	国立歴史民俗博物館
					紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第5次調査	土器付着炭	1	放射性炭素年代測定	紀要2017	国立歴史民俗博物館
					紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第7次調査	炉内炭化物	1	放射性炭素年代測定	報告9・紀要2004	学習院大学 木越邦彦
津島岡大	第8次調査	炉内炭化物	3	放射性炭素年代測定	報告8・紀要2004	学習院大学 木越邦彦
津島岡大	第15次調査	貯蔵穴内壺葉類	1	放射性炭素年代測定	報告19・紀要2011	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第15次調査	貯蔵穴内壺葉類	2	放射性炭素年代測定	紀要2017	国立歴史民俗博物館
津島岡大	第15次調査	土器付着炭	2	放射性炭素年代測定	紀要2017	国立歴史民俗博物館
					紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第17次調査	住居内炉の炭化物	2	放射性炭素年代測定	報告21・紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第17次調査	土器内炭化物	2	放射性炭素年代測定	報告21・紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第22次調査	土器内炭化物	2	放射性炭素年代測定	報告22・紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第23次調査	土器付着炭	2	放射性炭素年代測定	報告22・紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第23次調査会1	杭	1	放射性炭素年代測定	報告22	神古環境研究所（Beta社）
					紀要2011	紀要2004
津島岡大	第23次調査	杭・木材	5	放射性炭素年代測定	報告22・紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第27次調査	炉内炭化物／炭化物	2	放射性炭素年代測定	報告18・紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第28次調査会2	杭	1	放射性炭素年代測定	報告24・紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	試験（T37）	土器内炭化物	1	放射性炭素年代測定	紀要2004	神古環境研究所（Beta社）
津島岡大	第7次調査	炉内炭化物	1	熱発光測定	報告9・紀要2004	高橋大 時枝克彦
津島岡大	第30次調査	炭化物	2	放射性炭素年代測定	報告25	神古環境研究所
津島岡大	第32次調査	炭本	1	放射性炭素年代測定	報告27	神古環境研究所
津島岡大	ボランティア調査No1☆3	炭化物	5	放射性炭素年代測定	紀要2016	神パレオラボ
鹿田	第7次調査	土器付着炭	1	放射性炭素年代測定	報告23	神古環境研究所（Beta社）
鹿田	第7次調査	土器付着炭炭化物	1	放射性炭素年代測定	報告23	神古環境研究所（Beta社）
鹿田	第23次調査	炭化材	2	放射性炭素年代測定	報告31	パレオラボAMS年代測定グループ

## b. 植物遺体分析（16件）

遺跡名	調査地点	種類	報告	分析機関・分析者
津島岡大	第2次調査	土壌	報告2	大分短期大学 佐々木章
津島岡大	第5次調査	土器胎土	報告7	宮崎大学 藤原宏志
津島岡大	第17・22次調査	土壌	報告21	神古環境研究所
津島岡大	第23次調査会1	土壌	報告22	神古環境研究所
津島岡大	第27次調査	土壌	報告18	神古環境研究所
津島岡大	第28次調査会2	土壌	報告24	神古環境研究所
津島岡大	試験（T37）☆1	土壌	紀要2006	神古環境研究所
津島岡大	立会	土壌	紀要2006	宮崎大学 宇田津敏樹
津島岡大	第30次調査	土壌	報告25	宮崎大学 宇田津敏樹
津島岡大	第34次調査	土壌	紀要2010	神古環境研究所
津島岡大	第32次調査	土壌	報告27	神古環境研究所
津島岡大	第33次調査	土壌	報告30	神古環境研究所
津島岡大	南東部試験	土壌	紀要2016	神古環境研究所
鹿田	第13次調査	土壌	報告26	神古環境研究所
鹿田	第14次調査	土壌	報告29	神古環境研究所
鹿田	第23次調査	土壌	報告31	神古環境研究所

## c. 花粉分析 (15件)

遺跡名	調査年度	種類	報告	分析機関・分析者
津島岡大	第2次調査	土壌	報告2	岡山理科大学 三好義夫
津島岡大	第6次調査	土壌	報告9	岡山理科大学 三好義夫
津島岡大	第8次調査	土壌	報告9	岡山理科大学 三好義夫
津島岡大	第23次調査合1	土壌	報告22	和古墳地研究所
津島岡大	第27次調査	土壌	報告18	和古墳地研究所
津島岡大	第28次調査合2	土壌	報告24	和古墳地研究所
津島岡大	試掘(137)合1	土壌	-	和古墳地研究所
津島岡大	第34次調査	土壌	紀要2010	和古墳地研究所
津島岡大	第32次調査	土壌	報告27	和古墳地研究所
津島岡大	第33次調査	土壌	報告30	和古墳地研究所
津島岡大	南東部試掘	土壌	紀要2016	和古墳地研究所
津島岡大	ボーリング塚No1合3	土壌	紀要2016	和ハレオラボ
鹿田	第13次調査合2	土壌	報告26	和古墳地研究所
鹿田	第14次調査	土壌	報告29	和古墳地研究所
鹿田	第23次調査	土壌	報告31	和古墳地研究所

## d. 珪藻分析 (3件)

遺跡名	調査地点	種類	点数	報告	分析機関・分析者
津島岡大	第30次調査	土壌	3	報告25	和古墳地研究所
津島岡大	ボーリング塚No1合3	土壌	5	紀要2016	和ハレオラボ
鹿田	第23次調査	土壌	5	報告31	和古墳地研究所

## e. 植物種子 (17件)

遺跡名	調査地点	分析方法	報告	分析者
津島岡大	第3次調査	顕微鏡観察	報告5	大阪千代田短期大学 豊田昭平
津島岡大	第5次調査	顕微鏡観察	報告7	岡山大学 沖藤子
津島岡大	第6次調査	顕微鏡観察	報告9	大阪千代田短期大学 豊田昭平
			年報13	岡山大学 沖藤子
津島岡大	第9次調査	顕微鏡観察	報告14	岡山大学 沖藤子
津島岡大	第15次調査	顕微鏡観察	報告19	岡山大学 沖藤子
津島岡大	第23次調査	顕微鏡観察	報告22	岡山大学 沖藤子
鹿田	第1次調査	顕微鏡観察	報告3	大阪府立大学 藤下典之
鹿田	第1次調査	顕微鏡観察	報告3	元岡山大学 笠原安夫・武田満子
鹿田	第3次調査	顕微鏡観察	報告4	東京大学 松谷晩子
鹿田	第3次調査	顕微鏡観察	報告4	大阪市立大学 豊田昭平
鹿田	第5次調査	顕微鏡観察	報告6	大阪市立大学 豊田昭平
鹿田	第5次調査	顕微鏡観察	紀要2002	元九州大学 小西盛
鹿田	第6次調査	顕微鏡観察	報告14	岡山大学 沖藤子
鹿田	第1・5・6・20次調査	DNA分析	紀要2012	弘前大学 田中克典・岡山大学 加藤健司
鹿田	第9・11次調査	顕微鏡観察	報告32	岡山大学 沖藤子
鹿田	第24次調査	顕微鏡観察	報告33	岡山大学 沖藤子
鹿田	第20次・25次調査地点	顕微鏡観察	報告34	岡山大学 沖藤子

## f. 植物遺存体 (9件)

遺跡名	調査地点	資料	分析方法	報告	分析者
津島岡大	第3次調査	炭化植物	走査顕微鏡観察	報告5	東京大学 松谷晩子
津島岡大	第5次調査	炭化植物	走査顕微鏡観察	報告7	東京大学 松谷晩子
津島岡大	第7次調査	炭化物含む土塊	炭像分析	年報12	東京大学 松谷晩子
鹿田	第1次調査	炭含む土塊	炭像分析	年報12	東京大学 松谷晩子
鹿田	第1次調査	炭化物	炭像分析	年報12	東京大学 松谷晩子
鹿田	第3次調査	炭化物	炭像分析	年報4	東京大学 松谷晩子
鹿田	第5次調査	炭含む土塊	炭像分析	年報12	東京大学 松谷晩子
鹿田	第9・11次調査	種子任意	顕微鏡観察	報告32	岡山大学 沖藤子
鹿田	第20次A・25次調査	種子任意	顕微鏡観察	報告34	岡山大学 沖藤子

### g. 動物遺存体 (16件)

遺跡名	調査地点	報告	分析機関・分析者
津島岡大	第9次調査	報告14	奈良国立文化財研究所 松井章
鹿田	第1次調査	報告3	岡山大学 島藤徹
鹿田	第1次調査	報告3	岡山大学 小田嶋信郎
鹿田	第1次調査	—	岡山大学 小田嶋信郎
鹿田	第1・2次調査	報告3	北治山女子短期大学 稲葉明彦
鹿田	第3・4次調査	報告4	奈良国立文化財研究所 松井章
鹿田	第5次調査	報告6	奈良国立文化財研究所 松井章
鹿田	第5次調査	報告6	岡山大学 小田嶋信郎
鹿田	第13次調査	報告36	岡山理科大学 宮岡直人・熊山智史
鹿田	第10次調査B地点	報告28	京都大学霊長類研究所 齋本裕子
鹿田	第14次調査	報告29	岡山理科大学 立石和也・宮岡直人
鹿田	第9次調査	報告32	上丹+浜邊跡・人類学ミュージアム 高松浩文
鹿田	第9次調査	報告32	岡山理科大学 江川達也
鹿田	第24次調査	報告33	岡山理科大学 江川達也
鹿田	第25次調査	報告34	上丹+浜邊跡・人類学ミュージアム 高松浩文
鹿田	第20次A・25次調査	報告34	岡山理科大学 江川達也

### h. 樹種同定 (37件)

遺跡名	調査次	分析方法	報告	分析機関・分析者
津島岡大	第3次調査	顕微鏡観察	報告5 (年報9・年報10に再録)	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第5次調査	顕微鏡観察	報告9 (年報10に再録)	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第6次調査	顕微鏡観察	報告9 (年報10に再録)	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第9次調査	顕微鏡観察	報告14	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第10次調査	顕微鏡観察	報告16	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第12次調査	顕微鏡観察	報告14 (報告16に再録)	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第15次調査	顕微鏡観察	報告19	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第17次調査	顕微鏡観察	報告21	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第19次調査	顕微鏡観察	報告17	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第22次調査	顕微鏡観察	報告21	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第23次調査	顕微鏡観察	報告22	森林総合研究所 鹿城博一 早稲田大学史学考古学研究所 佐々木山香
津島岡大	第26次調査	顕微鏡観察	報告20	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第27次調査	顕微鏡観察	報告18	考古環境研究所
津島岡大	第33次調査	顕微鏡観察	報告27	森林総合研究所 鹿城博一
津島岡大	第32次調査：アンブラ	顕微鏡観察	報告27	明治田生物研究所
鹿田	第1次調査	肉眼観察	報告3 (報告6・年報10に再録)	岡山大学 野崎誠
鹿田	第1次調査	顕微鏡観察	年報10	森林総合研究所 鹿城博一
鹿田	第2次調査	肉眼観察	報告6 (年報10に再録)	岡山大学 野崎誠
鹿田	第2次調査	顕微鏡観察	年報10	森林総合研究所 鹿城博一
鹿田	第3次調査	顕微鏡観察	報告4 (報告6・年報10に再録)	森林総合研究所 鹿城博一
鹿田	第5次調査	顕微鏡観察	報告6 (年報10に再録)	森林総合研究所 鹿城博一
鹿田	第7次調査	顕微鏡観察	報告23	森林総合研究所 鹿城博一
鹿田	第7次調査：動物	顕微鏡観察	報告23	明治田生物研究所
鹿田	第7次調査：装身部品	顕微鏡観察	報告23	卯元興寺文化財研究所
鹿田	第13-15次調査	顕微鏡観察	報告26	森林総合研究所 鹿城博一
鹿田	第13次調査：動物	顕微鏡観察	報告26	明治田生物研究所
鹿田	第21次調査	顕微鏡観察	紀要2010	森林総合研究所 鹿城博一
鹿田	第10・14・18D次調査	顕微鏡観察	報告28	森林総合研究所 鹿城博一
鹿田	第14次調査：焼・骨・木簡	顕微鏡観察	報告29	明治田生物研究所
鹿田	第23次調査：枕木	顕微鏡観察	報告31	森林総合研究所 鹿城博一
鹿田	第9・11次調査	顕微鏡観察	報告32	森林総合研究所 鹿城博一
鹿田	第9・11次調査：木簡	顕微鏡観察	報告32	卯元興寺文化財研究所
鹿田	第9・11次調査：編組部品	顕微鏡観察	報告32	明治田生物研究所
鹿田	第24次調査	顕微鏡観察	報告33	明治大学霊魂石研究センター 鹿城博一
鹿田	第24次調査：動物	顕微鏡観察	報告33	明治田生物研究所
鹿田	第25次調査：骨歌	顕微鏡観察	報告34	明治田生物研究所
鹿田	第20A・25次調査	顕微鏡観察	報告34	明治大学霊魂石研究センター 鹿城博一

## I. その他 (28件)

遺跡名	調査地点	資料の種類	目的・方法	報告	分析機関・分析者
津島岡大	第5～27次調査	石器・石材	石材分析	報告7～23	岡山大学 鈴木茂之
津島岡大	第10次調査	鉄器	成分分析	紀要3003	川鉄テクノリサーチ
津島岡大	第19次調査	鉄器	成分分析	紀要3003	川鉄テクノリサーチ
津島岡大	第5次調査	漆塗り型輪	赤色顔料成分分析(炭粉)	年報11	東京都理化学研究所 岡田文男
津島岡大	第5次調査	赤色顔料塗布具栓	赤色顔料成分分析(水銀系)	報告7	徳島県立博物館 魚島純一
津島岡大	第12次調査	移火矢	火薬成分分析	紀要3003	岡山大学 松田敏彦
津島岡大	第12次調査	移火矢	金属・定量分析	報告16	岡山大学 柴田次夫
津島岡大	第5次調査	縄文土器胎土	粒度組成分析	報告7	帝京大学 河西学
津島岡大	第19次調査	土壌	粒度組成分析	報告17	岡山大学 鈴木茂之
津島岡大	第28次調査	土壌(黒色土)	成分分析	紀要3003	岡山理科大学 白石純
津島岡大	第15次調査	土壌	薄片顕微鏡観察	紀要3012	岡山大学 鈴木茂之・山本悦彦
鹿田	第1・2次調査	石器・石材	石材分析	報告3	岡山理科大学 三宅寛
鹿田	第2～8次調査	石器・石材	石材分析	報告7～23	岡山大学 鈴木茂之
鹿田	第1次調査	ガラス片	成分分析	報告3	東京国立文化財研究所 三浦定機 株式会社ニコン 鳥谷道郎
鹿田	第1次調査	土壌中の赤色顔料	成分分析(ベンゾラ)	報告3	岡山大学 滝見千代子
鹿田	第7次調査	塗器木製品	赤色顔料分析	報告23	神元彌寺文化財研究所
鹿田	第12次調査	漆塗り碗	漆分析	-	神元彌寺文化財研究所
鹿田	第7次調査	漆塗り碗	漆膜構造分析	報告23	神古田生物研究所
鹿田	第14次調査	漆塗り碗	漆膜構造分析	報告29	神古田生物研究所
鹿田	第23次調査	原患部	胎土分析	報告31	岡山理科大学 白石純
鹿田	第14次・15次自調査	漆塗り碗ほか	漆膜構造分析	紀要3013	神古田生物研究所
鹿田	第9次調査	漆塗り碗	漆膜構造分析・胎料分析	報告32	神元彌寺文化財研究所
鹿田	第9次調査	漆塗り碗	漆膜構造分析・胎料分析	報告32	神古田生物研究所
鹿田	第9次調査	石鏡	成分分析	報告32	岡山理科大学 白石純
鹿田	第25次調査	烏帽子	漆膜構造分析	報告33	神古田生物研究所
鹿田	-	原患部	胎土分析	紀要3016	岡山理科大学 白石純
福呂	第1次調査	原曜石・安山岩	石影産地同定	報告15	岡山理科大学 白石純
福呂	-	石鏡	成分分析	紀要3016	岡山理科大学 白石純・南郷太郎

付表7 遺物の保存処理（木製品ほか）（1983～2017年度）

## a. 外部委託

遺物名	点数	遺物	委託機関	保存処理法
津島岡大第6次	1	アンペラ	御元興寺文化財研究所	PEG含浸処理方法
奥田遺跡第1次	34	木製短甲ほか	御元興寺文化財研究所	PEG含浸処理方法/アルコール・キシレン製法
奥田遺跡第2次	13	筒甲ほか	御元興寺文化財研究所	PEG含浸処理方法/アルコール・キシレン製法
奥田遺跡第3次	2	籠形木製品	御元興寺文化財研究所	PEG含浸処理方法
奥田遺跡第5次	11	下駄ほか	御元興寺文化財研究所	PEG含浸処理方法/アルコール・キシレン製法
奥田遺跡第6次	1	曲げ物	御元興寺文化財研究所	アルコール・キシレン製法
津島岡大第5次	1	漆塗り物	御元興寺文化財研究所	PEG含浸処理方法
津島岡大第6次	1	人形木製品	御元興寺文化財研究所	アルコール・キシレン製法
奥田遺跡第5次	1	柄付き刀子	90京都府歴史文化財研究所 御田文庫	高級アルコール法
津島岡大第15次	21	アンペラ	御吉田生物研究所	高級アルコール法
津島岡大第9次	2	杵子、刀形木製品	御吉田生物研究所	高級アルコール法
津島岡大第10次	1	箆	御吉田生物研究所	高級アルコール法
津島岡大第12次	13	農具、棒式火鉢ほか	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第7次	1	籠形木製品	御元興寺文化財研究所	アルコール・キシレン製法
奥田遺跡第9次	2	木箱	御元興寺文化財研究所	アルコール・キシレン製法
奥田遺跡第9次	1	漆塗り物	御元興寺文化財研究所	凍結乾燥法
奥田遺跡第11次	1	木箱	御元興寺文化財研究所	アルコール・キシレン製法
奥田遺跡第12次	1	漆塗り物	御元興寺文化財研究所	凍結乾燥法
津島岡大第23次	1	籠の腰掛け	御元興寺文化財研究所	凍結乾燥法
奥田遺跡第9次	1	漆塗り物	御元興寺文化財研究所	アルコール・キシレン製法
奥田遺跡第13次	2	曲げ物	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第14次	3	木箱、櫛、漆桶	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第7次	2	曲げ物、漆桶	御吉田生物研究所	高級アルコール法
津島岡大第22次	1	アンペラ	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第17次	1	漆塗り物	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第18次	2	漆塗り物	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第20次	1	漆塗り物	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第12次	1	籠	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第18次	1	漆塗り容器	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第21次	2	陶器形木製品ほか	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第9次	1	アンペラ	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第18次	1	籠形木製品	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第14次	1	漆塗り物	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第18次	1	漆塗り物	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第25次	1	鳥帽子ほか	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第25次	1	釣籠	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第24次	2	曲げ物	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第26次	1	曲げ物	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第25次	2	青磁瓶	徳京郡科学	補修
奥田遺跡第17次	2	土師器	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第25次	1	漆塗り物	御吉田生物研究所	高級アルコール法
奥田遺跡第26次	—	漆塗り物	御吉田生物研究所	凍結乾燥のみ



付表8 展示会実施状況

展示会回数：24回、見学者総数15,313人

(津島地区：16回、鹿田地区：4回、岡山市ティミュージアム（岡山市デジタルミュージアム）：4回)

回数	タイトル	開催期間	見学者数 (人)	開催場所
1	縄文・弥生の食生活	1989.11.16-11.18	282	津島地区：学生会館
2	まつり・舟戸・墓・祈り	1990.11.3-11.4	174	鹿田地区：医学部基礎医学棟2階
3	津島と鹿田の4000年	1997.11.14-11.16	363	津島地区：学生会館
4	キャンパス祭開成展覧	2000.10.16-10.31	188	
5	のびてみよう！縄文センター	2001.10.20-11.2	217	津島地区：縄文文化財調査研究センター
6	焼ってみよう！石の道場	2002.10.21-11.1	252	
7	鹿田遺跡発掘30周年特別展示	2003.10.18-10.24	370	鹿田地区：病棟1階
8	遺跡の上層を切る	2003.10.27-11.1	109	津島地区：縄文文化財調査研究センター
9	土・技・心	2004.10.26-10.31	253	
10	鹿田遺跡と鹿田庄	2005.10.20-10.22	344	鹿田地区：病棟1階
11	行き交う人との跡	2005.10.26-10.30	114	津島地区：縄文文化財調査研究センター
12	兵どもが夢の跡	2006.11.15-11.19	255	津島地区：図書資料棟
13	特別展 自然と人間、地中に埋もれた命の対話	2007.6.5-6.17	2161	岡山市デジタルミュージアム
14	水と権徳	2009.1.8-1.12	308	津島地区：創立50周年記念館会議室
15	特別展 水と人の環境史ー岡山平野の五千年ー	2009.8.5-8.23	2300	岡山市デジタルミュージアム
16	謎の狩猟鹿田庄ー集落・奈良・領域ー	2011.1.6-1.10	276	津島地区：創立50周年記念館交流サロン
17	書物のはじまりを考えるー考古学と自然科学の融合、津島岡大遺跡での実践ー	2011.7.13-18.12.11	366	津島地区：創立50周年記念館交流サロン・会議室
18	縄文時代の環境変化と植物利用ー四千年前の津島岡大遺跡ー	2012.9.19-9.23	264	津島地区：創立50周年記念館交流サロン・会議室
19	鹿田庄の世界	2013.10.21-11.1	2397	鹿田地区：外来診療棟1階
20	特別展 鹿田発掘30年ー弥生時代を語るー	2014.2.7-2.23	2064	岡山シティミュージアム
21	鹿田庄の人と時代	2015.1.7-12	545	津島地区：創立50周年記念館交流サロン・会議室
22	土に歴史をよむ！平野のななりとめくみ	2016.2.9-14	363	津島地区：創立50周年記念館交流サロン・会議室
23	縄文時代ー古代・中世の木工ー出土品にのこされた技術と知恵ー	2016.12.7-11	197	津島地区：大会堂ホール
24	特別展：瀬戸内海が育んだ交流の記憶	2018.1.19-3.4	1417	岡山シティミュージアム

付表9 公開講座実施状況

年度	回	テーマ	参加者数 (人)	講師	会場
2016	1	植物と人の かかわり	40	沖降子（大学院環境生命科学専攻教授） 「足元の雑草 縄文時代から現代、そして未来までの変遷」 山本悦貴（本センター教授）「縄文時代の植物利用から現在までへ」	新風同書館 ラーニングコモンズ
	2	ウリとモモ 人のかかわり	43	田中克典（応用大生体生命科学部助教授） 「出土ウリの形状分析とDNA分析からわかること」 南健太郎（本センター助教）「モモの考古学」	新風同書館 セミナー室
	3	城下町と農村	48	倉地克直（岡山大学特命教授）「船岡にみる岡山城下町」 山口康治（本センター助教）「野虫とリサイクル」	文化科学系総合研究棟共同研究室
2017	4	武器と戦い	39	松本武彦（国立歴史民俗博物館教授）「戦いの考古学」 岩崎志保（本センター助教）「移火からみた暮しの戦い」	文化科学系総合研究棟共同研究室
	5	人骨と社会	61	高松浩文（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム学芸員） 「人骨から何がわかるのか？」 諸家幸（大学院社会文化科学研究科教授）「弥生ー古墳時代の男と女」	岡山シティミュージアム講義室
	6	土器の科学	28	白石純（岡山理科大学生物地球学専攻教授）「土器胎土からわかるモノの移動」 野崎貴博（本センター助教）「縄文土器の文様と造形」	文化科学系総合研究棟共同研究室

※2017年度以降有料化

付表10 科学研究費・外部資金採択状況 (2008～2017年度)

年度	名前	種別・テーマ
2008	山本 悦哉	基盤研究A「レブリカ・セム法による弥生時代東部地方の植物炭化過程の実証的研究」(研究分担者)
	野村 貴博	基盤研究A「古山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時間研究の刷新」(研究分担者)
	光本 昭	基盤研究A「古山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時間研究の刷新」(研究分担者)
2009	山本 悦哉	基盤研究A「レブリカ・セム法による弥生時代東部地方の植物炭化過程の実証的研究」(研究分担者)
	野村 貴博	若手研究B「吉備地域における群小墳の展開過程からみた古墳時代社会構造の研究」(研究代表者)
	野村 貴博	基盤研究A「古山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時間研究の刷新」(研究分担者)
2010	山本 悦哉	基盤研究A「レブリカ・セム法による弥生時代東部地方の植物炭化過程の実証的研究」(研究分担者)
	野村 貴博	若手研究B「吉備地域における群小墳の展開過程からみた古墳時代社会構造の研究」(研究代表者)
	野村 貴博	基盤研究A「古山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時間研究の刷新」(研究分担者)
2011	山本 悦哉	基盤研究A「レブリカ・セム法による弥生時代東部地方の植物炭化過程の実証的研究」(研究分担者)
	野村 貴博	若手研究B「吉備地域における群小墳の展開過程からみた古墳時代社会構造の研究」(研究代表者)
	野村 貴博	基盤研究A「古山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時間研究の刷新」(研究分担者)
2012	野村 貴博	若手研究B「古山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時間研究の刷新」(研究分担者)
	野村 貴博	基盤研究A「古山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時間研究の刷新」(研究分担者)
	野村 貴博	若手研究B「古山古墳群を例とするデジタルアーカイブの構築と時間研究の刷新」(研究分担者)
2013	山口 雄治	株式会社パレオ・ラボ若手研究費を支援する研究助成(第5期)「『C14年代測定を利用した中央アトリア前期新石器時代における土器層の構築と地域文化交流に関する年代学的研究』(研究代表者)
	山口 雄治	基盤研究B「縄文・弥生時代の人口シミュレーションと文化変化モデルの構築」(研究分担者)
	南 鏡太郎	平成25年度徳島県特別研究「石橋技術からみた古代山城築造集積の研究」(研究代表者)
2014	山口 雄治	公益財団法人福寿財団第9回県内文化研究・活動助成「備前川内海沿岸文化景観の基盤の体験学習型歴史-歴史と食を通じた環境多様性と文化景観の理解-」(研究代表者)
	山本 悦哉	基盤研究C「岡山県南部地域における縄文-弥生時代の古地形復元と遺跡動態に関する考古学的研究」(研究代表者)
	野村 志保	基盤研究C「岡山県南部地域における縄文-弥生時代の古地形復元と遺跡動態に関する考古学的研究」(研究分担者)
2015	野村 貴博	基盤研究B「前方後円墳の二次元計測とそれにもとづく設計原理の検討」(研究分担者)
	南 鏡太郎	若手研究B「銅鐸の使用痕分析による弥生時代祭祀構造の再構築」(研究代表者)
	山口 雄治	基盤研究C「岡山県南部地域における縄文-弥生時代の古地形復元と遺跡動態に関する考古学的研究」(研究分担者)
2016	山本 悦哉	基盤研究C「岡山県南部地域における縄文-弥生時代の古地形復元と遺跡動態に関する考古学的研究」(研究代表者)
	野村 志保	基盤研究C「岡山県南部地域における縄文-弥生時代の古地形復元と遺跡動態に関する考古学的研究」(研究分担者)
	野村 貴博	基盤研究B「前方後円墳の二次元計測とそれにもとづく設計原理の検討」(研究分担者)
2017	南 鏡太郎	若手研究B「銅鐸の使用痕分析による弥生時代祭祀構造の再構築」(研究代表者)
	山口 雄治	基盤研究C「岡山県南部地域における縄文-弥生時代の古地形復元と遺跡動態に関する考古学的研究」(研究分担者)
	山口 雄治	公益財団法人福寿財団第10回県内文化研究・活動助成「中央アトリアにおける銅石器-前期新石器時代の年代学的研究」(研究代表者)

付表11 調査とスタッフの推移 (2008～2017年度)

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
業務件数	2	3	5	1	2	2	2	1	0	1
調査面積	292	3497	2955	533	2479	730	2191	44	0	35
試掘件数	1	3	3	1	1	3	0	1	1	0
調査員数	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
センター長	北尾	北尾	北尾	北尾	北尾・門岡	門岡	門岡	門岡	宮田	菅
副センター長	新納	新納	新納	新納	新納	新納	新納	新納	山本	山本
室長	山本	山本	山本	山本	山本	山本	山本	山本	清家	清家
教授	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
助教	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
特別契約職員	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
室内補佐	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
室内補助	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3

付表12 埋蔵文化財調査研究センター運営委員・調査研究専門委員・教職員一覧（2008～2017年度）

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013
運営委員	大塚 愛二 沖 陽子 北尾 善信 柴田 次夫 新納 泉 久野 修義 山下 隆幸 山本 悦哉	大塚 愛二 沖 陽子 北尾 善信 柴田 次夫 新納 泉 久野 修義 山下 隆幸 山本 悦哉	大塚 愛二 沖 陽子 北尾 善信 柴田 次夫 新納 泉 久野 修義 山下 隆幸 山本 悦哉	秋山 明寛 大塚 愛二 沖 陽子 北尾 善信 柴田 次夫 新納 泉 久野 修義 山本 悦哉	秋山 明寛 大塚 愛二 沖 陽子 北尾 善信→門岡 新一 柴田 次夫 新納 泉 久野 修義 山本 悦哉	秋山 明寛 大塚 愛二 沖 陽子 門岡 新一 鈴木 茂之 新納 泉 久野 修義 松本 武彦 山本 悦哉
調査研究専門委員	今津 勝紀 沖 陽子 鈴木 茂之	今津 勝紀 沖 陽子 鈴木 茂之	今津 勝紀 沖 陽子 鈴木 茂之	今津 勝紀 沖 陽子 鈴木 茂之	今津 勝紀 沖 陽子 鈴木 茂之	今津 勝紀 沖 陽子 鈴木 茂之
教職員 (教員・技術補佐員・補助員)	池田 晋 岩崎 志保 野崎 貴博 光本 順 山本 悦哉 上地 洋子 →井上 佐智 西本 尚美 山口 雄治 井口 三智子 片山 純子 黒瀬 三代子	池田 晋 岩崎 志保 野崎 貴博 光本 順 山本 悦哉 井上 佐智 西本 尚美 山口 雄治 井口 三智子 片山 純子 黒瀬 三代子	池田 晋 岩崎 志保 野崎 貴博 光本 順 山本 悦哉 井上 佐智 内田 綾子 大嶋 紗恵子 木下 洋子 西本 尚美 井口 三智子	岩崎 志保 野崎 貴博 光本 順 南 健太郎 山本 悦哉 井上 佐智 →合田 治美 内田 綾子 大嶋 紗恵子 木下 洋子 西本 尚美 井口 三智子	岩崎 志保 野崎 貴博 光本 順→池野 晋平 南 健太郎 山本 悦哉 井上 佐智 内田 綾子 大嶋 紗恵子 木下 洋子 西本 尚美 井口 三智子	岩崎 志保 野崎 貴博 南 健太郎 山口 雄治 (8月～) 山本 悦哉 井上 佐智 大嶋 紗恵子 小野 薫子 木下 洋子 西本 尚美 井口 三智子

年度	2014	2015	2016	2017
運営委員	大塚 愛二 沖 陽子 門岡 新一 岩崎 茂弘 鈴木 茂之 新納 泉 久野 修義 山本 悦哉	大塚 俊孝 沖 陽子 門岡 新一 岩崎 茂弘 鈴木 茂之 清家 幸 新納 泉 松山 忠生 久野 修義 宮田 裕州 山本 悦哉	大塚 俊孝 沖 陽子 鈴木 茂之 清家 幸 新納 泉 久野 修義 松山 忠生 宮田 裕州 山本 悦哉	今津 勝紀 大塚 俊孝 加藤 謙司 菅 風治 鈴木 茂之 清家 幸 新納 泉 松山 忠生 山本 悦哉
調査研究専門委員	今津 勝紀 加藤 謙司 鈴木 茂之	今津 勝紀 加藤 謙司 鈴木 茂之	今津 勝紀 加藤 謙司 鈴木 茂之	今津 勝紀→徳永 馨子 (8月～) 加藤 謙司→横田 史 (8月～) 鈴木 茂之 吉村 悠司 (8月～)
教職員 (教員・技術補佐員・補助員)	岩崎 志保 野崎 貴博 南 健太郎 山口 雄治 山本 悦哉 大久保 肇子 井上 佐智 大嶋 紗恵子 小野 薫子 木下 洋子 西本 尚美 井口 三智子	岩崎 志保 野崎 貴博 南 健太郎 山口 雄治 山本 悦哉 大久保 肇子 井上 佐智 大嶋 紗恵子 小野 薫子 木下 洋子 西本 尚美 井口 三智子	岩崎 志保 野崎 貴博 南 健太郎 山口 雄治 山本 悦哉 大久保 肇子 井上 佐智 大嶋 紗恵子 小野 薫子 木下 洋子 西本 尚美 井口 三智子	岩崎 志保 野崎 貴博 南 健太郎 山口 雄治 山本 悦哉 有賀 紅美 井上 佐智 大嶋 紗恵子 小野 薫子 木下 洋子 西本 尚美 井口 三智子

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University

Printed in Okayama, Japan

---

---

2020年3月27日 印刷

2020年3月27日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要  
2018

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
岡山市北区津島中三丁目1番1号  
(086) 251-7290

印刷 友野印刷株式会社

---

---



**BULLETIN of  
Archaeological Research Center  
Okayama University  
2018**

Archaeological Research Center, Okayama University  
3-1-1 Tsushima-Naka Kita-ku Okayama-city, 700-8530 Japan  
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>